



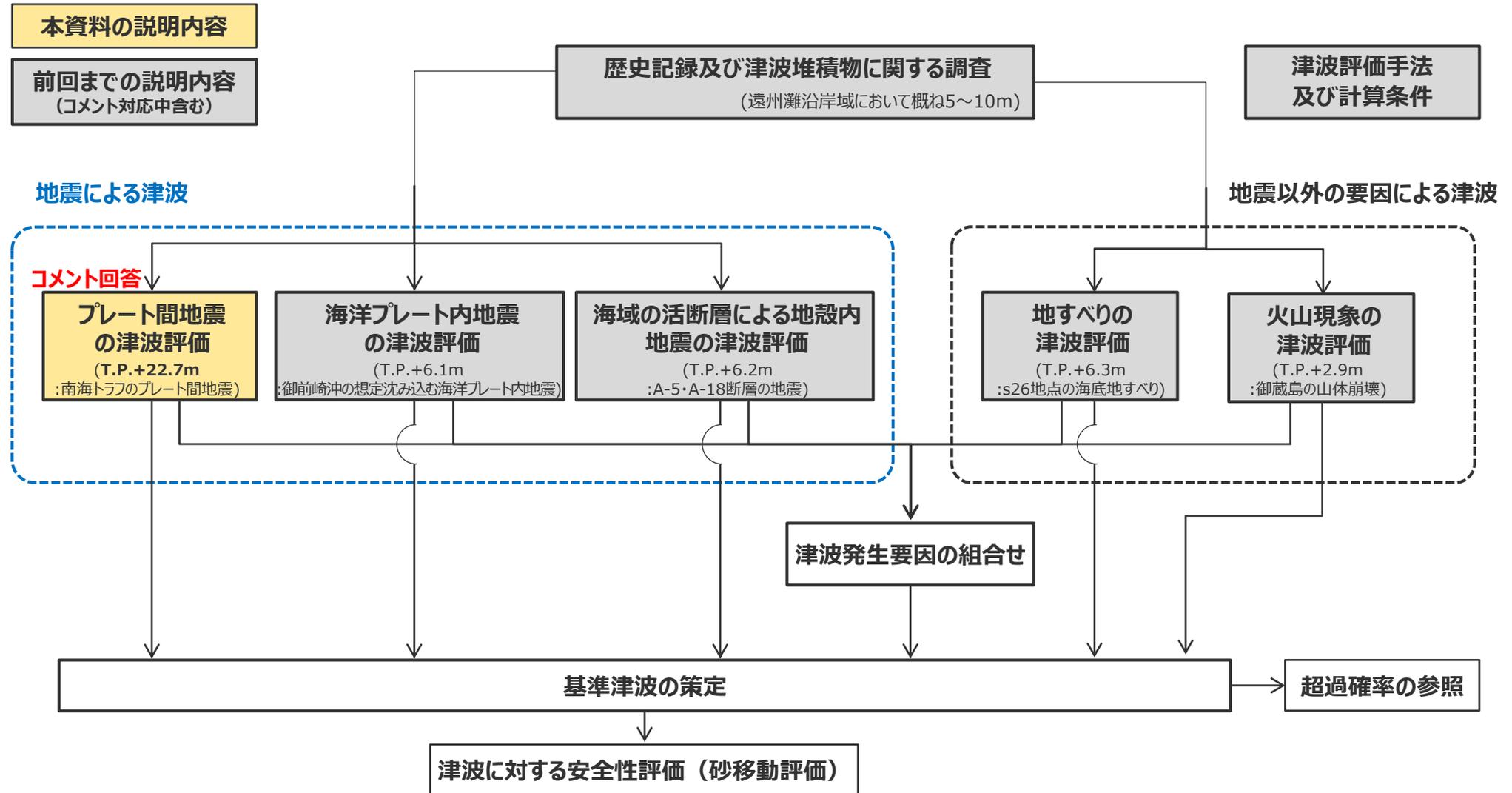
中部電力

浜岡原子力発電所  
地震による津波のうち  
プレート間地震の津波評価について  
(コメント回答)

2024年2月9日

# 本資料の説明内容

■ 本資料の説明内容は以下に示すとおり。



・それぞれの津波発生要因の津波評価等の下には、津波の大きさの程度を示すため、敷地前面の津波高（現時点の評価結果）等を記載している。なお、津波発生要因の組合せの津波高は、検討中のため記載していない。

# プレート間地震の津波評価 コメント一覧表

項目	No.	コメント内容	コメント回	備考
プレート間地震の津波評価	1	<b>【プレート間地震の津波評価の方針、論理構成、評価結果の再点検】</b> <ul style="list-style-type: none"><li>プレート間地震の津波評価の方針、論理構成を再点検し、痕跡再現モデルあるいは検討波源モデルの位置づけ、パラメータスタディやパラメータスタディの幅などを含め、一連の体系的な内容として整理されているかを確認して説明すること。</li><li>検討波源モデルのパラメータスタディを再点検し、評価に漏れがなく、評価結果が変わらないかを確認して説明すること。</li></ul>	第1109回 (2023年1月27日)	今回説明

# 本日の説明内容

---

- 第1109回審査会合（2023年1月27日）では、プレート間地震の津波評価について説明し、以下の項目についてコメントをいただいた。
  - ・No.1コメント：プレート間地震の津波評価の方針、論理構成、評価結果の再点検
- 本日は、コメント回答資料にて、プレート間地震の津波の全体概要を説明のうえ、プレート間地震に関するコメント回答について説明する。
- なお、本編資料には、コメント回答を反映した「プレート間地震の津波評価」の全体をとりまとめている。

# 目次

---

プレート間地震の津波の全体概要	6
コメント回答（プレート間地震の津波評価の方針、論理構成、評価結果の再点検）	13
プレート間地震の津波評価結果まとめ	59

参考文献は本編資料に掲載

# 目次

---

プレート間地震の津波の全体概要	6
コメント回答（プレート間地震の津波評価の方針、論理構成、評価結果の再点検）	13
プレート間地震の津波評価結果まとめ	59

**プレート間地震の津波評価の方針**

■ プレート間地震の津波評価は、敷地に近い南海トラフのMw9クラスのプレート間地震を**検討対象とする地震として選定**し、南海トラフおよび国内外の巨大地震の最新知見に基づき、南海トラフの特徴と東北沖地震の知見とを適切に反映した複数の検討波源モデルを設定したうえで、敷地への影響が支配的と考えられる大すべり域の位置に関するパラメータスタディを実施して**基準断層モデルを設定**し、津波評価に影響を与える**動的パラメータに関するパラメータスタディ**を、内閣府の最大クラスモデルのパラメータを含めて網羅的に実施することにより、不確かさを考慮した津波評価を行い、**内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認**も行ったうえで、敷地に及ぼす影響が最も大きいケースをプレート間地震の津波評価結果とする。

**検討対象地震の選定**

■ 文献調査及び数値シミュレーションに基づき敷地への津波影響を確認のうえ、敷地に近い「**南海トラフのMw9クラスのプレート間地震**」を検討対象地震として選定した。

**基準断層モデルの設定**

- 基準断層モデルは、まず、歴史記録から確認される南海トラフの既往最大地震（宝永地震）の広域の津波特性を考慮する観点から、広域の津波特性を考慮できる土木学会(2016)の手法を用い、既往最大地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した**既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル(Mw9クラス)**を設定（検討波源モデルC）した。
- 次に、より敷地への影響が大きいモデルを設定する観点から、正対する沿岸域に大きな津波を発生させる内閣府(2012)の手法を参考に、敷地が位置する遠州灘沿岸域において既往最大地震以外も含む既往5地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した**敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル(Mw9クラス)**を設定（検討波源モデルA）し、更に、南海トラフの特徴の考慮として、分岐断層を考慮したモデル（検討波源モデルB）を、敷地への影響の観点から、広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデル（検討波源モデルD）を設定した。
- 設定したこれらの検討波源モデルに対し、敷地への影響が支配的と考えられる**大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ**を実施することにより、敷地への影響が大きい**複数の基準断層モデルを設定**（基準断層モデル1-1～5、2-1～3、3-1～3、4-1）した。

**動的パラメータに関するパラメータスタディ**

■ 設定した基準断層モデルに対し、**動的パラメータ（ライズタイム、破壊伝播速度・破壊開始点）に関する詳細パラメータスタディ**を、国内外の巨大地震・津波に基づく知見や内閣府の最大クラスモデルのパラメータ設定を含めて、敷地への影響の観点から網羅的に検討した。その際、Mw9クラスの地震ではライズタイムが津波水位に与える影響が大きいと考えられることを考慮して、まずライズタイム、次に破壊伝播速度・破壊開始点の順でパラメータスタディを実施した。これらのパラメータスタディ結果について、パラメータスタディ因子の影響分析を行い、大すべり域の位置、ライズタイム、破壊伝播速度・破壊開始点のパラメータスタディの順序などが網羅的な検討として妥当であることを確認した。

**内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認**

■ 設定した波源モデルのパラメータ設定や津波評価結果について、内閣府の最大クラスモデルとの比較を行った結果、**敷地の津波評価が、内閣府の最大クラスモデルのパラメータを含めた検討になっていること、そのうえで敷地への影響の観点からより幅広く不確かさを考慮したものとなっていることから、敷地のプレート間地震の津波評価は妥当であることを確認した。**

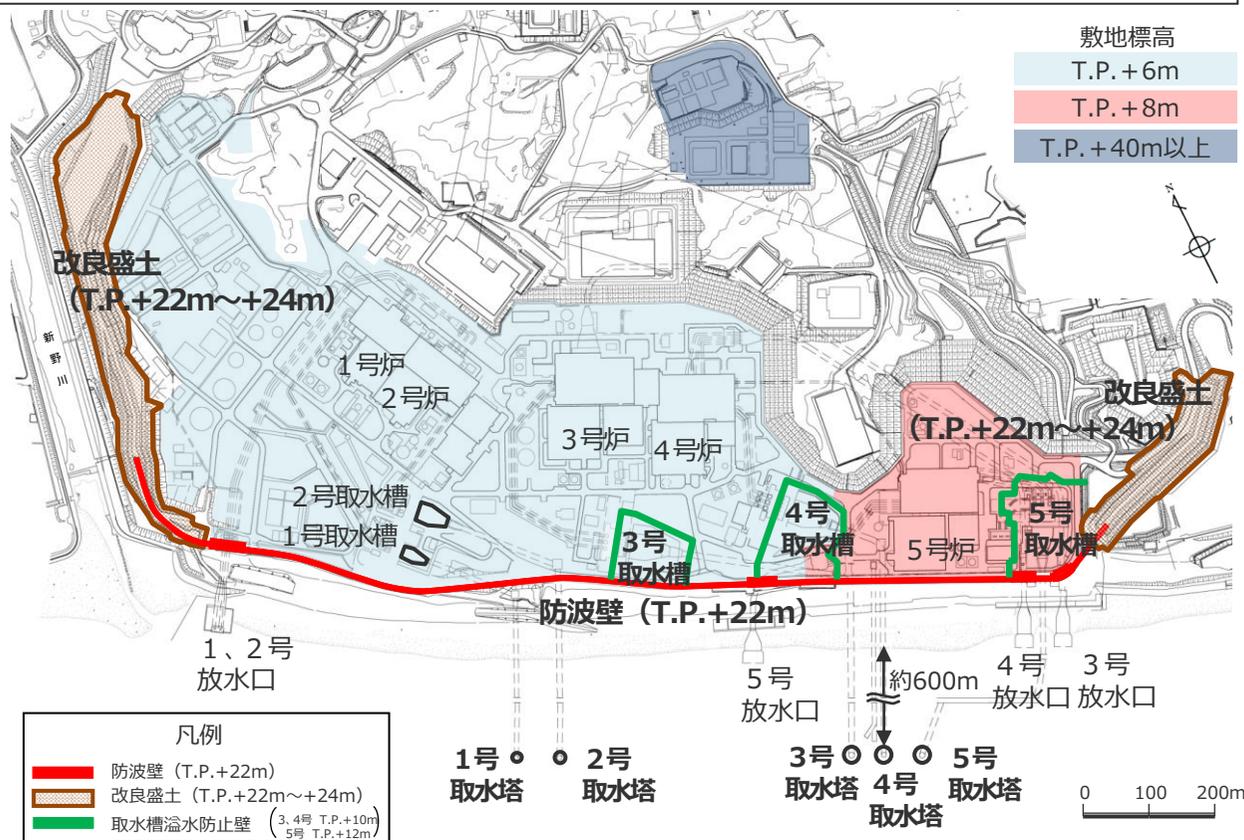
**プレート間地震の津波評価結果**

- ・敷地前面の上昇水位は、**最大T.P.+22.7m**（基準断層モデル1-1（検討波源モデルA、大すべり域1箇所）のケース）
- ・1～5号取水槽の上昇水位は、**1～4号（敷地標高6m）で最大T.P.+9.6m、5号（敷地標高8m）で最大T.P.+11.8m**（基準断層モデル3-2（検討波源モデルD、大すべり域1箇所）のケース）
- ・3、4号取水塔の水位低下時間は、**最大13.6min**（基準断層モデル2-3（検討波源モデルA、大すべり域2箇所）のケース）

# プレート間地震の津波の全体概要 浜岡原子力発電所の概要

## ■施設の概要

- ▶ 浜岡原子力発電所の敷地標高は、1号炉～4号炉建屋周辺でT.P.+6m、5号炉建屋周辺でT.P.+8m。また、敷地北側に標高T.P.+40mの高台等を有している。
- ▶ 敷地前面には、**防波壁 (T.P.+22m)** を延長約1.6kmにわたって設置しており、その両端を**改良盛土 (T.P.+22m～+24m)** に接続している。
- ▶ 原子炉機器冷却水系に必要な海水は、敷地沖合約600mに位置する取水塔から取水トンネルを経て敷地内の取水槽へ導き、取水している。
- ▶ 取水槽の周囲には、**取水槽溢水防止壁 (3、4号：天端高T.P.+10m、5号：天端高T.P.+12m)** を設置している。



浜岡原子力発電所 全体配置図



防波壁 (T.P.+22m)



取水槽溢水防止壁 (T.P.+10mもしくはT.P.+12m)

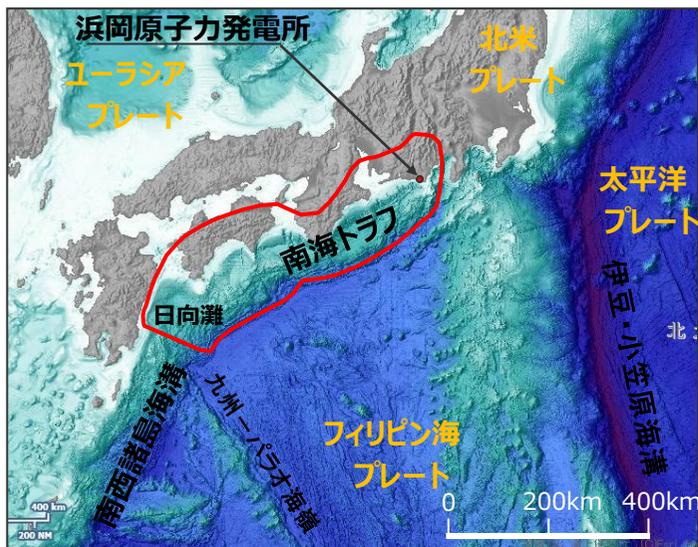
・防波壁・改良盛土、取水槽溢水防止壁の構造については第1109回資料1-3 1章を参照。  
 なお、防波壁・改良盛土等の津波対策に関しては、今後、基準津波の確定後、必要な対策を行っていく。

# プレート間地震の津波の全体概要 敷地周辺の既往津波

- 南海トラフの沿岸域を対象として、伝承を含む歴史記録に基づく津波痕跡の文献調査\*1を実施した。  
その結果、敷地が位置する遠州灘沿岸域では、南海トラフのプレート間地震が他の津波発生要因よりも大きな影響を及ぼしていることを確認。
- 南海トラフのプレート間地震による遠州灘沿岸域の津波高は、概ね5~10m。

\*1 国内外の津波痕跡に関する主な科学技術系論文データベース等を対象とし、敷地周辺を含む南海トラフの沿岸域の津波高が整理されている文献を抽出。  
・津波痕跡データベース ・地震調査委員会等のHP ・J-STAGE ・CiNii ・KAKEN ・JAIRO ・当社歴史地震調査

各津波発生要因による敷地周辺の主な既往津波



(海上保安庁「海洋台帳」を基に作成)

日本列島周辺の海底地形

津波発生要因	名称	Mj	Mw	敷地周辺の津波高	
プレート間地震	南海トラフ	1944年昭和東南海地震	7.9	8.1-8.2	5~10m程度 (遠州灘沿岸域)
		1854年安政東海地震	8.4	-	
		1707年宝永地震	8.6	-	
		1605年慶長地震	7.9	-	
		1498年明応地震	8.2-8.4	-	
南西諸島海溝	敷地周辺に影響を及ぼした津波は確認されていない。			-	
伊豆・小笠原海溝	1972年八丈島東方沖地震	7.2	-	0.25m*2 (御前崎市)	
日本海溝	2011年東北地方太平洋沖地震	9.0	9.0	1.44m (御前崎市)	
遠地津波	1952年カムチャツカ地震	-	9.0	0.3~1.9*2m (遠州灘沿岸域)	
	1960年チリ地震	-	9.5		
	1964年アラスカ地震	-	9.2		
	1996年ニューギニア島沖地震	-	8.1		
	2010年チリ地震	-	8.8		
海洋プレート内地震*3	2004年紀伊半島南東沖の地震	7.4	7.5	0.5m (御前崎市)	
海域の活断層による地殻内地震	敷地周辺に影響を及ぼした津波は確認されていない。			-	
地すべり	2009年駿河湾の海底地すべり			0.36m (御前崎市)	
火山現象	2022年トンガの火山噴火			(0.7m (御前崎市))*4	

\*2 文献には最大全振幅が記載されているため、最大全振幅の1/2を津波高と仮定した。

\*3 なお、2010年小笠原諸島父島近海の海洋プレート内地震（太平洋プレート内の地震、Mw7.3）について、敷地周辺の御前崎市では津波は観測されていない。（気象庁(2010b)）

\*4 本事象に伴う潮位変化は、大気中を伝播する波による影響が支配的であったと考えられており(防災科学技術研究所(2022)、気象庁(2022a))、基準津波の策定において評価している海面を伝播する津波とはやや異なることから、括弧書きで表記した。

■ プレート間地震の津波評価は、敷地に近い南海トラフのMw9クラスのプレート間地震を**検討対象地震として選定**し、南海トラフおよび国内外の巨大地震の最新知見に基づき、南海トラフの特徴と東北沖地震の知見とを適切に反映した**複数の検討波源モデル**を設定したうえで、敷地への影響が支配的と考えられる**大すべり域の位置に関するパラメータスタディ**を実施して**基準断層モデルを設定**し、津波評価に影響を与える**動的パラメータに関するパラメータスタディ**を、内閣府の最大クラスモデルのパラメータを含めて網羅的に実施することにより、不確かさを考慮した津波評価を行い、**内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認**も行ったうえで、敷地に及ぼす影響が最も大きいケースをプレート間地震の津波評価結果とする。

## プレート間地震の津波評価

### 検討対象地震の選定 (本編1章)

・ 文献調査及び数値シミュレーションに基づき敷地への津波影響を確認のうえ、敷地に近い「**南海トラフのMw9クラスのプレート間地震**」を検討対象地震として選定。

### 基準断層モデルの設定 (本編2章)

#### 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定 (本編2.1章)

・ 既往最大地震の津波痕跡再現モデル(Mw8)  
→ 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル(Mw9)(検討波源モデルC)

より敷地への影響が大きいモデルを設定 (広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデルも設定)

・ 基準断層モデルは、まず、歴史記録から確認される南海トラフの既往最大地震（宝永地震）の広域の津波特性を考慮する観点から、広域の津波特性を考慮できる土木学会（2016）の手法を用い、既往最大地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した**既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル(Mw9クラス)**を設定（検討波源モデルC）。

#### 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定 (本編2.2章)

・ 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル(Mw8)  
→ 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル(Mw9)(検討波源モデルA→B,D)

・ 次に、より敷地への影響が大きいモデルを設定する観点から、正対する沿岸域に大きな津波を発生させる内閣府(2012)の手法を参考に、敷地が位置する遠州灘沿岸域において既往最大地震以外も含む既往5地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した**敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル(Mw9クラス)**を設定（検討波源モデルA）し、更に、南海トラフの特徴の考慮として、分岐断層を考慮したモデル（検討波源モデルB）を、敷地への影響の観点から、広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデル（検討波源モデルD）を設定。

### 基準断層モデルの設定 (本編2.3章) (大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ)

・ 敷地への影響が支配的と考えられる**大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ**を実施することにより、**基準断層モデルを設定**。

### 動的パラメータに関するパラメータスタディ(本編3章)

(動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ)

・ 設定した基準断層モデルに対して、津波評価に影響を与える**動的パラメータ（ライズタイム、破壊伝播速度、破壊開始点）に関する詳細パラメータスタディ**を、国内外の巨大地震・津波に基づく知見や内閣府の最大クラスモデルのパラメータ設定を含めて、敷地への影響の観点から網羅的に実施。

### 内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認 (本編4章)

・ 設定した波源モデルのパラメータ設定や津波評価結果について、**内閣府の最大クラスモデルとの比較**を行い、敷地への影響の観点から、プレート間地震の津波評価の妥当性を確認。

# プレート間地震の津波の全体概要

## プレート間地震の津波評価の全体概要

### (津波評価の検討フロー)

#### 基準断層モデルの設定

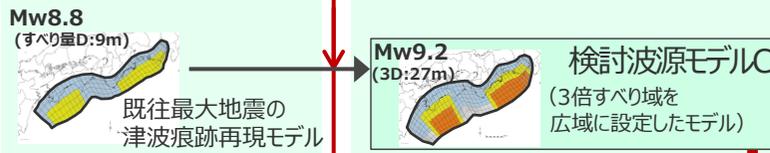
2章

東北沖地震において巨大津波が発生した要因③⑥を反映

③地震規模 ⑥浅部の破壊形態

#### 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定

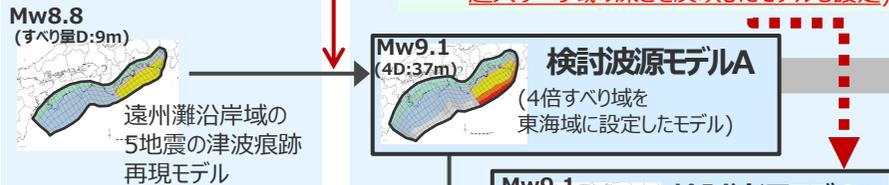
(広域の津波特性を考慮できる土木学会(2016)の手法を用いて設定) 2.1章



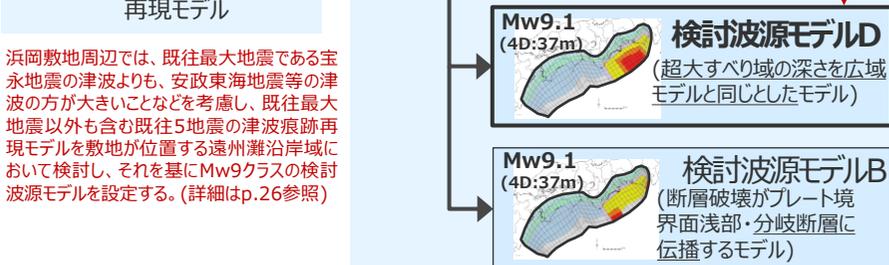
より敷地への影響が大きいモデルを設定

#### 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定

(正対する沿岸域に大きな津波を発生させる内閣府(2012)の手法を参考に設定) 2.2章



浜岡敷地周辺では、既往最大地震である宝永地震の津波よりも、安政東海地震等の津波の方が大きいことなどを考慮し、既往最大地震以外も含む既往5地震の津波痕跡再現モデルを敷地が位置する遠州灘沿岸域において検討し、それを基にMw9クラスの検討波源モデルを設定する。(詳細はp.26参照)



#### 基準断層モデルの設定

(大すりり域の位置に関する概略パラメータスタディ) 2.3章

大すりり域 2箇所10kmずつ移動 → 敷地影響 (小さい)

大すりり域: 1箇所 / 大すりり域: 2箇所

大すりり域1箇所 / 大すりり域2箇所 10kmずつ移動

大すりり域1箇所 / 大すりり域2箇所 10kmずつ移動

大すりり域1箇所 / 大すりり域2箇所 10kmずつ移動 → 敷地影響 (小さい)

基準断層モデル1-1~1-5 (検討波源モデルA)を選定: 水位上昇側(敷地前面)への影響が大きい

基準断層モデル2-1~2-3 (検討波源モデルA)を選定: 水位下降側(取水塔)への影響が大きい

基準断層モデル3-1~3-3 (検討波源モデルD)を選定: 水位上昇側(取水槽)への影響が大きい

基準断層モデル4-1 (検討波源モデルD)を選定: 水位下降側(取水塔)への影響が大きい

#### 動的パラメータに関するパラメータスタディ

(動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ) 3章

##### 最も影響の大きいケース

基準断層モデル1-1 Mw9.1 (T.P.m)

- ・ライズタイム 60s
- ・破壊伝播速度 2.5km/s
- ・破壊開始点 P4

敷地前面	取水槽			
	1,2号	3号	4号	5号
22.7 <sup>*1</sup>	4.6	7.3	8.1	10.1

基準断層モデル2-3 Mw9.1 (水位低下時間)

- ・ライズタイム 90s
- ・破壊伝播速度 1.0km/s
- ・破壊開始点 P1

3号取水塔		4号取水塔	
13.6min		13.5min	

基準断層モデル3-2 Mw9.1 (T.P.m)

- ・ライズタイム 60s
- ・破壊伝播速度 1.0km/s
- ・破壊開始点 P6

敷地前面	取水槽			
	1,2号	3号	4号	5号
19.8	6.4 <sup>*2</sup> (3.1)	9.0	9.6	11.8

ライズタイム 60~300s  
破壊伝播速度 0.7~2.5km/s  
破壊開始点 P1~P6

\*1 防波壁の高さを無限大として解析を実施。今後、基準津波の確定後、必要な対策を実施していく。

\*2 1・2号取水槽周りに高さ無限大の壁を設定して解析を実施。なお、括弧内の数値は、取水路の設備対策を実施した場合における解析結果。(1号取水路出口流路の縮小(流路面積1.0m<sup>2</sup>)・2号取水路出口流路の閉塞)

#### 内閣府の最大クラスモデル

津波評価に影響の大きいパラメータを非常に大きく設定 (すりり量(37m)とライズタイム(60s)の組合せを設定) することにより、その他のパラメータの不確かさを代表する方法で検討され、少ないケースで南海トラフの全域を網羅する最大クラスの津波として想定されたモデル。(T.P.m)

敷地前面	取水槽			
	1,2号	3号	4号	5号
21.1	4.6	7.1	7.9	9.9

- 津波断層域
- 4倍すりり域
- 3倍すりり域
- 大すりり域
- 背景領域
- 深い背景領域
- 最も深い背景領域
- 遷移領域
- 浅い背景領域
- (すりり量が0(ゼロ)の領域)

・D: 平均すりり量  
・各波源モデルには、内閣府(2012)による約5kmメッシュの津波断層面を用いた。

日本海溝の手法を用いたモデルとの比較  
基準断層モデルとして選定した検討波源モデルについて、日本海溝の手法を用いたすりり量分布等との比較もを行い、Mw9クラスのモデル設定としての妥当性確認を実施。

# プレート間地震の津波の全体概要 プレート間地震の津波評価結果

■ プレート間地震の津波評価結果は以下のとおり。

【検討波源モデルの津波評価結果】

(水位上昇側)

波源モデル	最大上昇水位(T.P. m)*1					備考
	敷地 前面	1,2号 取水槽	3号 取水槽	4号 取水槽	5号 取水槽	
基準断層モデル1-1(検討波源モデルA)	22.7(22.65)	4.6	7.3	8.1	10.1	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ40km ライスタイム60s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P4
基準断層モデル1-2(検討波源モデルA)	22.7(22.64)	4.6	7.3	8.1	10.0	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ30km ライスタイム60s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P4
基準断層モデル1-3(検討波源モデルA)	22.7(22.61)	4.6	7.3	8.1	10.1	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ20km ライスタイム60s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P4
基準断層モデル1-4(検討波源モデルA)	22.6	4.6	7.3	8.1	10.0	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ10km ライスタイム60s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P4
基準断層モデル1-5(検討波源モデルA)	22.6	4.6	7.3	8.1	10.1	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：基準位置 ライスタイム60s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P4
基準断層モデル3-1(検討波源モデルD)	19.4	6.4	8.9	9.5	11.6	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ70km ライスタイム60s、破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P6
	19.5	6.4	8.9	9.5	11.6	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ70km ライスタイム60s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P6
基準断層モデル3-2(検討波源モデルD)	19.8	6.4	9.0	9.6	11.8	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ60km ライスタイム60s、破壊伝播速度1.0km/s、破壊開始点P6
基準断層モデル3-3(検討波源モデルD)	19.3	6.4	8.9	9.5	11.7	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ50km ライスタイム60s、破壊伝播速度0.7km/s、破壊開始点P6
	19.0	6.4	8.9	9.5	11.7	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ50km ライスタイム60s、破壊伝播速度1.0km/s、破壊開始点P6

\*水位上昇側：朔望平均満潮位T.P.+0.80mを考慮

(水位下降側)

波源モデル	最大下降水位(T.P. m) (水位低下時間)		備考
	3号取水塔	4号取水塔	
基準断層モデル2-1(検討波源モデルA)	海底面(13.2min)	海底面(13.2min)	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：東へ40km・距離130km ライスタイム120s、破壊伝播速度0.7km/s、破壊開始点P6
基準断層モデル2-2(検討波源モデルA)	海底面(13.3min)	海底面(13.3min)	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：東へ40km・距離140km ライスタイム120s、破壊伝播速度0.7km/s、破壊開始点P6
基準断層モデル2-3(検討波源モデルA)	海底面(13.6min)	海底面(13.5min)	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：東へ30km・距離120km ライスタイム90s、破壊伝播速度1.0km/s、破壊開始点P1
基準断層モデル4-1(検討波源モデルD)	海底面(12.5min)	海底面(12.4min)	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：基準位置・距離140km ライスタイム90s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P1

\*水位下降側：朔望平均干潮位T.P.-0.93mを考慮

\*海底面：最大下降水位時に海底面がほぼ露出している(水深1m未満である)ことを示す。

\*1 防波壁および3~5号取水槽溢水防止壁の高さを無限大として解析を実施。また、1・2号取水槽周りに高さ無限大の壁を設定して解析を実施。

□：基準断層モデルごとに影響が大きく着目した評価地点

太字：全評価結果の中で、敷地への影響が最も大きいケース

# 目次

---

プレート間地震の津波の全体概要	6
<b>コメント回答（プレート間地震の津波評価の方針、論理構成、評価結果の再点検）</b>	<b>13</b>
プレート間地震の津波評価結果まとめ	59

# コメント回答（プレート間地震の津波評価の方針、論理構成、評価結果の再点検） コメントとコメント回答概要

## ○第1109回審査会合（2023年1月27日）におけるコメント

- プレート間地震の津波評価の方針、論理構成を再点検し、痕跡再現モデルあるいは検討波源モデルの位置づけ、パラメータスタディやパラメータスタディの幅などを含め、一連の体系的な内容として整理されているかを確認して説明すること。
- 検討波源モデルのパラメータスタディを再点検し、評価に漏れがなく、評価結果が変わらないかを確認して説明すること。

## ○コメント回答（概要）

- 全9回の審査会合における議論を逐次反映してきたプレート間地震の津波評価について、評価方針、論理構成、根拠を再点検し、特に以下の(1)～(3)の項目について、評価方針等を明確化して整理を行い、一連の体系的な内容として資料を再構成する。

## プレート間地震の津波評価

検討対象地震の選定（本編1章） 概要はp.18

基準断層モデルの設定（本編2章） 概要\*はp.19～

既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定 (本編2.1章)

- ・既往最大地震の津波痕跡再現モデル(Mw8)
- ➔既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル(Mw9)(検討波源モデルC)

より敷地への影響が大きいモデルを設定 (広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデルも設定)

敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定 (本編2.2章)

- ・遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル(Mw8)
- ➔敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル(Mw9)(検討波源モデルA→B,D)

基準断層モデルの設定（本編2.3章）  
(大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ)

動的パラメータに関するパラメータスタディ(本編3章) 概要\*はp.42～  
(動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ)

内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認（本編4章） 概要はp.55～

### (1)プレート間地震の津波評価全体の評価方針の整理

- ・全体の評価方針を明確化し、それに伴い全体構成を見直す。

### (2)基準断層モデルの設定方針の整理

- ・基準断層モデルの設定方針を明確化し、各波源モデル間の関係を整理する。

### (3)パラメータスタディの妥当性確認の網羅的な実施

- ・動的パラメータに関するパラメータスタディの検討方針を明確化するとともに、パラメータスタディの評価結果の妥当性確認を網羅的に実施し、評価に漏れがなく、評価結果が変わらないことを再確認する。

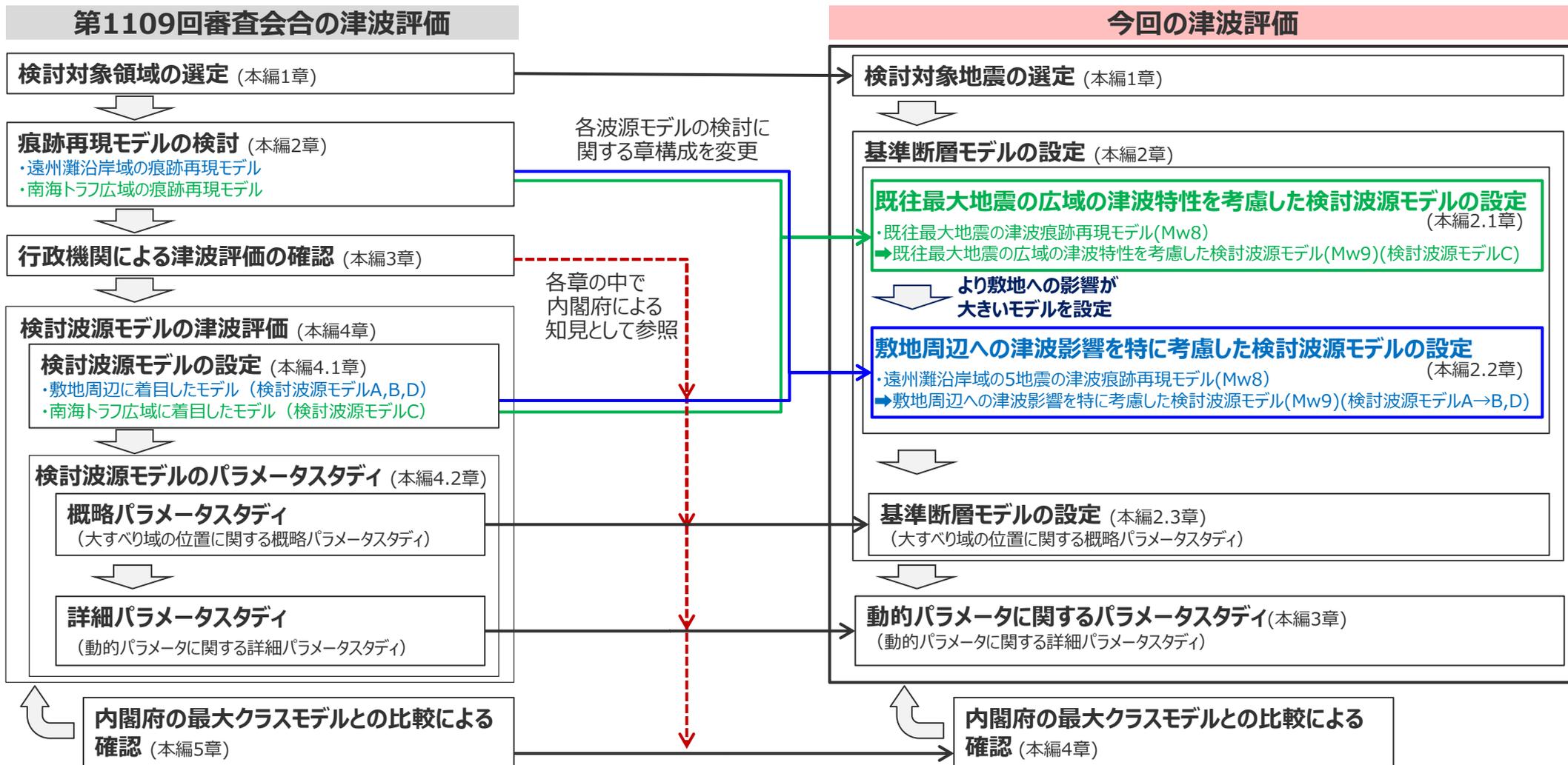
・(2)基準断層モデルの設定方針の整理に伴い、今後のまとめ資料では、検討波源モデルの名称を以下のとおり変更予定。  
(なお、今回は整理過程を確認できるよう変更前のモデル名称を使用。)

(変更前)	(変更後)
検討波源モデルC	検討波源モデルO <span style="color:red">（変更あり）</span>
検討波源モデルA	検討波源モデルA <span style="color:red">（変更なし）</span>
検討波源モデルB-1	検討波源モデルB-1 <span style="color:red">（変更なし）</span>
検討波源モデルB-2	検討波源モデルB-2 <span style="color:red">（変更なし）</span>
検討波源モデルD	検討波源モデルC <span style="color:red">（変更あり）</span>

\*コメント回答としてモデル設定の比較結果や妥当性確認の結果も含む

# コメント回答（プレート間地震の津波評価の方針、論理構成、評価結果の再点検） 資料構成の変更

- コメント回答に伴い、プレート間地震の津波評価の資料構成を、以下のとおり見直す。
- 各波源モデルの検討に関する章構成を変更し、まず「**既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定**」を行い、次に、より敷地への影響が大きいモデルを設定する観点から、「**敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定**」を行う構成とする。
- また、これまで章立てしていた「行政機関による津波評価の確認」は、敷地の津波評価において参照する知見の一つであることから、章立ては取りやめ、各章の中で内閣府による知見として参照する構成とする。



# プレート間地震の津波評価の検討概要

■ プレート間地震の津波評価は、敷地に近い南海トラフのMw9クラスのプレート間地震を**検討対象地震として選定**し、南海トラフおよび国内外の巨大地震の最新知見に基づき、南海トラフの特徴と東北沖地震の知見とを適切に反映した**複数の検討波源モデル**を設定したうえで、敷地への影響が支配的と考えられる**大すべり域の位置に関するパラメータスタディ**を実施して**基準断層モデルを設定**し、津波評価に影響を与える**動的パラメータに関するパラメータスタディ**を、内閣府の最大クラスモデルのパラメータを含めて網羅的に実施することにより、不確かさを考慮した津波評価を行い、**内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認**も行ったうえで、敷地に及ぼす影響が最も大きいケースをプレート間地震の津波評価結果とする。

## プレート間地震の津波評価

**検討対象地震の選定** (本編1章)

概要はp.18

・文献調査及び数値シミュレーションに基づき敷地への津波影響を確認のうえ、敷地に近い「**南海トラフのMw9クラスのプレート間地震**」を検討対象地震として選定。

**基準断層モデルの設定** (本編2章)

概要\*はp.19～

**既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定**

(本編2.1章)

・既往最大地震の津波痕跡再現モデル(Mw8)  
→既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル(Mw9)(検討波源モデルC)

より敷地への影響が  
大きいモデルを設定

(広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの  
超大すべり域の深さを反映したモデルも設定))

・基準断層モデルは、まず、歴史記録から確認される南海トラフの既往最大地震（宝永地震）の広域の津波特性を考慮する観点から、広域の津波特性を考慮できる土木学会（2016）の手法を用い、既往最大地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した**既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル**(Mw9クラス)を設定（検討波源モデルC）。

**敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定**

(本編2.2章)

・遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデル(Mw8)  
→敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル(Mw9)(検討波源モデルA→B, D)

・次に、より敷地への影響が大きいモデルを設定する観点から、正対する沿岸域に大きな津波を発生させる内閣府（2012）の手法を参考に、敷地が位置する遠州灘沿岸域において既往最大地震以外も含む既往5地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した**敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル**(Mw9クラス)を設定（検討波源モデルA）し、更に、南海トラフの特徴の考慮として、分岐断層を考慮したモデル（検討波源モデルB）を、敷地への影響の観点から、広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデル（検討波源モデルD）を設定。

**基準断層モデルの設定** (本編2.3章)

(大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ)

・敷地への影響が支配的と考えられる**大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ**を実施することにより、**基準断層モデルを設定**。

**動的パラメータに関するパラメータスタディ** (本編3章)

概要\*はp.42～

(動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ)

・設定した基準断層モデルに対して、津波評価に影響を与える**動的パラメータ（ライズタイム、破壊伝播速度、破壊開始点）に関する詳細パラメータスタディ**を、国内外の巨大地震・津波に基づく知見や内閣府の最大クラスモデルのパラメータ設定を含めて、敷地への影響の観点から網羅的に実施。

**内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認** (本編4章)

概要はp.55～

・設定した波源モデルのパラメータ設定や津波評価結果について、**内閣府の最大クラスモデルとの比較**を行い、敷地への影響の観点から、プレート間地震の津波評価の妥当性を確認。

\*コメント回答としてモデル設定の比較結果や妥当性確認の結果も含む

# コメント回答 (プレート間地震の津波評価の方針、論理構成、評価結果の再点検)

## プレート間地震の津波評価の全体概要

### (津波評価の検討フロー)

#### 基準断層モデルの設定

2章

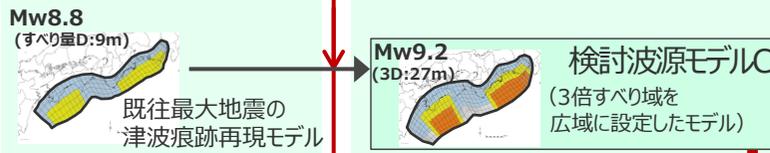
東北沖地震において巨大津波が発生した要因③⑥を反映

③地震規模

⑥浅部の破壊形態

#### 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定 (広域の津波特性を考慮できる土木学会(2016)の手法を用いて設定)

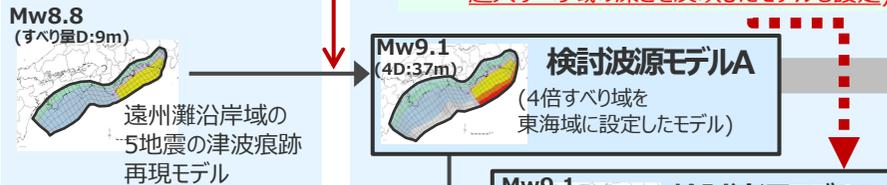
2.1章



より敷地への影響が大きいモデルを設定

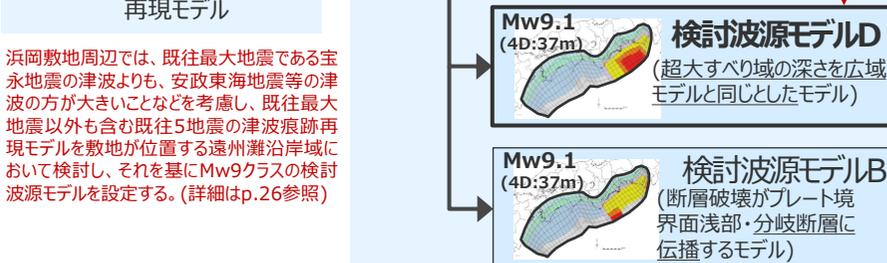
#### 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定 (正対する沿岸域に大きな津波を発生させる内閣府(2012)の手法を参考に設定)

2.2章



(敷地への影響が大きいモデルを設定する観点から、広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超すりり域の深さを反映したモデルも設定)

浜岡敷地周辺では、既往最大地震である宝永地震の津波よりも、安政東海地震等の津波の方が大きいことなどを考慮し、既往最大地震以外も含む既往5地震の津波痕跡再現モデルを敷地が位置する遠州灘沿岸域において検討し、それを基にMw9クラスの検討波源モデルを設定する。(詳細はp.26参照)



#### 基準断層モデルの設定 (大すりり域の位置に関する概略パラメータスタディ)

2.3章

大すりり域 2箇所10km ずり移動 → 敷地影響 (小さい)

大すりり域: 1箇所 / 大すりり域: 2箇所

大すりり域1箇所 / 大すりり域2箇所 10kmずり移動

大すりり域1箇所 / 大すりり域2箇所 10kmずり移動

大すりり域1箇所 / 大すりり域2箇所 10kmずり移動 → 敷地影響 (小さい)

基準断層モデル1-1~1-5 (検討波源モデルA) を選定: 水位上昇側(敷地前面) への影響が大きい

基準断層モデル2-1~2-3 (検討波源モデルA) を選定: 水位下降側(取水塔) への影響が大きい

基準断層モデル3-1~3-3 (検討波源モデルD) を選定: 水位上昇側(取水槽) への影響が大きい

基準断層モデル4-1 (検討波源モデルD) を選定: 水位下降側(取水塔) への影響が大きい

#### 動的パラメータに関するパラメータスタディ 3章 (動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ)

##### 最も影響の大きいケース

基準断層モデル1-1 Mw9.1 (T.P.m)

- ・ライズタイム 60s
- ・破壊伝播速度 2.5km/s
- ・破壊開始点 P4

敷地前面	取水槽				
	1,2号	3号	4号	5号	
22.7 <sup>*1</sup>	4.6	7.3	8.1	10.1	

基準断層モデル2-3 Mw9.1 (水位低下時間)

- ・ライズタイム 90s
- ・破壊伝播速度 1.0km/s
- ・破壊開始点 P1

3号取水塔		4号取水塔	
13.6min		13.5min	

基準断層モデル3-2 Mw9.1 (T.P.m)

- ・ライズタイム 60s
- ・破壊伝播速度 1.0km/s
- ・破壊開始点 P6

敷地前面	取水槽				
	1,2号	3号	4号	5号	
19.8	6.4 <sup>*2</sup>	9.0	9.6	11.8	
	(3.1)				

ライズタイム 60~300s  
破壊伝播速度 0.7~2.5km/s  
破壊開始点 P1~P6

\*1 防波壁の高さを無限大として解析を実施。今後、基準津波の確定後、必要な対策を実施していく。

\*2 1・2号取水槽周りに高さ無限大の壁を設定して解析を実施。なお、括弧内の数値は、取水路の設備対策を実施した場合における解析結果。(1号取水路出口流路の縮小(流路面積1.0m<sup>2</sup>)・2号取水路出口流路の閉塞)

#### 内閣府の最大クラスモデル

津波評価に影響の大きいパラメータを非常に大きく設定(すりり量(37m)とライズタイム(60s)の組合せを設定)することにより、その他のパラメータの不確かさを代表する方法で検討され、少ないケースで南海トラフの全域を網羅する最大クラスの津波として想定されたモデル。(T.P.m)

敷地前面	取水槽				
	1,2号	3号	4号	5号	
21.1	4.6	7.1	7.9	9.9	

#### 日本海溝の手法を用いたモデルとの比較

基準断層モデルとして選定した検討波源モデルについて、日本海溝の手法を用いたすりり量分布等との比較も行い、Mw9クラスのモデル設定としての妥当性確認を実施。

・D: 平均すりり量  
・各波源モデルには、内閣府(2012)による約5kmメッシュの津波断層面を用いた。

- 津波断層域
- 4倍すりり域
- 3倍すりり域
- 大すりり域
- 背景領域
- 深い背景領域
- 最も深い背景領域
- 遷移領域
- 浅い背景領域
- (すりり量が0(ゼロ)の領域)

# 1 検討対象地震の選定

## （検討概要）

- 浜岡敷地は南海トラフに面しており、敷地に近い南海トラフのプレート間地震の津波が大きな影響を及ぼしている。
- 検討対象地震の選定では、南海トラフおよびその周辺の沈み込み帯を対象として、「既往津波の文献調査」、「各沈み込み帯の特徴に関する文献調査」、「数値シミュレーションによる敷地影響評価」を実施し、南海トラフのプレート間地震の津波影響が大きいことを確認のうえ、敷地に近い「南海トラフのMw9クラスのプレート間地震」を検討対象地震として選定。

（詳細は、本編資料1章参照）

### 検討概要

#### 【調査対象】

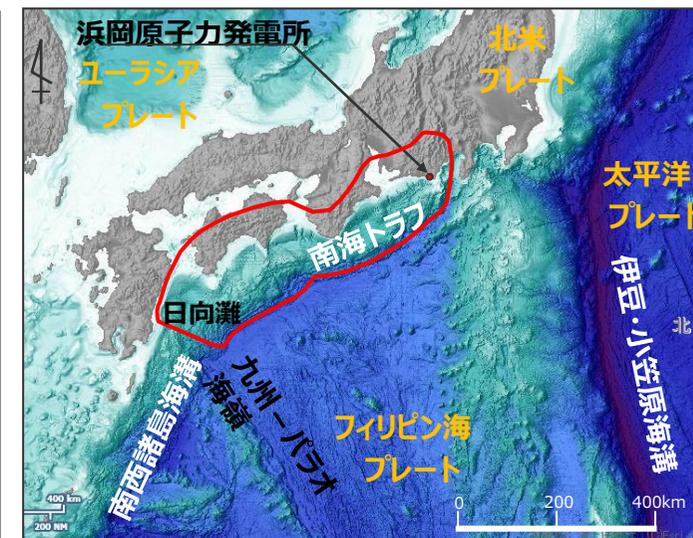
・南海トラフ ・南西諸島海溝 ・伊豆・小笠原海溝 ・その他遠地津波

#### 【検討項目・検討結果】

検討項目	検討結果（概要）
既往津波の文献調査	・既往津波の文献調査の結果、敷地が位置する遠州灘沿岸域では、南海トラフのプレート間地震による津波が繰り返し発生し、他のプレート間地震よりも大きな影響を及ぼしている。
各沈み込み帯の特徴に関する文献調査	・沈み込み帯の過去地震、固着、構造に関する知見に基づき、敷地に近い南海トラフにおいて巨大地震の発生が想定され、南西諸島海溝と伊豆・小笠原海溝では領域全体を波源とするような巨大地震が発生する可能性は低いと評価した。 ・また、九州-パラオ海嶺付近に構造境界が確認されており、南海トラフの領域と南西諸島海溝の領域とは一体となって破壊しないと評価した。
数値シミュレーションによる敷地影響評価	・各沈み込み帯の領域全体を波源とする最大クラス（Mw9クラス）の地震規模を想定して波源モデルを設定し、数値シミュレーションを実施した結果、「南海トラフのMw9クラスのプレート間地震」の影響が大きいことを確認した。



以上より、南海トラフのプレート間地震の津波影響が大きいことを確認し、敷地に近い「南海トラフのMw9クラスのプレート間地震」を検討対象地震として選定。

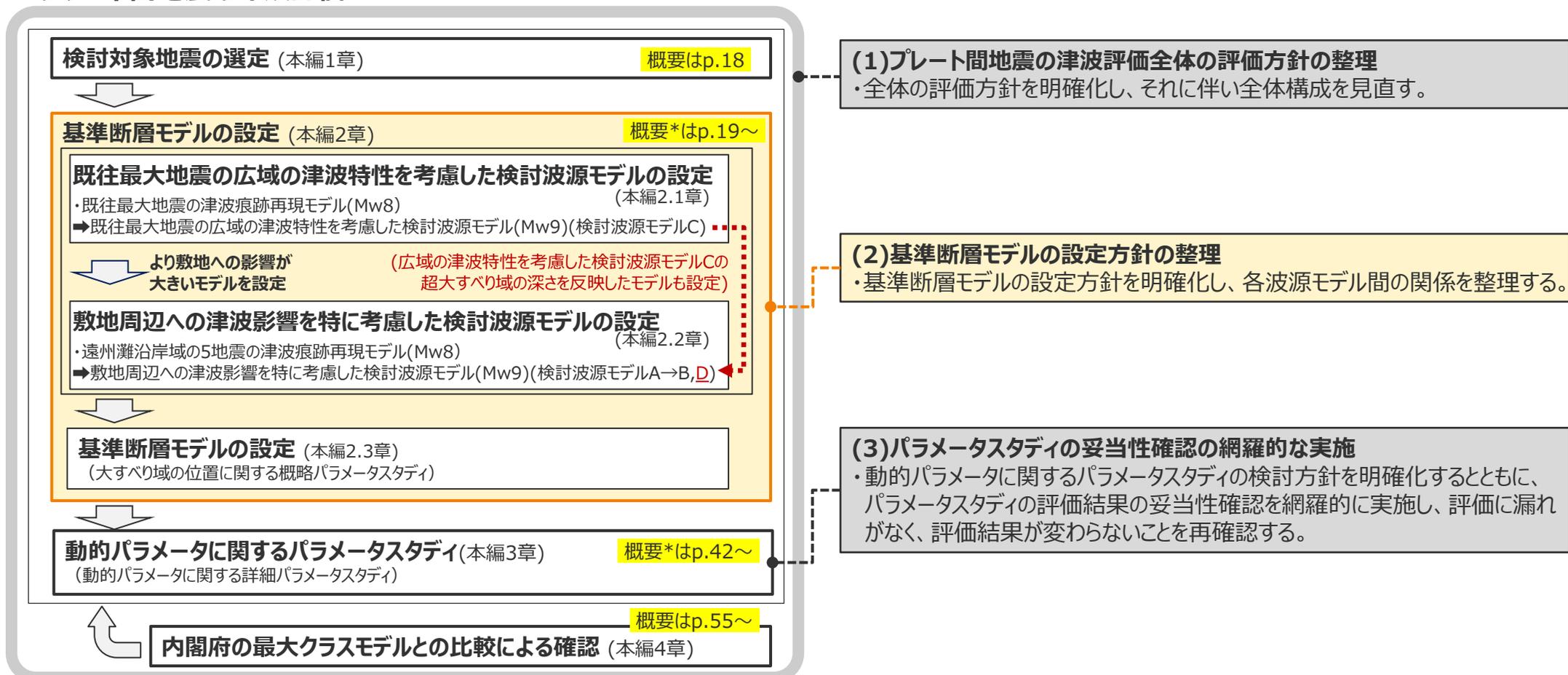


（海上保安庁「海洋台帳」を基に作成）

日本列島周辺の海底地形

## 2 基準断層モデルの設定

### プレート間地震の津波評価



**(1)プレート間地震の津波評価全体の評価方針の整理**  
・全体の評価方針を明確化し、それに伴い全体構成を見直す。

**(2)基準断層モデルの設定方針の整理**  
・基準断層モデルの設定方針を明確化し、各波源モデル間の関係を整理する。

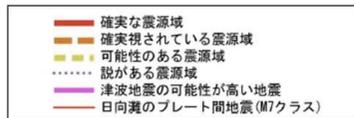
**(3)パラメータスタディの妥当性確認の網羅的な実施**  
・動的パラメータに関するパラメータスタディの検討方針を明確化するとともに、パラメータスタディの評価結果の妥当性確認を網羅的に実施し、評価に漏れがなく、評価結果が変わらないことを再確認する。

\*コメント回答としてモデル設定の比較結果や妥当性確認の結果も含む

# 2 基準断層モデルの設定

## (検討概要)

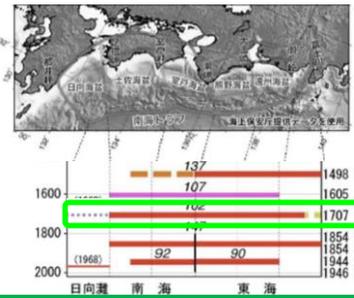
- 基準断層モデルは、まず、歴史記録から確認される南海トラフの既往最大地震(宝永地震)の広域の津波特性を考慮する観点から、既往最大地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した**既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル**(Mw9クラス)を設定(検討波源モデルC)。
- 次に、浜岡敷地周辺では、既往最大地震である宝永地震の津波よりも安政東海地震等の津波の方が大きいことなどを考慮し、より敷地への影響が大きいモデルを設定する観点から、正対する沿岸域に大きな津波を発生させる内閣府(2012)の手法を参考に、敷地が位置する遠州灘沿岸域において既往最大地震以外も含む既往5地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した**敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル**(Mw9クラス)を設定(検討波源モデルA)。更に、南海トラフの特徴の考慮として、分岐断層を考慮したモデル(検討波源モデルB)を、敷地への影響の観点から、広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデル(検討波源モデルD)を設定。
- 設定した複数の検討波源モデルに対し、敷地への影響が支配的と考えられる**大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ**を実施することにより、**基準断層モデルを設定**。



● 東北沖地震において巨大津波が発生した要因①、②を反映 **概要はp.22~**

① **地震規模**  
広範囲の震源域をもつ Mw9.0の地震規模を考慮

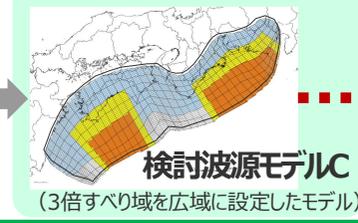
② **浅部の破壊形態**  
通常海溝型地震と津波地震が同時に発生し、浅部プレート境界も大きくずれ動くことを考慮



**既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定** (本編2.1章) **概要はp.24~**

(広域の津波特性を考慮できる土木学会(2016)の手法を用いて設定)

既往最大の宝永地震による広域の津波痕跡を再現



より敷地への影響が大きいモデルを設定

(敷地への影響が大きいモデルを設定する観点から、広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデルも設定)

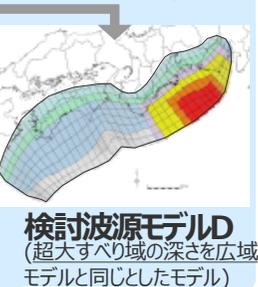
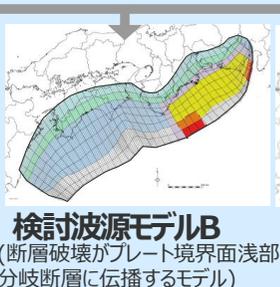
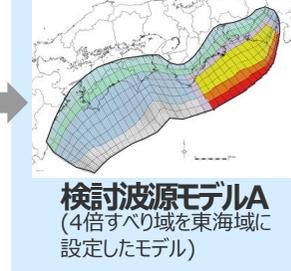
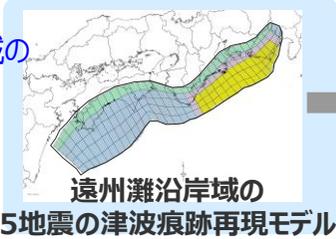
**基準断層モデルの設定**  
(大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ)  
(本編2.3章)

浜岡敷地周辺では、既往最大地震である宝永地震の津波よりも、安政東海地震等の津波の方が大きいことなどを考慮し、既往最大地震以外にも含む既往5地震の津波痕跡再現モデルを敷地が位置する遠州灘沿岸域において検討し、それを基にMw9クラスの検討波源モデルを設定する。

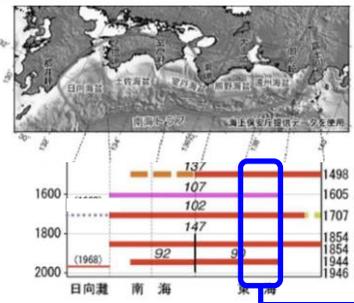
**敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定** (本編2.2章) **概要はp.25~**

(正対する沿岸域に大きな津波を発生させる内閣府(2012)の手法を参考に設定)

遠州灘沿岸域の5地震による津波痕跡を再現



**概要はp.36~**



歴史記録に基づく南海トラフの地震履歴



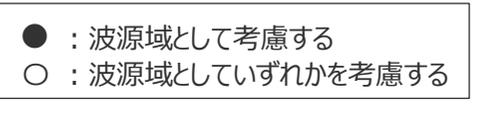
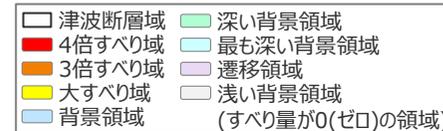
## 2 基準断層モデルの設定

（波源モデル設定の考え方：波源域の設定）

- プレート間地震の津波評価では、南海トラフの沈み込み帯の領域全体を波源域とする最大クラス（Mw9クラス）のプレート間地震を想定し、南海トラフの特徴の考慮として、断層破壊がプレート境界面浅部や分岐断層に伝播するモデルを検討する。
- ここで、沈み込み帯の領域の一部を波源域とするプレート間地震（主部断層の領域の地震（強震動を伴う通常の地震）、浅部断層の領域の地震（津波地震）等）による津波影響は、沈み込み帯の領域全体を波源域とし、スケーリング則に基づき地震規模やすり量も大きいMw9クラスのプレート間地震の津波影響より小さいと考えられることから、領域全体を波源域とするMw9クラスのプレート間地震の津波により代表することとする。

各検討波源モデルの波源域の設定

波源モデル名		既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル	敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル		
		検討波源モデルC	検討波源モデルA	検討波源モデルB	検討波源モデルD
		・3倍すべり域を広域に設定 ・断層破壊がプレート境界面浅部に伝播	・4倍すべり域を東海域に設定 ・断層破壊がプレート境界面浅部に伝播	・4倍すべり域を東海域に設定 ・断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層に伝播	・4倍すべり域を東海域に設定 ・超大すべり域の深さを広域モデルと同じとした
波源モデル図					
主部断層	強震動を伴う通常の地震の領域	●	●	●	●
浅部断層	プレート境界面浅部（津波地震の領域）	●	●	○ (いずれかへの破壊伝播を考慮)	●
	海溝軸付近の分岐断層*	—	—	○ (いずれかへの破壊伝播を考慮)	—



\* 付加作用が卓越する南海トラフでは、プレート境界面浅部に破壊が伝播する場合に加えて、分岐断層に破壊が伝播する場合があると考えられることから、これを考慮した検討波源モデルを設定している。  
 （検討波源モデルの設定の詳細は、本編資料2.2.2参照）

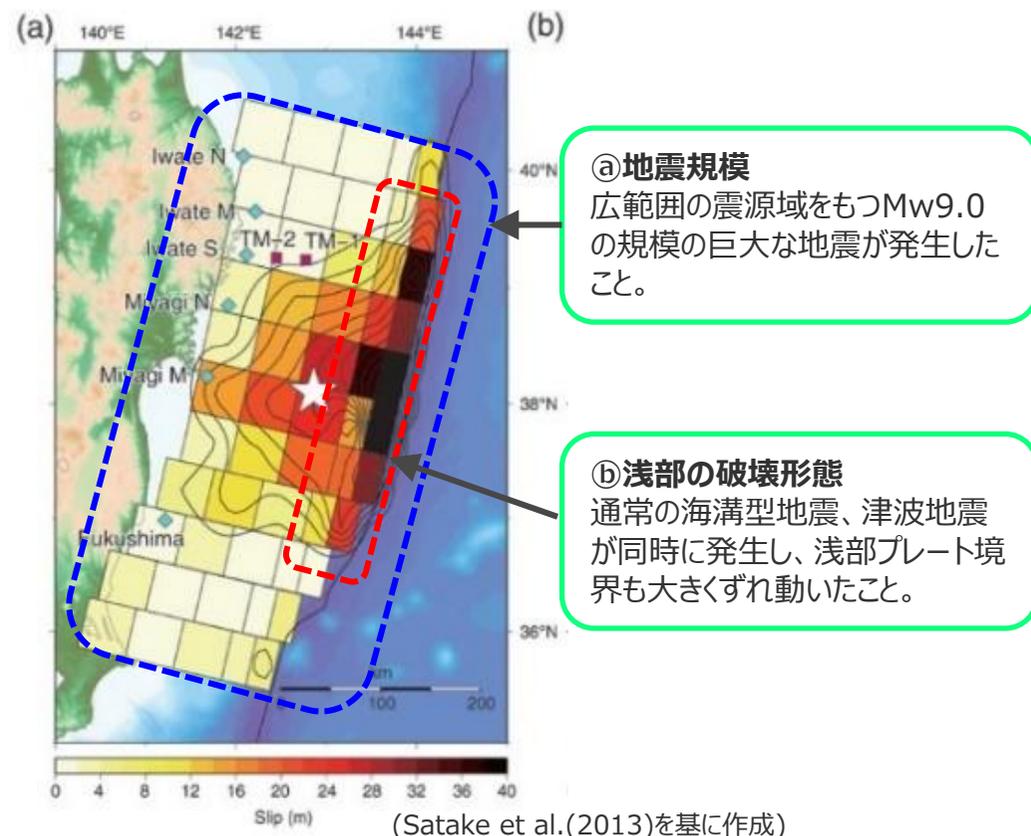
## 2 基準断層モデルの設定

(波源モデル設定の考え方：東北沖地震において巨大津波が発生した要因を反映する考え方の概要)

- 中央防災会議(2011)によると、東北沖地震において巨大津波が発生した要因として、①地震規模 (広範囲の震源域をもつMw9.0の規模の巨大な地震が発生したこと) と、②浅部の破壊形態 (通常の見溝型地震と津波地震が同時に発生し、浅部プレート境界も大きくずれ動いたこと) とが挙げられている。
- 検討波源モデルは、これら東北沖地震において巨大津波が発生した要因を不確かさとして保守的に考慮することとした。

東北沖地震において巨大津波が発生した要因 (中央防災会議(2011))

項目	巨大津波が発生した要因
①地震規模	<ul style="list-style-type: none"> <li>・過去数百年間の地震の発生履歴からは想定することができなかったマグニチュード9.0の規模の巨大な地震が、複数の領域を連動させた広範囲の震源域をもつ地震として発生したこと。</li> </ul>
②浅部の破壊形態	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今回の津波の発生メカニズムが、通常の見溝型地震が発生する深部プレート境界のずれ動きだけでなく、浅部プレート境界も同時に大きくずれ動いたことによるものであったこと。いわゆる「通常の見溝型地震」と「津波地震」が同時に起きたこと。</li> </ul>



(Satake et al.(2013)を基に作成)

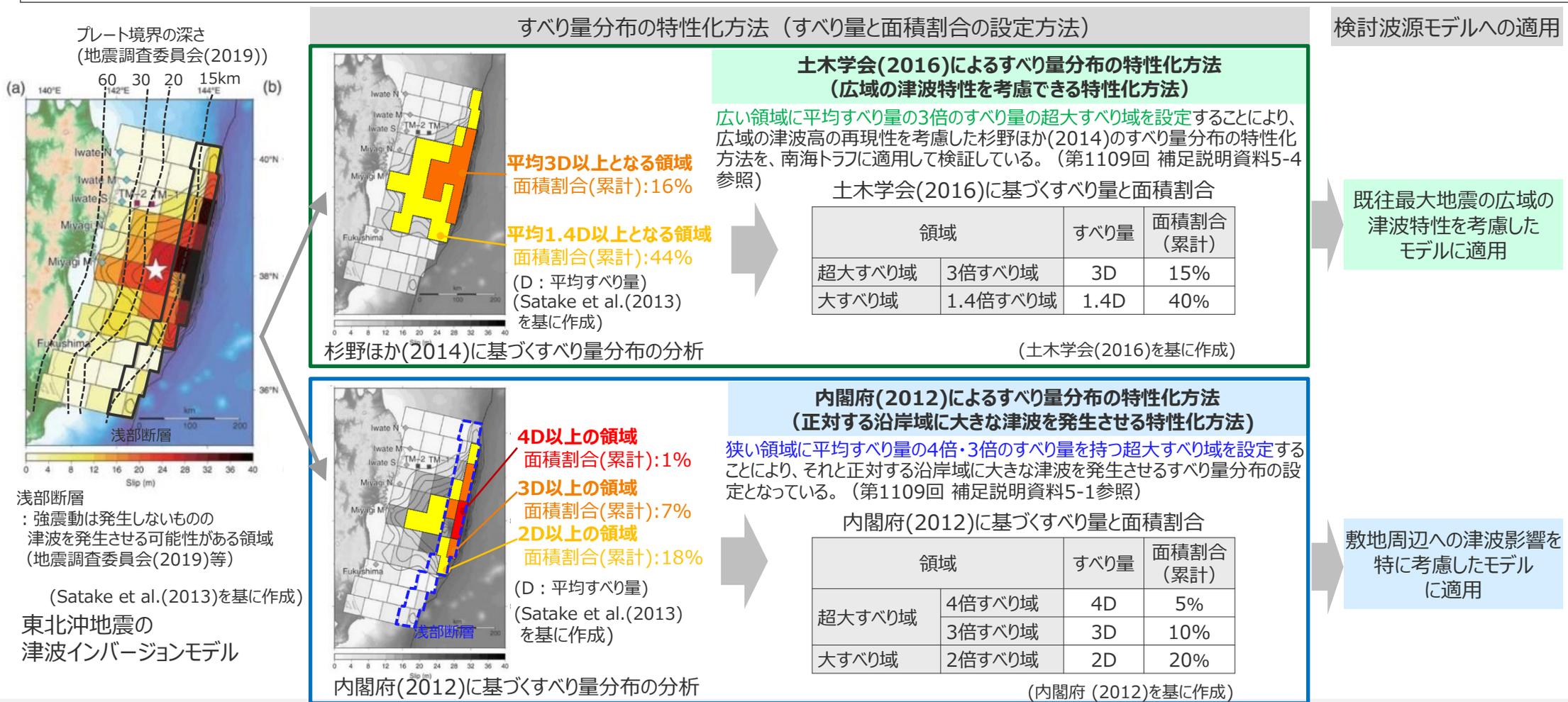
東北沖地震において巨大津波が発生した要因

# コメント回答 (プレート間地震の津波評価の方針、論理構成、評価結果の再点検)

## 2 基準断層モデルの設定

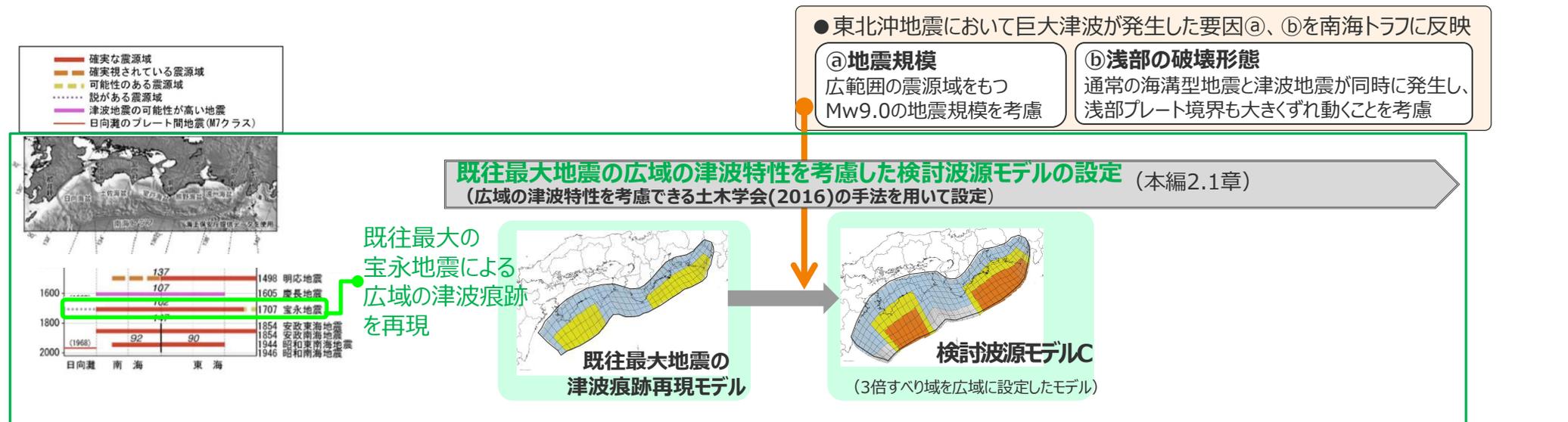
### (波源モデルの設定において適用した特性化方法)

- 東北沖型のMw9クラスのプレート間地震のすべり量分布の特性化方法 (すべり量と面積割合の設定方法) を南海トラフに適用した知見として、土木学会(2016)による方法と内閣府(2012)による方法とが挙げられる。
- 土木学会(2016)によるすべり量分布の特性化方法は、広い領域に平均すべり量の3倍のすべり量を持つ超大すべり域を設定することにより、広域の津波高の再現性を考慮した杉野ほか(2014)のすべり量分布の特性化方法を、南海トラフに適用して検証したのとなっている。
  - ➡ 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルには、土木学会(2016)によるすべり量分布の特性化方法を適用した。
- 内閣府(2012)によるすべり量分布の特性化方法は、狭い領域に平均すべり量の4倍・3倍のすべり量を持つ超大すべり域を設定することにより、それと正対する沿岸域に大きな津波を発生させる方法であり、この超大すべり域等の位置を移動させて検討することにより、他の沿岸域もカバーする方法となっている。
  - ➡ 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルには、内閣府(2012)によるすべり量分布の特性化方法を適用した。



## 2.1 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの設定 (検討概要)

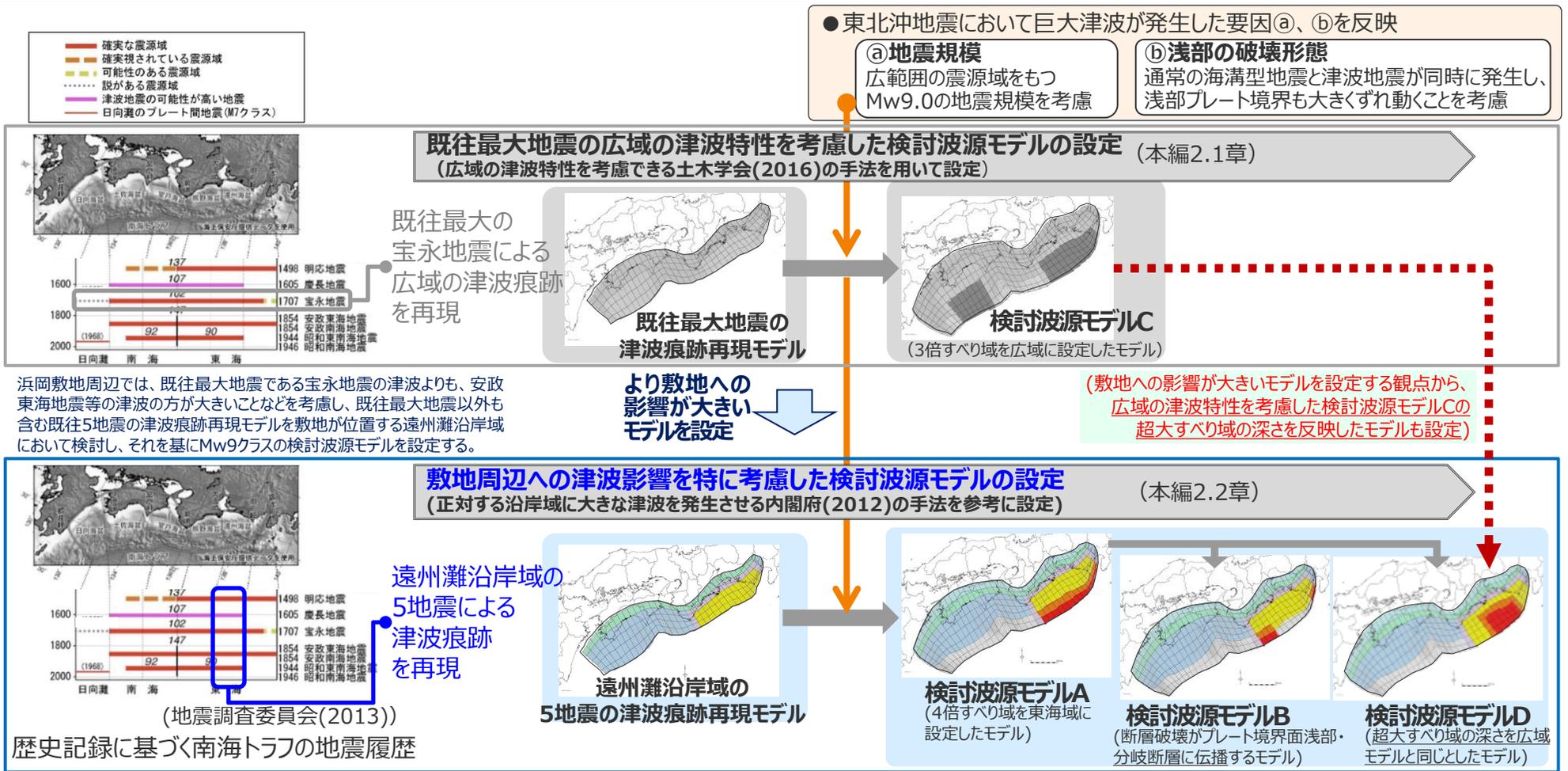
- まず、歴史記録から確認される南海トラフの既往最大地震 (宝永地震) の広域の津波特性を考慮する観点から、既往最大地震の津波痕跡再現モデル(Mw8クラス)を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルC(Mw9クラス)を設定した。
- 既往最大地震の津波痕跡再現モデルは、宝永地震の南海トラフ広域の津波痕跡高に基づき、広域の津波特性を考慮できる土木学会(2016)の手法 (超大すべり域のないMw8クラスのすべり量分布の特性化方法) を用いて設定した。
- 検討波源モデルCは、既往最大地震の津波痕跡再現モデルを基に、東北沖地震において巨大津波が発生した要因 (a)地震規模、(b)浅部の破壊形態) を不確かさとして保守的に考慮することとし、土木学会(2016)の手法 (超大すべり域のあるMw9クラスのすべり量分布の特性化方法) を用いて設定した。



# 2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定

## (検討概要)

- 次に、より敷地への影響が大きいモデルを設定する観点から、敷地が位置する遠州灘沿岸域において既往最大地震以外も含む既往5地震の津波痕跡再現モデル (Mw8クラス) を検討し、それを基に東北沖地震の知見を反映した敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル (Mw9クラス) を設定した。
- 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルは、遠州灘沿岸域に大きな影響を与えた既往5地震の津波痕跡高に基づき、正対する沿岸域に大きな津波を発生させる内閣府(2012)を参考とした手法 (超大すべり域のないMw8クラスのすべり量分布の特性化方法) を用いて設定した。
- 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルは、既往最大地震の津波痕跡再現モデルを基に、東北沖地震において巨大津波が発生した要因 (a)地震規模、b)浅部の破壊形態) を不確かさとして保守的に考慮することとし、内閣府(2012)の手法 (超大すべり域のあるMw9クラスの地震のすべり量分布の特性化方法) を用いて検討波源モデルAを設定した。更に、南海トラフの特徴の考慮として、分岐断層を考慮したモデル (検討波源モデルB) を、敷地への影響の観点から、広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデル (検討波源モデルD) を設定した。



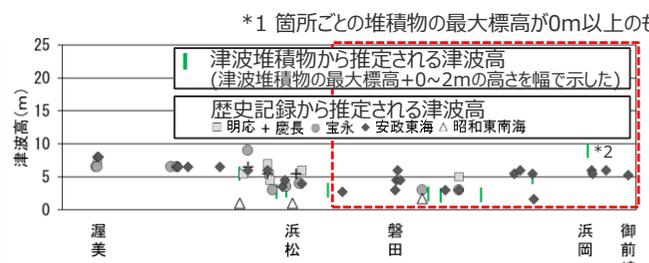
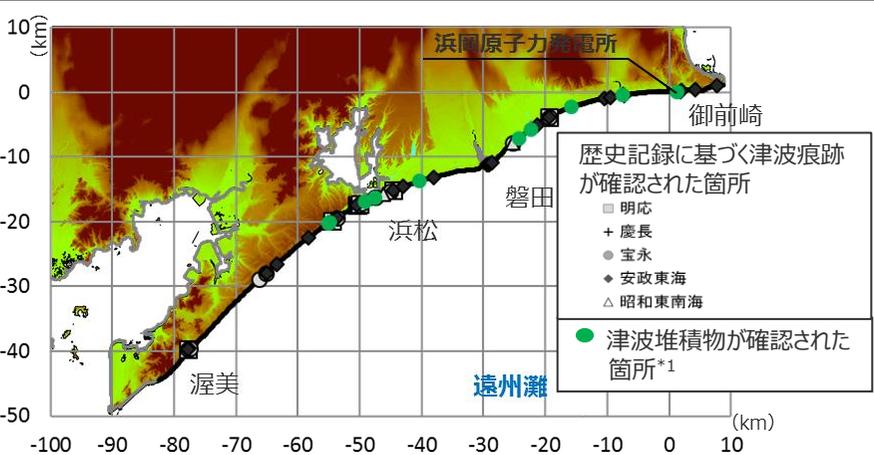
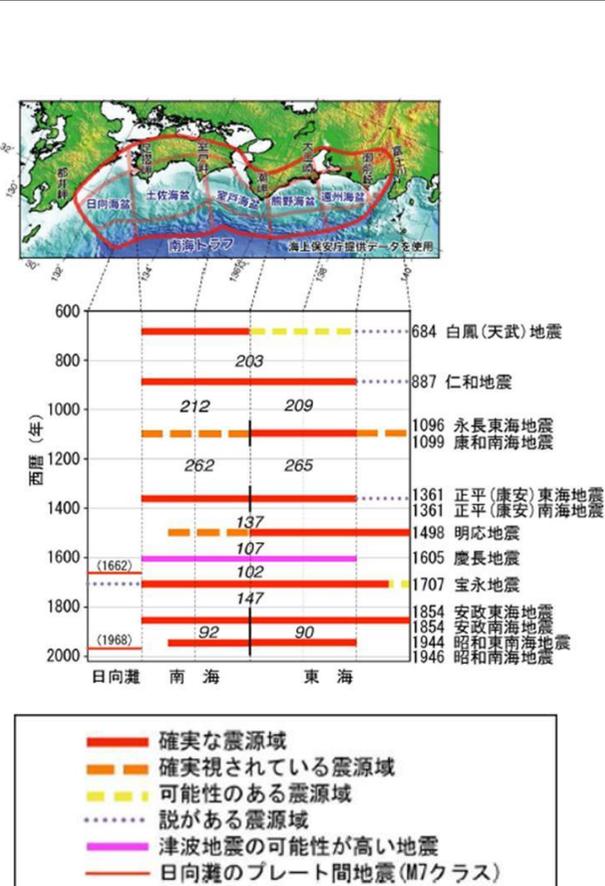
浜岡敷地周辺では、既往最大地震である宝永地震の津波よりも、安政東海地震等の津波の方が大きいことなどを考慮し、既往最大地震以外も含む既往5地震の津波痕跡再現モデルを敷地が位置する遠州灘沿岸域において検討し、それを基にMw9クラスの検討波源モデルを設定する。

(地震調査委員会(2013))  
歴史記録に基づく南海トラフの地震履歴

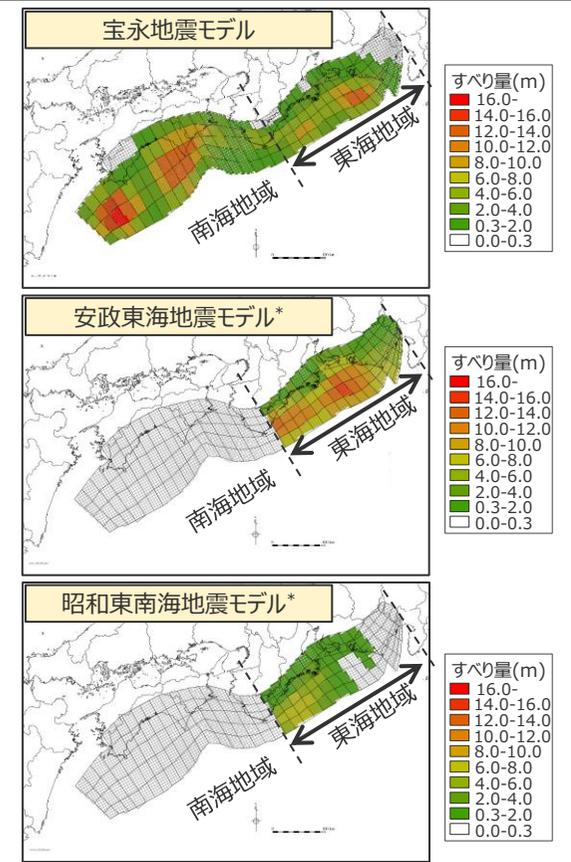
## 2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定

### (敷地周辺への津波影響を特に考慮したモデルの設定方針)

- 南海トラフでは、歴史記録から、宝永地震が既往最大規模の地震とされる(地震調査委員会(2013))が、宝永地震の津波より安政東海・南海地震の津波の方が大きな地域があることも確認されており(中央防災会議(2003)等)、防災対策の観点からはそれぞれの地震を特別に区分することなく検討することが望ましい(内閣府(2012))とされている。
  - 浜岡の敷地周辺においても、既往最大地震である宝永地震の津波よりも、安政東海地震等の津波の方が大きくなっている。また、内閣府(2015)によると、敷地周辺への影響が大きいと考えられる東海地域の波源のすべり量の推定値は、既往最大地震である宝永地震のものよりも、安政東海地震のものの方が大きくなっている。
- ⇒そこで、より敷地への影響が大きいモデルを設定する観点から、敷地への津波影響が支配的である東海地域に着目して、既往最大地震以外も含む既往5地震の津波痕跡再現モデルを敷地が位置する遠州灘沿岸域において検討し、それを基にMw9クラスの検討波源モデルを設定する。



\*1 箇所ごとの堆積物の最大標高が0m以上のもの。  
 \*2 敷地において保守的に津波堆積物と評価したイベント堆積物について、堆積当時の地形が、現在と異なり、海から近く津波が集まりやすい谷地形であったことが、堆積物の分布標高等に影響を与える要因と考えられる。



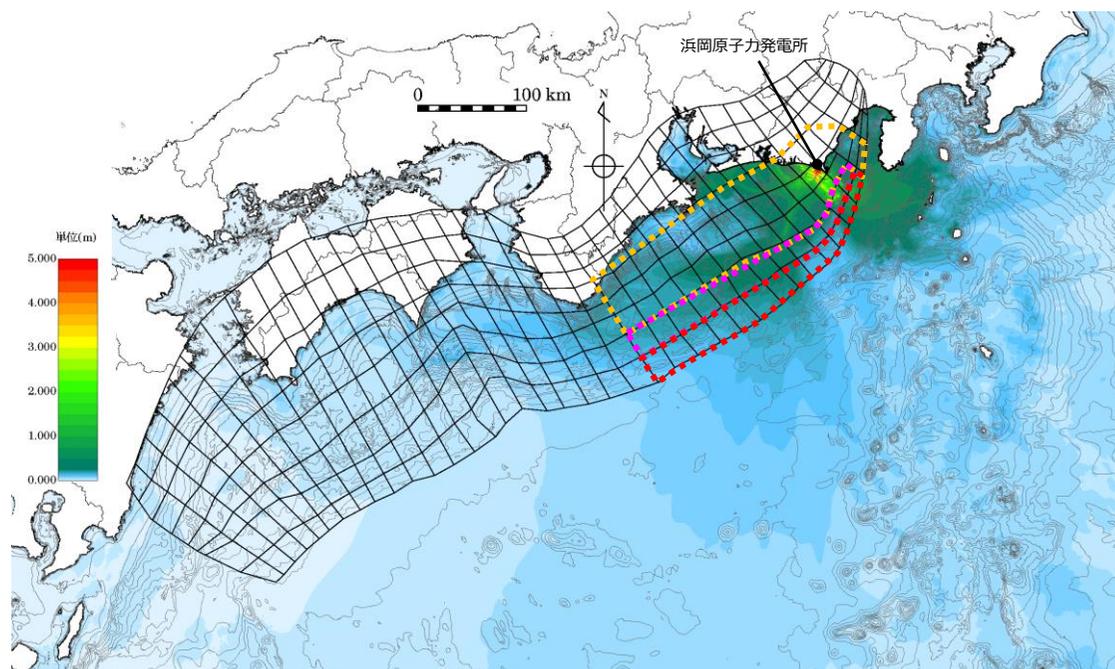
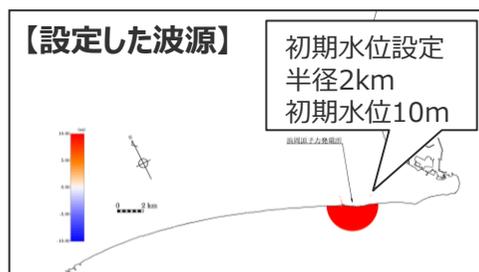
(内閣府(2015)に基づき作成)  
 \*安政東海・南海地震モデル、昭和東南海・南海地震モデルの東海地域のすべり量分布を表示  
 過去地震の津波を再現するインバージョンモデル

歴史記録に基づく南海トラフの地震履歴

## 2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定 (補足：敷地への津波影響が大きい領域の検討)

■ 発電所敷地前面に初期波源を仮定した津波シミュレーションの結果に基づくと、敷地への影響が大きいのは、東海地域の領域となっている。

・発電所敷地前面に初期波源を仮定した津波シミュレーションの詳細は、第1109回補足説明資料6-2章参照



南海トラフ周辺の最大水位上昇量

・グリーンの法則に基づき、水位を修正している。

### 内閣府の最大クラスモデルケース①のすべり量設定

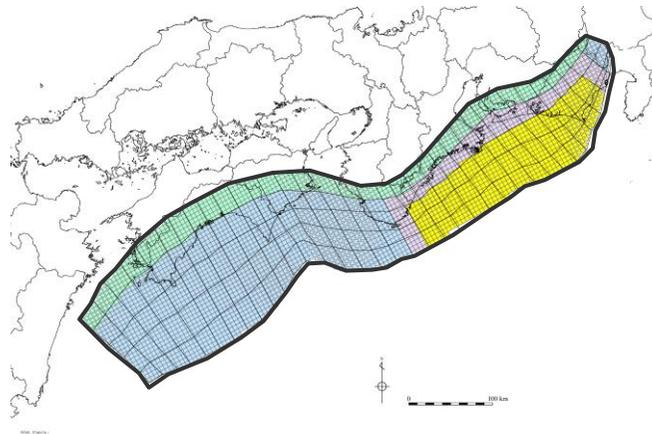
- 大すべり域のすべり量（平均すべり量の2倍）
- 中間大すべり域のすべり量（平均すべり量の3倍）
- 超大すべり域のすべり量（平均すべり量の4倍）

敷地への津波影響が大きい領域の検討  
(発電所敷地前面に初期波源を仮定した場合の津波シミュレーション)

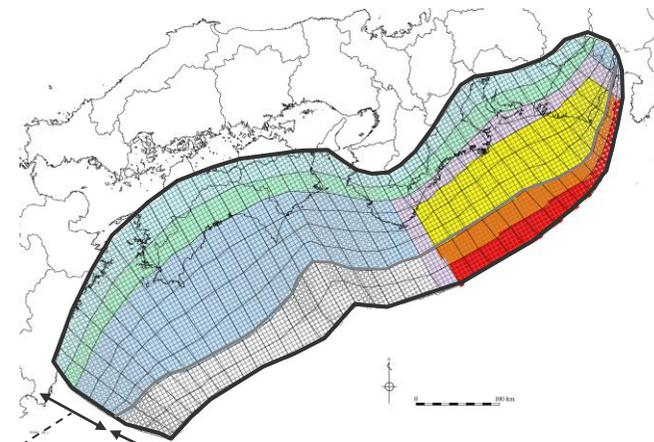
## 2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定

### （検討波源モデルAの設定）

- 遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルは、遠州灘沿岸域に大きな影響を与えた既往5地震（1498年明応地震、1605年慶長地震、1707年宝永地震、1854年安政東海地震、1944年昭和東南海地震）の津波痕跡高に基づき、正対する沿岸域に大きな津波を発生させる内閣府(2012)を参考とした手法（超大すべり域のないMw8クラスのすべり量分布の特性化方法）を用いて設定した。
- 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルAは、遠州灘沿岸域の5地震の津波痕跡再現モデルを基に、東北沖地震において巨大津波が発生した要因（a地震規模、b浅部の破壊形態）を保守的に考慮することとし、内閣府(2012)の手法（超大すべり域のあるMw9クラスの地震のすべり量分布の特性化方法）を用いて設定した。



遠州灘沿岸域の  
5地震の津波痕跡再現モデル



主部断層 浅部断層  
主部断層：深さ10km以深の断層  
浅部断層：深さ10km以浅の断層

検討波源モデルA

・検討波源モデルの設定方法の詳細については、第1109回 補足説明資料6-1章を参照。

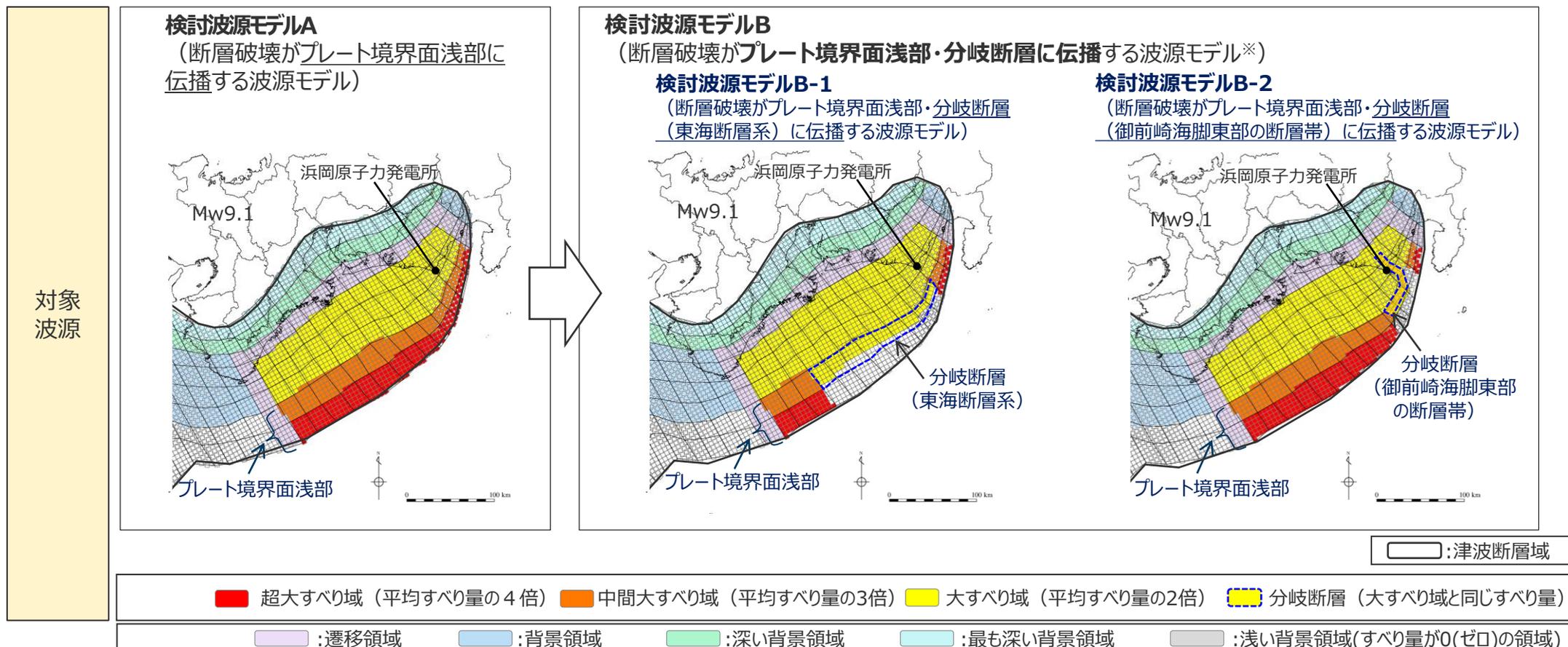
津波断層域 4倍すべり域 3倍大すべり域 2倍すべり域 遷移領域 背景領域 深い背景領域 最も深い背景領域 浅い背景領域(すべり量が0(ゼロ)の領域)

・なお、駿河湾内のトラフ軸付近の浅部領域については、他の領域に比べ、プレート境界面の深さ10kmの位置がトラフ軸に近くなり、また、トラフ軸沿いの津波断層モデルの面積も狭くなることから、この領域は分岐断層的な運動をする領域とみなす（内閣府(2012)）とされるが、検討波源モデルAでは敷地への影響の観点から大すべり域のすべり量（平均すべり量の2倍のすべり量）ではなく超大すべり域のすべり量（平均すべり量の4倍のすべり量）を設定した。

## 2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定

### （検討波源モデルBの設定）

- 断層破壊がプレート境界面浅部まで伝播する検討波源モデルAに対して、南海トラフの特徴の考慮として断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層に伝播する検討波源モデルBを設定した。
- 検討波源モデルBについては、分岐断層として東海断層系を考慮した「検討波源モデルB-1」と、御前崎海脚東部の断層帯・牧ノ原南稜の断層を考慮した「検討波源モデルB-2」を設定した。



※ 地質調査および浅部の破壊形態の影響検討の結果を踏まえ、敷地前面に位置する東海断層系を考慮した検討波源モデルB-1と、敷地に近い御前崎海脚東部の断層帯・牧ノ原南稜の断層を考慮した検討波源モデルB-2を設定した。（詳細は第1109回 補足説明資料6-1章を参照）

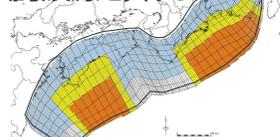
## 2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定

(検討波源モデルDの設定：広域モデルの超大すべり域の深さ反映の考え方)

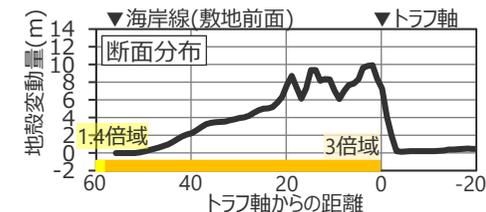
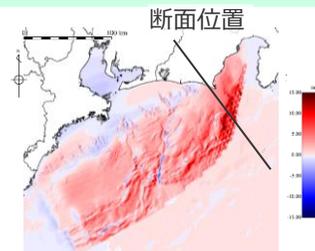
- 設定した既往最大地震の広域の津波特性を考慮したモデル (検討波源モデルC) と、敷地周辺への津波影響を特に考慮したモデル (検討波源モデルA) を比較した結果、検討波源モデルCの超大すべり域が検討波源モデルAよりも深い領域まで設定されていることから、超大すべり域により励起されて到来する特に大きい津波の継続時間が長くなり、敷地への津波影響が大きくなる可能性があると考えられる。
- そこで、敷地への影響の観点から、検討波源モデルAに対し、検討波源モデルCの超大すべり域の深さの設定を取り込んだ検討波源モデルD (超大すべり域の深さを広域モデルと同じとしたモデル) を設定することとした。

○既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル

検討波源モデルC



(3倍すべり域を広域に設定したモデル)

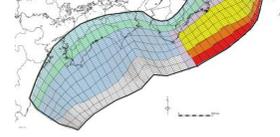


検討波源モデルCは検討波源モデルAと比較して深い領域まで超大すべり域を設定  
→ 到来する特に大きい津波の継続時間が長くなり、敷地への津波影響が大きくなる可能性

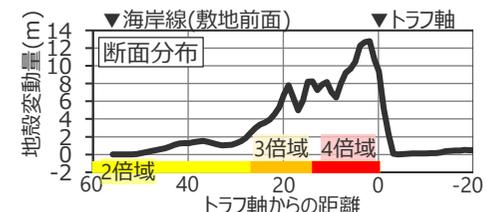
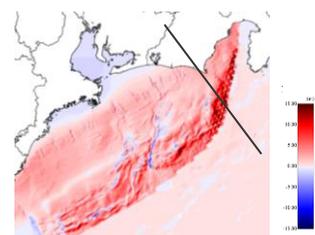
より敷地への影響が大きいモデルを設定

○敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル

検討波源モデルA

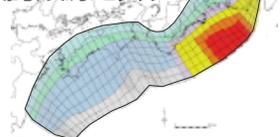


(4倍すべり域を東海域に設定したモデル)

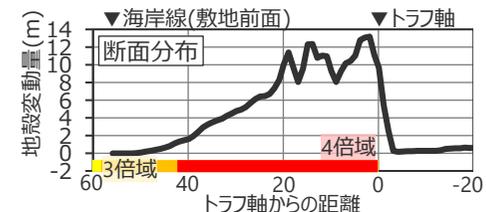
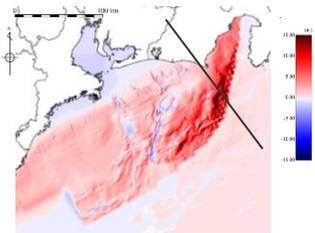


(広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデルも設定)

検討波源モデルD



(超大すべり域の深さを広域モデルと同じとしたモデル)



■ : 4倍すべり域 ■ : 3倍すべり域 ■ : 2倍すべり域もしくは1.4倍すべり域 ■ : 遷移領域 ■ : 背景領域もしくは基本すべり域 ■ : 深い背景領域 ■ : 最も深い背景領域 ■ : 浅い背景領域(すべり量が0(ゼロ)の領域)

## 2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定

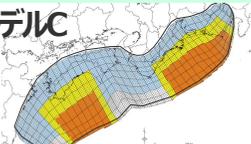
### （検討波源モデルDの設定：（補足）水位上昇側の津波評価結果の確認）

- 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCと、敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルA、Dの水位上昇側の津波評価結果（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ結果※）を以下に示す。
- 検討波源モデルCは、検討波源モデルAと比べて、超大すべり域が深い領域まで設定されていることから、押し波第1波の特に大きい津波の継続時間が相対的に長く、取水槽の水位も大きくなっていることが確認できる。
- 検討波源モデルD（検討波源モデルAに対し、広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデル）は、取水槽への影響が比較的大きい検討波源モデルCの津波の特徴を反映したうえで、検討波源モデルC、Aよりも取水槽の水位が大きくなっていることを確認した。

※大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ結果は、p.37参照

○既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル

#### 検討波源モデルC



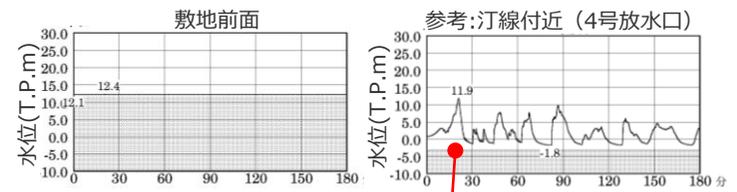
超大すべり域の面積割合：  
3倍すべり域を15%の面積で設定

超大すべり域の深さ：  
海溝軸～津波断層域の概ね1/3の深さの領域

大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ結果

最大上昇水位(T.P. m)					備考
敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽	
12.4	5.3	7.6	7.6	9.5	東海地域の最大すべり域を東へ60km

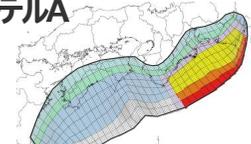
取水槽への影響が比較的大きい



特に大きい津波の継続時間が相対的に長い水位の時刻歴波形

○敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル

#### 検討波源モデルA



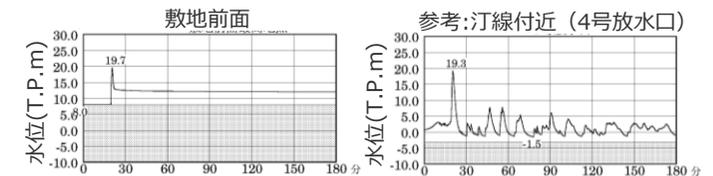
超大すべり域の面積割合：  
4倍すべり域を5%の面積で、  
3倍すべり域を10%の面積で設定

超大すべり域の深さ：  
浅部断層の領域

大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ結果

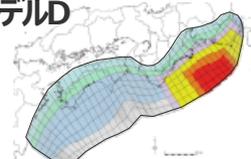
最大上昇水位(T.P. m)					備考
敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽	
19.7	4.7	7.2	8.0	9.9	東海地域の最大すべり域を東へ40km

（広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデルも設定）



水位の時刻歴波形

#### 検討波源モデルD



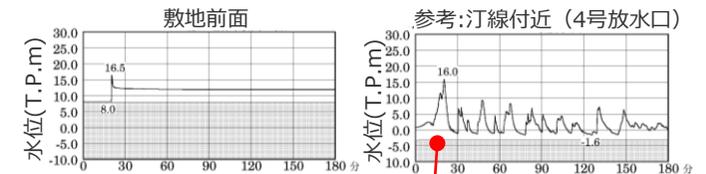
4倍すべり域を5%の面積で、  
3倍すべり域を10%の面積で設定

海溝軸～津波断層域の概ね1/3の深さの領域

大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ結果

最大上昇水位(T.P. m)					備考
敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽	
16.5	6.2	8.7	9.3	11.3	東海地域の最大すべり域を東へ60km

取水槽への影響が比較的大きい検討波源モデルCの特徴を反映したうえで、検討波源モデルC、Aよりも取水槽の水位が大きくなっていることを確認



特に大きい津波の継続時間が相対的に長い水位の時刻歴波形

## 2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定

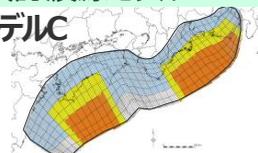
### （検討波源モデルDの設定：（補足）水位下降側の津波評価結果の確認）

- 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCと、敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルA、Dの水位下降側の津波評価結果（大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ結果※）を以下に示す。
- 検討波源モデルCは、超大すべり域が検討波源モデルAよりも深い領域まで設定されているが、それによる引き波への影響は小さく、水位低下時間は検討波源モデルAの方が長くなっていることを確認した。
- 検討波源モデルD（検討波源モデルAに対し、広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデル）は、水位低下時間が、検討波源モデルCよりも長く、検討波源モデルAよりも短くなっていることを確認した。

※大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ結果は、p.38参照

#### ○既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル

##### 検討波源モデルC

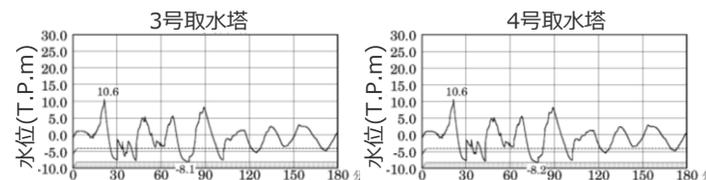


超大すべり域の面積割合：  
3倍すべり域を15%の面積  
で設定

超大すべり域の深さ：  
海溝軸～津波断層域の  
概ね1/3の深さの領域

#### 大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ結果

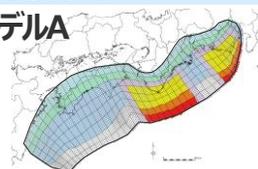
最大下降水位(T.P. m) (水位低下時間)		備考
3号取水塔	4号取水塔	
海底面 (11.4min)	海底面 (10.1min)	東海地域の 大すべり域を東へ 60km



水位の時刻歴波形

#### ○敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル

##### 検討波源モデルA



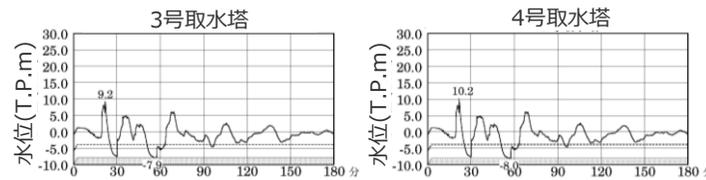
超大すべり域の面積割合：  
4倍すべり域を5%の面積で、  
3倍すべり域を10%の面積  
で設定

超大すべり域の深さ：  
浅部断層の領域

#### より敷地への影響が大きいモデルを設定

#### 大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ結果

最大下降水位(T.P. m) (水位低下時間)		備考
3号取水塔	4号取水塔	
海底面 (12.6min)	海底面 (12.5min)	東海地域の敷地に近い大すべり 域を東へ40km移動、大すべり 域間の距離130km

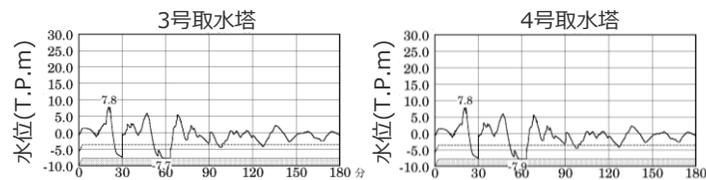


水位の時刻歴波形

（広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの  
超大すべり域の深さを反映したモデルも設定）

#### 大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ結果

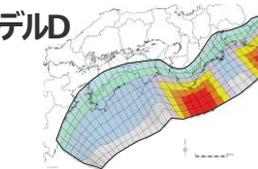
最大下降水位(T.P. m) (水位低下時間)		備考
3号取水塔	4号取水塔	
海底面 (12.5min)	海底面 (12.3min)	東海地域の敷地に近い大すべり 域基準位置、大すべり域間の 距離140km



水位の時刻歴波形

水位低下時間が、検討波源モデルCよりも長く、検討波源モデルA  
よりも短くなっていることを確認した。

##### 検討波源モデルD



4倍すべり域を5%の面積で、  
3倍すべり域を10%の面積で  
設定

海溝軸～津波断層域の  
概ね1/3の深さの領域

## 2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定 (検討波源モデルの設定結果)

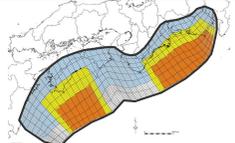
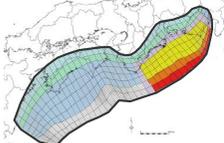
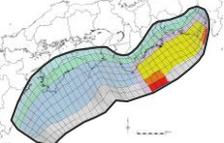
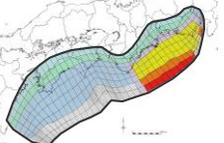
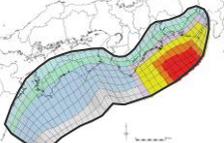
- 検討波源モデルの断層パラメーター一覧は以下のとおり。
- 検討波源モデルは、まず、既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル（検討波源モデルC）を設定したうえで、より敷地への影響が大きいモデルを設定する観点から、敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル（検討波源モデルA、B、D）を設定した。

より敷地への影響が大きいモデルを設定

既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル

敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル

(広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの  
超大すべり域の深さを反映したモデルも設定)

	検討波源モデルC	検討波源モデルA	検討波源モデルB-1	検討波源モデルB-2	検討波源モデルD
波源モデル	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3倍すべり域を広域に設定</li> <li>・断層破壊がプレート境界面浅部に伝播</li> </ul> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4倍すべり域を東海域に設定</li> <li>・断層破壊がプレート境界面浅部に伝播</li> </ul> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4倍すべり域を東海域に設定</li> <li>・断層破壊がプレート境界面浅部・東海断層系に伝播</li> </ul> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4倍すべり域を東海域に設定</li> <li>・断層破壊がプレート境界面浅部・御前崎海脚東部の断層帯に伝播</li> </ul> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4倍すべり域を東海域に設定</li> <li>・超大すべり域の深さを広域モデルと同じとした</li> </ul> 
面積 (km <sup>2</sup> )	144,379	144,379	144,379	144,379	144,379
地震モーメント (Nm)	$6.7 \times 10^{22}$	$6.2 \times 10^{22}$	$5.3 \times 10^{22}$	$6.1 \times 10^{22}$	$6.0 \times 10^{22}$
Mw	9.2	9.1	9.1	9.1	9.1
平均応力降下量 (MPa) ※1	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0
平均すべり量 (m) ※2	12.6	12.1	10.9	12.0	11.8
最大すべり量 (m) ※3	31.3	41.7	37.5	41.7	41.7
剛性率 (N/m <sup>2</sup> )	$4.1 \times 10^{10}$	$4.1 \times 10^{10}$	$4.1 \times 10^{10}$	$4.1 \times 10^{10}$	$4.1 \times 10^{10}$
破壊伝播速度 (km/s)	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0
ライズタイム (s)	150	150	150	150	150

※1 スケーリング則の対象とした平均応力降下量  
 ※2 すべり量が0(ゼロ)でない領域の断層面積に基づき算出  
 ※3 東海地域の最大すべり量を記載

大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディを実施し、基準断層モデルを選定（2.3章）

## 2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定

（検討波源モデルの設定結果：東海地域のすべり量分布）

- 設定した検討波源モデルについて、敷地への影響が支配的である東海地域のすべり量分布は以下のとおり。
- 検討波源モデルは、まず、既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル（検討波源モデルC）を設定したうえで、より敷地への影響が大きいモデルを設定する観点から、敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル（検討波源モデルA、B、D）を設定した。

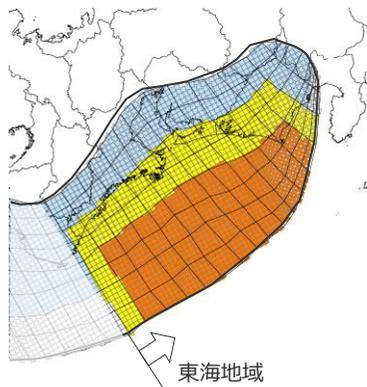
・なお、大すべり域の位置については、別途概略パラメータスタディを実施し、大すべり域の位置を東西に移動させて敷地への影響の大きいケースを検討している。

より敷地への影響が大きいモデルを設定

既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル

検討波源モデルC

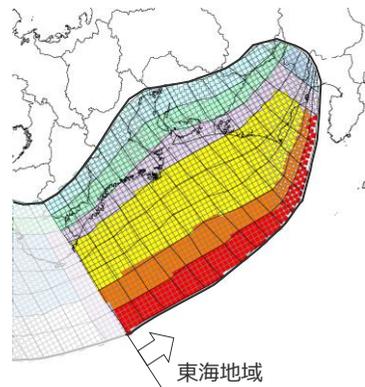
- ・3倍すべり域を広域に設定
- ・断層破壊がプレート境界面浅部に伝播



敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル

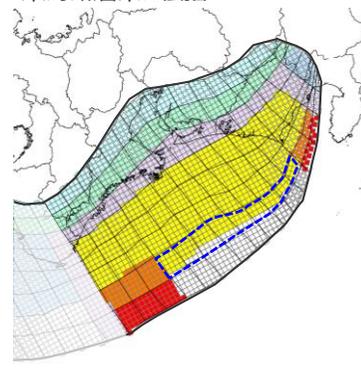
検討波源モデルA

- ・4倍すべり域を東海域に設定
- ・断層破壊がプレート境界面浅部に伝播



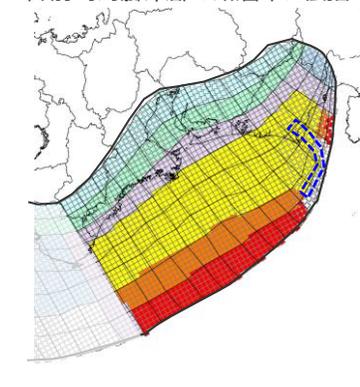
検討波源モデルB-1

- ・4倍すべり域を東海域に設定
- ・断層破壊がプレート境界面浅部・東海断層系に伝播



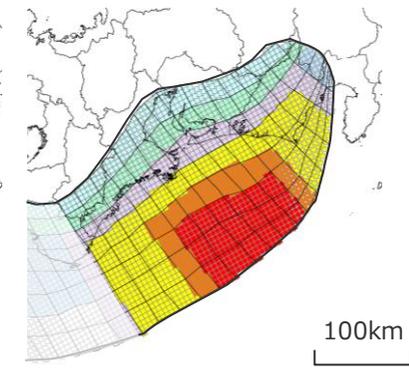
検討波源モデルB-2

- ・4倍すべり域を東海域に設定
- ・断層破壊がプレート境界面浅部・御前崎海脚東部の断層帯に伝播



検討波源モデルD

- ・4倍すべり域を東海域に設定
- ・超大すべり域の深さを広域モデルと同じとした



100km

（広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの超大すべり域の深さを反映したモデルも設定）

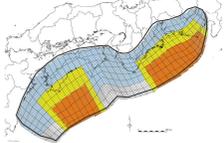
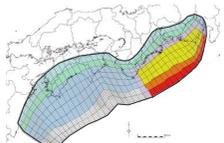
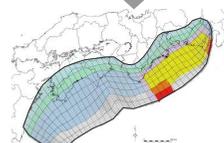
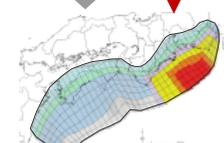
- : 4倍すべり域
- : 3倍すべり域
- : 2倍すべり域もしくは1.4倍すべり域
- : 遷移領域
- : 背景領域
- : 深い背景領域
- : 最も深い背景領域
- : 浅い背景領域(すべり量が0(ゼロ)の領域)
- : 分岐断層

## 2.2 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの設定

（補足：各検討波源モデルの浅部の破壊形態と特性化方法）

■ 各検討波源モデルの浅部の破壊形態と特性化方法を整理した結果は、以下のとおり。

各検討モデルの浅部の破壊形態と特性化方法

		浅部の破壊形態		
		(1)断層破壊がプレート境界面浅部に伝播する場合*1	(2)断層破壊がプレート境界面浅部*1・分岐断層*2に伝播する場合	(3)超大すべり域の深さを広域モデルと同じとした場合*1
特性化方法 (特性化したすべり量と面積割合の設定方法)	既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル (土木学会(2016)の手法)	 検討波源モデルC	検討波源モデルCで代表  (検討波源モデルAの津波評価結果が検討波源モデルBの津波評価結果を上回ることから、浅部の破壊形態(2)の検討は、浅部の破壊形態(1)の検討により代表できると評価。)	—  (検討波源モデルCは、超大すべり域を深い位置に設定していることから、本項目に該当するケースはない。)
	敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル (内閣府(2012)の手法)	 検討波源モデルA	 検討波源モデルB	 検討波源モデルD

\*1 東北沖の特徴の考慮：付加作用が卓越する南海トラフと造構性侵食作用が卓越する東北沖とでは、地震時における浅部のすべり挙動が異なると考えられるが、プレート境界面浅部に破壊が伝播する形態では、保守的に東北沖の浅部の破壊形態の特徴（プレート境界面浅部の超大すべり域）を考慮した。

\*2 南海トラフの特徴の考慮：付加作用が卓越する南海トラフでは、分岐断層に破壊が伝播する形態があると考えられることから、浅部の破壊形態として考慮した。  
 （詳細は、本編資料p.27、第1109回 補足説明資料6-1章(p.354)参照）

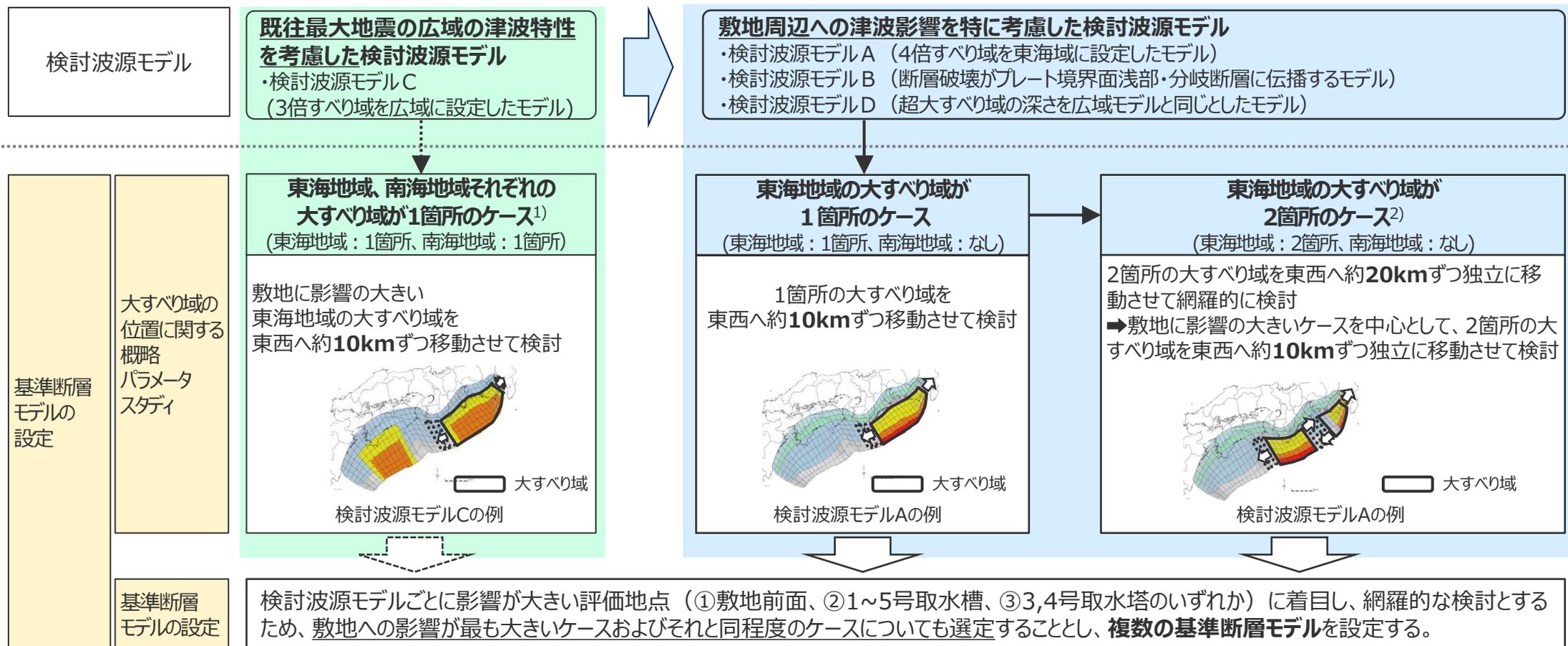
## 2.3 基準断層モデルの設定

### （大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ：検討方針）

- 設定した複数の検討波源モデル(A~D)に対し、敷地への影響が支配的と考えられる大すべり域の位置の不確かさを考慮し、大すべり域の位置を東西に約10kmずつ網羅的に移動させたパラメータスタディを破壊開始点の位置が影響しないよう同時破壊の条件で実施する。検討の結果、水位上昇側・下降側ごとに、敷地への影響が最も大きいケースおよびそれと同程度のケースを選定し、評価地点（①敷地前面、②1~5号取水槽、③3,4号取水塔のいずれか）ごとに、複数の基準断層モデルとして設定する。
- パラメータスタディに当たっては、敷地に影響の大きい東海地域の大すべり域が1箇所のケースのほか、大すべり域が2箇所のケースも検討し、それぞれの大すべり域を東西へ約10kmずつ移動させて検討する。

・同時破壊の条件：断層全体が同時に破壊開始すると仮定した条件（破壊伝播速度：無限大、破壊開始点：-）

#### より敷地への影響が大きいモデルを設定



1) Mw9以上の巨大地震の大すべり域の数は1~2個と分析されている（第1109回補足説明資料6-1章）ことから、広域の津波に着目したモデルでは、大すべり域が東海地域1箇所、南海地域1箇所のケースを検討した。  
2) 東海地域の大すべり域が2箇所のケースは、東海地域の大すべり域が1箇所のケースの概略パラメータスタディ結果を踏まえて、検討波源モデルA、B-1、Dを対象として実施した。また、大すべり域の位置は、内閣府の最大クラスモデルケース⑧の大すべり域の位置を基準位置とした。  
・概略パラメータスタディモデルの波源モデル図およびすべり量分布を含む断層パラメータはデータ集および第717回、第981回審査会合 机上配布資料に記載。

## 2.3 基準断層モデルの設定

### （大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ：結果一覧（水位上昇側））

■ 水位上昇側の大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディの結果、敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルA、Dの影響が大きいことを確認し、そのうち敷地への影響が最も大きいケースおよびそれと同程度のケースを選定し、基準断層モデルとして設定した。

- ① 敷地前面への影響が大きいケース： 基準断層モデル1-1～1-5（検討波源モデルA、大すべり域1箇所）
- ② 1～5号取水槽への影響が大きいケース： 基準断層モデル3-1～3-3（検討波源モデルD、大すべり域1箇所）

・大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ結果の詳細は、本編2.3章参照。

#### ➤ 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの概略パラメータスタディ結果

モデル名	大すべり域の数	最大上昇水位(T.P. m)					備考
		敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽	
検討波源モデルC (3倍すべり域を広域に設定したモデル)	東海地域、南海地域：1箇所	12.4	5.3	7.6	7.6	9.5	東海地域の大すべり域を東へ60km

より敷地への影響が大きいモデルを設定

#### ➤ 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの概略パラメータスタディ結果

検討波源モデルA (4倍すべり域を東海地域に設定したモデル)	東海地域：1箇所	19.7	4.7	7.2	8.0	9.9	東海地域の大すべり域を東へ40km	⇒基準断層モデル1-1
		19.7	4.7	7.2	8.0	9.9	東海地域の大すべり域を東へ30km	⇒基準断層モデル1-2
		19.6	4.6	7.2	8.0	9.9	東海地域の大すべり域を東へ20km	⇒基準断層モデル1-3
		19.6	4.6	7.2	8.0	9.9	東海地域の大すべり域を東へ10km	⇒基準断層モデル1-4
		19.6	4.6	7.2	8.0	9.9	基準位置	⇒基準断層モデル1-5
検討波源モデルB-1 (断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層(東海断層系)に伝播するモデル)	東海地域：1箇所	10.7	4.6	6.5	6.5	8.4	東海地域の大すべり域を西へ20km	
	東海地域：2箇所	14.5	3.6	6.2	6.4	8.7	東海地域の大すべり域を東へ40km移動、大すべり域間の距離100km	
検討波源モデルB-2 (断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層(御前崎海脚東部の断層帯)に伝播するモデル)	東海地域：1箇所	11.1	4.9	6.6	6.4	7.7	東海地域の大すべり域を東へ40km	
検討波源モデルD (超大すべり域の深さを広域モデルと同じとしたモデル)	東海地域：1箇所	16.4	6.0	8.7	9.3	11.2	東海地域の大すべり域を東へ70km	⇒基準断層モデル3-1
		16.5	6.2	8.7	9.3	11.3	東海地域の大すべり域を東へ60km	⇒基準断層モデル3-2
		16.5	6.1	8.7	9.2	11.2	東海地域の大すべり域を東へ50km	⇒基準断層モデル3-3
	東海地域：2箇所	15.7	5.0	8.0	7.7	9.5	東海地域の大すべり域を西へ60km移動、大すべり域間の距離80km	

・太字：各評価地点において最も値の大きいケース  
・朔望平均満潮位T.P. + 0.80mを考慮

■：評価地点における最大上昇水位が大きく、基準断層モデルとして選定することとしたケース  
(赤字は全ての概略パラメータスタディ結果の中での最大値およびそれと同程度の値)

## 2.3 基準断層モデルの設定

### （大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ：結果一覧（水位下降側））

- 水位下降側の大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディの結果、敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルA,Dの影響が大きいことを確認し、そのうち敷地への影響が最も大きいケースおよびそれと同程度のケースを選定し、基準断層モデルとして設定した。

- ③3、4号取水塔への影響が大きいケース： 基準断層モデル2-1～2-3（検討波源モデルA、大すべり域2箇所の場合）  
基準断層モデル4-1（検討波源モデルD、大すべり域2箇所の場合）

・大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディ結果の詳細は、本編2.3章参照。

#### ➤ 既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルの概略パラメータスタディ結果

モデル名	大すべり域の数	最大下降水位(T.P. m) (水位低下時間)		備考
		3号取水塔	4号取水塔	
検討波源モデルC (3倍すべり域を広域に設定したモデル)	東海地域、 南海地域： 1箇所	海底面(11.4min)	海底面(10.1min)	東海地域の大すべり域を東へ60km

より敷地への影響が大きいモデルを設定

#### ➤ 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルの概略パラメータスタディ結果

検討波源モデルA (4倍すべり域を東海域に設定したモデル)	東海地域： 1箇所	海底面(7.1min)	海底面(6.9min)	東海地域の大すべり域を西へ40km	
	東海地域： 2箇所	海底面(12.6min)	海底面(12.5min)	東海地域の大すべり域を東へ40km移動、大すべり域間の距離130km	⇒基準断層モデル2-1
		海底面(12.5min)	海底面(12.5min)	東海地域の大すべり域を東へ40km移動、大すべり域間の距離140km	⇒基準断層モデル2-2
検討波源モデルB-1 (断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層(東海断層系)に伝播するモデル)	東海地域： 1箇所	海底面(5.5min)	海底面(5.5min)	東海地域の大すべり域を西へ10km	
	東海地域： 2箇所	海底面(11.9min)	海底面(11.9min)	東海地域の大すべり域を東へ40km移動、大すべり域間の距離120km	
検討波源モデルB-2 (断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層(御前崎海脚東部の断層帯)に伝播するモデル)	東海地域： 1箇所	海底面(8.7min)	海底面(8.7min)	東海地域の大すべり域を西へ40km	
検討波源モデルD (超大すべり域の深さを広域モデルと同じとしたモデル)	東海地域： 1箇所	海底面(9.3min)	海底面(9.2min)	東海地域の大すべり域を西へ10km	
	東海地域： 2箇所	海底面(12.5min)	海底面(12.3min)	東海地域の大すべり域を東へ40km移動、大すべり域間の距離140km	⇒基準断層モデル4-1

- ・太字：各評価地点において最も値の大きいケース
- ・朔望平均干潮位T.P. - 0.93mを考慮
- ・海底面：最大下降水位時に海底面がほぼ露出している（水深1m未満である）ことを示す。

□：評価地点における水位低下時間が大きく、基準断層モデルとして選定することとしたケース  
（青字は全ての概略パラメータスタディ結果の中での最大値およびそれと同程度の値）

## 2.3 基準断層モデルの設定

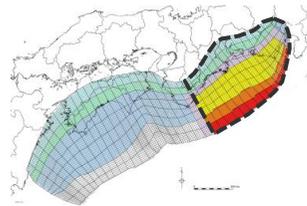
### (日本海溝の手法を用いたモデルとの比較：検討概要)

- 基準断層モデルとして選定した、敷地への影響が大きい検討波源モデルA、Dは、最新知見に照らしてMw9クラスのモデル設定として妥当と考えられる内閣府(2012)の手法を用い、既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの特徴も取り入れて設定したモデルである。
- ここでは、この「検討波源モデルA、D」について、日本海溝で検討されたMw9クラスの津波評価手法を用いて設定した「日本海溝の津波評価手法モデル①～③」のそれぞれと、敷地への影響が支配的である東海地域に着目してすべり量分布、地殻変動量分布の比較を実施し、日本海溝の津波評価手法モデルのすべり量分布、地殻変動量分布の特徴が考慮されていることを確認することにより、日本海溝の津波評価手法モデルとの比較を踏まえてもMw9クラスのモデル設定として妥当であることを確認する。
- ここで、日本海溝の津波評価手法モデル①～③は、日本海溝において検討されたMw9クラスの津波評価手法およびパラメータを用いて設定した。なお、検討対象領域が日本海溝ではなく南海トラフとなることを踏まえ、波源域に関連するパラメータ(断層面積、剛性率等)には、南海トラフの知見を反映した。

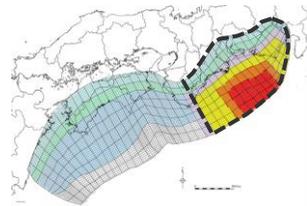
・日本海溝の津波評価手法モデルの設定方法の詳細は、第1109回 補足説明資料6-7章を参照。

#### 基準断層モデルとして選定したMw9クラスの検討波源モデル

- ・敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル
- ・内閣府(2012)により特性化されたMw9クラスの地震のすべり量分布を用いて設定



検討波源モデルA  
(敷地周辺の津波影響を特に考慮)



検討波源モデルD  
(敷地周辺の津波影響を特に考慮)

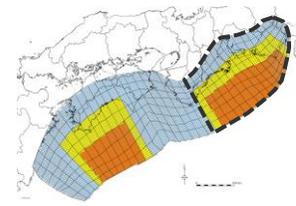
(広域の津波特性を考慮した  
検討波源モデルCの超大すべり域の深さを考慮)

- ・大すべり域の位置に関する概略パラメータスタディの結果、敷地への影響が大きく基準断層モデルとして選定した検討波源モデルA、Dを比較対象とする。

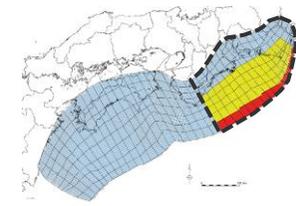
東海地域

#### 日本海溝において検討されたMw9クラスの津波評価手法を用いたモデル

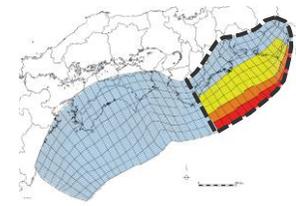
- ・日本海溝で検討されたMw9クラスの津波評価手法を用いて設定



日本海溝の津波評価  
手法モデル①  
(広域の津波特性を考慮)



日本海溝の津波評価  
手法モデル②  
(敷地周辺の津波影響を特に考慮)



日本海溝の津波評価  
手法モデル③  
(敷地周辺の津波影響を特に考慮)

- ・日本海溝において検討されたMw9クラスの津波評価手法およびパラメータを用いて設定した。なお、検討対象領域が日本海溝ではなく南海トラフとなることを踏まえ、波源域に関連するパラメータ(断層面積、剛性率等)には、南海トラフの知見を反映した。

東海地域

比較

敷地への影響が大きい東海地域に着目して、それぞれのすべり量分布、地殻変動量分布の比較を実施し、日本海溝の津波評価手法モデルのすべり量分布、地殻変動量分布の特徴が考慮されていることを確認することによりMw9クラスのモデル設定として妥当であることを確認する。

□:津波断層域 ■:4倍すべり域 ■:3倍すべり域 ■:2倍すべり域もしくは1.4倍すべり域 ■:遷移領域 ■:背景領域もしくは基本すべり域 ■:深い背景領域 ■:最も深い背景領域 ■:浅い背景領域(すべり量が0(ゼロ)の領域)

## 2.3 基準断層モデルの設定

### (日本海溝の手法を用いたモデルとの比較：すべり量分布の比較)

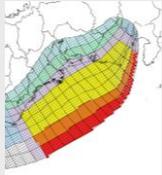
- 検討波源モデルA、Dと日本海溝の津波評価手法モデルのすべり量分布について、敷地への影響が支配的である東海地域において比較した結果は以下のとおり。
- 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルA、Dは、日本海溝の津波評価手法モデルと同程度の最大40m程度の超大すべり域のすべり量を考慮している。また、超大すべり域の深さについて、検討波源モデルAは日本海溝の津波評価手法モデル②③の特徴を、検討波源モデルDは日本海溝の津波評価手法モデル①の特徴をそれぞれ考慮している。

検討波源モデルの東海地域のすべり量分布(m)

超大すべり域：

4倍すべり域を5%の面積で、3倍すべり域を10%の面積で 東海地域の超大すべり域の  
浅部の領域に設定 最大すべり量：41.7m

検討波源モデルA

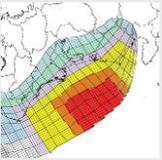


40km↓	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
30km↓	1	2.5	2.5	2.5	2.5	2.4	2.6	2.3	2.3	1.9	1.9	1.5	1.5	1.5	1.4	1.4	1.0	1.0
	2	5.1	5.1	5.0	5.0	4.8	5.2	5.2	4.5	4.5	3.9	3.9	3.9	3.1	3.1	3.1	2.7	2.7
20km↓	3	10.5	11.6	11.6	11.5	11.1	11.1	11.8	11.8	10.4	10.4	8.8	8.8	8.8	7.0	7.0	5.1	5.1
	4	10.5	14.3	18.2	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	7.4
	5	10.5	14.3	18.2	17.9	17.9	17.3	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	10.9	10.9	8.2
10km↓	6	10.5	14.3	18.2	18.2	17.9	17.9	17.3	20.8	20.8	18.5	18.5	16.3	16.3	13.8	13.8	10.9	8.2
	7	0.0	14.3	27.2	27.2	26.9	26.9	26.0	26.0	31.3	31.3	27.7	27.7	24.4	24.4	20.8	16.4	8.2
0km↓	8	0.0	14.3	37.5	36.3	36.3	35.8	34.6	34.6	41.7	41.7	41.7	37.0	37.0	32.6	27.7	21.9	8.2

超大すべり域：

4倍すべり域を5%の面積で、3倍すべり域を10%の面積で 東海地域の超大すべり域の  
深い領域まで設定 最大すべり量：41.7m

検討波源モデルD



40km↓	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
30km↓	1	2.2	2.2	2.2	2.2	2.1	2.3	2.0	2.0	1.7	1.7	1.4	1.4	1.4	1.2	1.2	0.9	0.9
	2	4.5	4.5	4.4	4.4	4.3	4.6	4.6	4.0	4.0	3.4	3.4	3.4	2.7	2.7	2.4	2.4	1.7
20km↓	3	9.3	11.3	11.3	11.2	10.8	10.8	11.5	11.5	10.2	10.2	8.6	8.6	8.6	6.8	6.8	4.8	4.8
	4	9.3	13.7	18.1	17.9	17.9	17.3	20.8	18.5	18.5	16.3	13.8	13.8	13.8	10.9	10.9	7.2	3.5
	5	9.3	13.7	18.1	17.9	17.9	25.9	25.9	31.3	27.7	27.7	24.4	24.4	20.7	13.8	10.9	7.9	4.8
10km↓	6	9.3	13.7	18.1	18.1	17.9	26.9	34.6	41.7	41.7	37.0	37.0	32.6	24.4	13.8	13.8	10.9	7.9
	7	0.0	13.7	18.1	18.1	17.9	26.9	34.6	34.6	41.7	41.7	37.0	37.0	24.4	16.3	13.8	10.9	7.9
0km↓	8	0.0	13.7	18.8	18.1	18.1	26.9	34.6	34.6	41.7	41.7	41.7	37.0	27.7	16.3	13.8	10.9	7.9

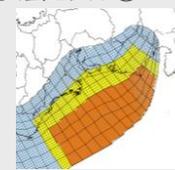
- ・ 大すべり域の位置については、別途概略パラメータスタディを実施し、大すべり域の位置を東西に移動させて敷地への影響の大きいケースを検討している。(本編2.3章参照)

日本海溝の津波評価手法モデルの東海地域のすべり量分布(m)

超大すべり域：

3倍すべり域を15%の面積で 東海地域の超大すべり域の  
深い領域まで設定 最大すべり量：36.7m

日本海溝の津波評価  
手法モデル①



40km↓	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
30km↓	1	3.5	3.5	3.5	3.5	3.4	3.6	3.2	3.2	2.7	2.7	2.1	2.1	2.1	2.1	1.9	1.9	1.4
	2	3.5	3.5	3.5	3.5	3.4	3.6	3.6	3.2	3.2	2.7	2.7	2.1	2.1	2.1	1.9	1.9	1.4
20km↓	3	3.6	3.5	14.9	14.7	14.2	14.2	15.2	15.2	13.4	13.4	11.4	11.4	11.4	9.0	9.0	8.0	1.9
	4	3.6	3.5	14.9	14.7	14.7	14.2	17.1	15.2	15.2	13.4	11.4	11.4	11.4	11.4	9.0	9.0	1.9
	5	3.6	3.6	14.9	31.6	31.6	30.5	30.5	36.7	32.6	32.6	28.7	28.7	24.4	24.4	19.3	9.0	1.9
10km↓	6	3.6	3.6	14.9	32.0	31.6	31.6	30.5	36.7	36.7	32.6	32.6	28.7	28.7	24.4	24.4	9.0	1.9
	7	3.8	3.6	14.9	32.0	31.6	31.6	30.5	36.7	36.7	32.6	32.6	28.7	28.7	24.4	24.4	9.0	1.9
0km↓	8	3.8	3.6	15.4	32.0	32.0	31.6	30.5	36.7	36.7	32.6	32.6	28.7	28.7	24.4	24.4	9.0	1.9

超大すべり域：

4倍すべり域を5%の面積で 東海地域の超大すべり域の  
浅部の領域に設定 最大すべり量：36.5m

日本海溝の津波評価  
手法モデル②

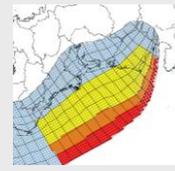


40km↓	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
30km↓	1	8.4	8.4	8.3	8.3	8.0	8.6	7.6	7.6	6.4	6.4	5.1	5.1	5.1	5.1	4.5	4.5	3.3
	2	8.4	8.4	8.3	8.3	8.0	8.6	8.6	7.6	7.6	6.4	6.4	6.4	5.1	5.1	5.1	4.5	3.3
20km↓	3	8.7	8.4	8.4	8.3	8.0	8.0	8.6	8.6	7.6	7.6	6.4	6.4	6.4	5.1	5.1	4.5	3.3
	4	8.7	8.4	15.9	15.7	15.7	15.1	18.2	16.2	16.2	14.3	12.1	12.1	12.1	12.1	9.6	9.6	4.5
	5	8.7	8.7	15.9	15.7	15.7	15.1	15.1	18.2	16.2	16.2	14.3	14.3	12.1	12.1	9.6	9.6	4.5
10km↓	6	8.7	8.7	15.9	15.9	15.7	15.7	15.1	18.2	18.2	16.2	16.2	14.3	14.3	12.1	12.1	9.6	4.5
	7	9.0	8.7	15.9	15.9	15.7	15.7	15.1	15.1	18.2	18.2	16.2	16.2	14.3	14.3	12.1	9.6	4.5
0km↓	8	9.0	8.7	32.8	31.7	31.7	31.3	30.3	30.3	36.5	36.5	36.5	32.3	32.3	28.5	24.2	19.1	4.5

超大すべり域：

4倍すべり域を5%の面積で、3倍すべり域を10%の面積で 東海地域の超大すべり域の  
浅部の領域に設定 最大すべり量：35.1m

日本海溝の津波評価  
手法モデル③



40km↓	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
30km↓	1	8.2	8.2	8.1	8.1	7.8	8.4	7.4	7.4	6.3	6.3	5.0	5.0	5.0	5.0	4.4	4.4	3.2
	2	8.2	8.2	8.1	8.1	7.8	8.4	8.4	7.4	7.4	6.3	6.3	6.3	5.0	5.0	4.4	4.4	3.2
20km↓	3	8.5	8.2	8.2	8.1	7.8	7.8	8.4	8.4	7.4	7.4	6.3	6.3	6.3	5.0	5.0	4.4	3.2
	4	8.5	8.2	15.3	15.1	15.1	14.6	17.6	15.6	15.6	13.7	11.6	11.6	11.6	11.6	9.2	9.2	4.4
	5	8.5	8.5	15.3	15.1	15.1	14.6	14.6	17.6	15.6	15.6	13.7	13.7	11.6	11.6	9.2	9.2	4.4
10km↓	6	8.5	8.5	15.3	15.3	15.1	15.1	14.6	17.6	17.6	15.6	15.6	13.7	13.7	11.6	11.6	9.2	4.4
	7	8.8	8.5	22.9	22.9	22.6	21.9	21.9	26.3	26.3	23.4	23.4	20.6	20.6	17.5	13.8	4.4	4.4
0km↓	8	8.8	8.5	31.6	30.6	30.6	30.2	29.1	29.1	35.1	35.1	31.1	31.1	31.1	27.4	23.3	18.4	4.4

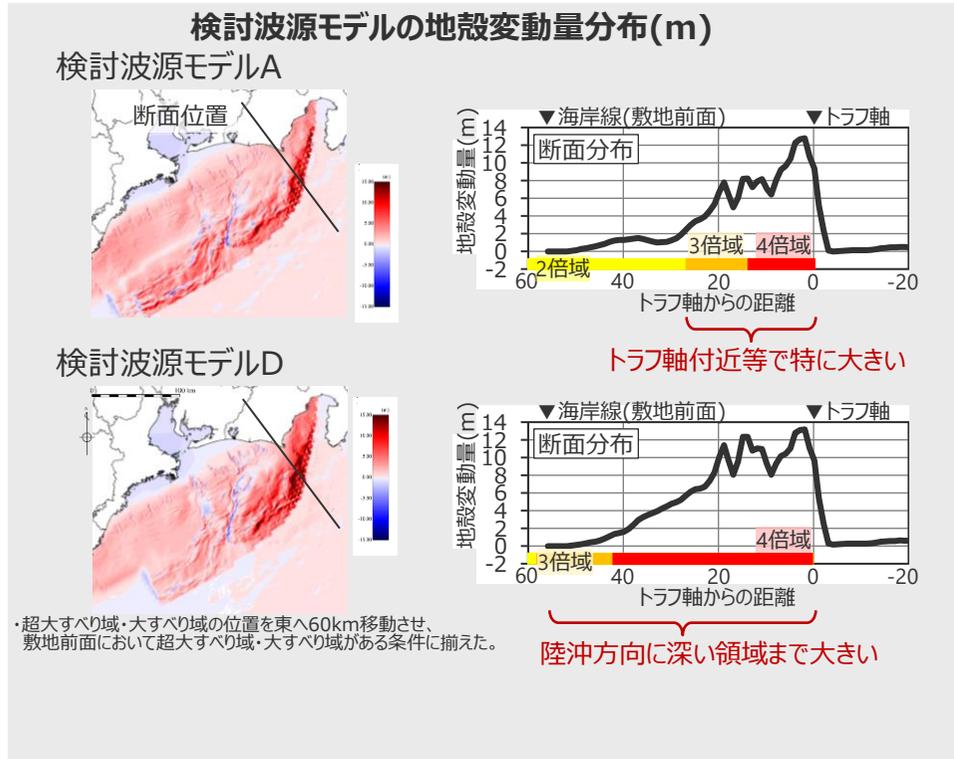
■ :4倍すべり域 ■ :3倍すべり域 ■ :2倍すべり域もしくは1.4倍すべり域 ■ :遷移領域 ■ :背景領域もしくは基本すべり域 ■ :深い背景領域 ■ :最も深い背景領域 ■ :浅い背景領域(すべり量が0(ゼロ)の領域)

- ・ すべり量分布の番号は南海トラフのプレート境界の全領域を約20km四方に分割して、西側から東側に順に1から38まで、陸側から海溝軸側に1から8までとした。
- ・ 日本海溝の津波評価手法モデルのすべり量分布の設定の詳細は、第1109回 補足説明資料6-7を参照。

## 2.3 基準断層モデルの設定

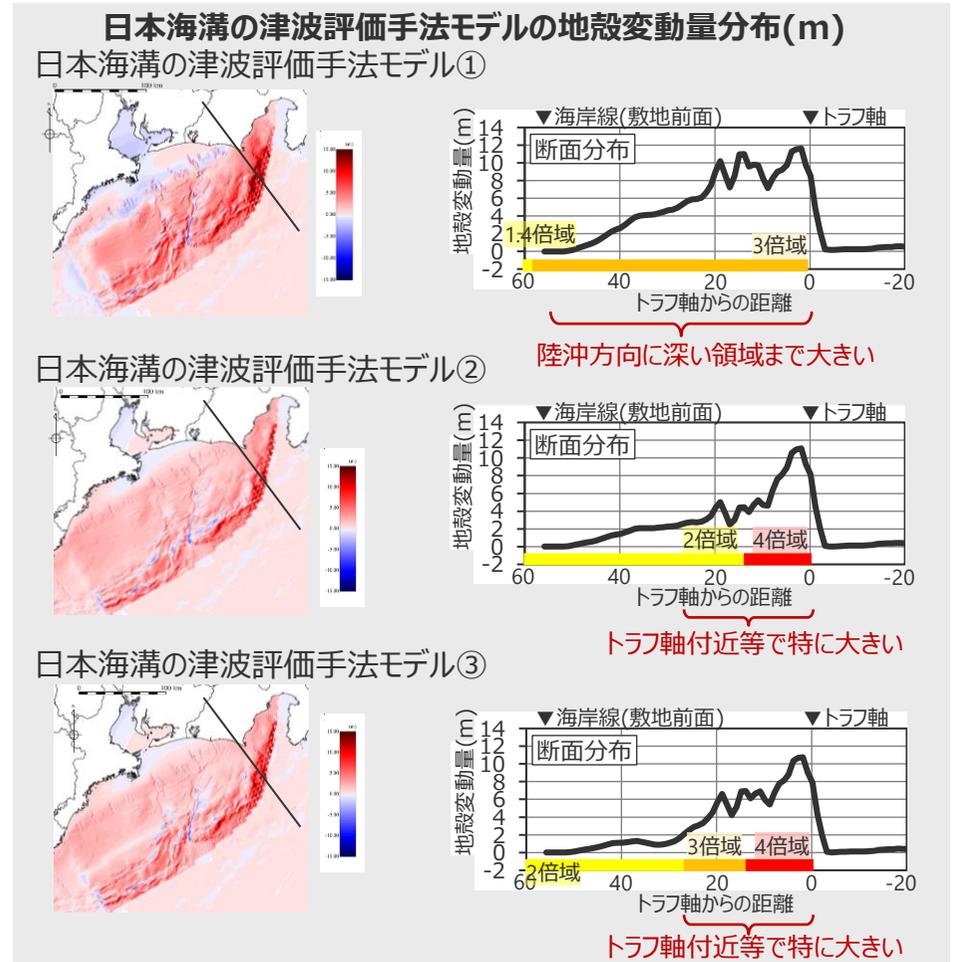
### (日本海溝の手法を用いたモデルとの比較：地殻変動量分布の比較)

- 検討波源モデルA、Dと日本海溝の津波評価手法モデルの地殻変動量分布について、敷地への影響が支配的である東海地域において比較した結果は以下のとおり。
- 敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデルA、Dは、日本海溝の津波評価手法モデルと同程度の最大10m程度の地殻変動量を考慮している。また、陸沖方向の地殻変動量分布について、検討波源モデルAは日本海溝の津波評価手法モデル②③と同じトラフ軸付近等で特に大きい地殻変動量分布の特徴を、検討波源モデルDは日本海溝の津波評価手法モデル①と同じ陸沖方向に深い領域まで大きい地殻変動量分布の特徴をそれぞれ考慮している。



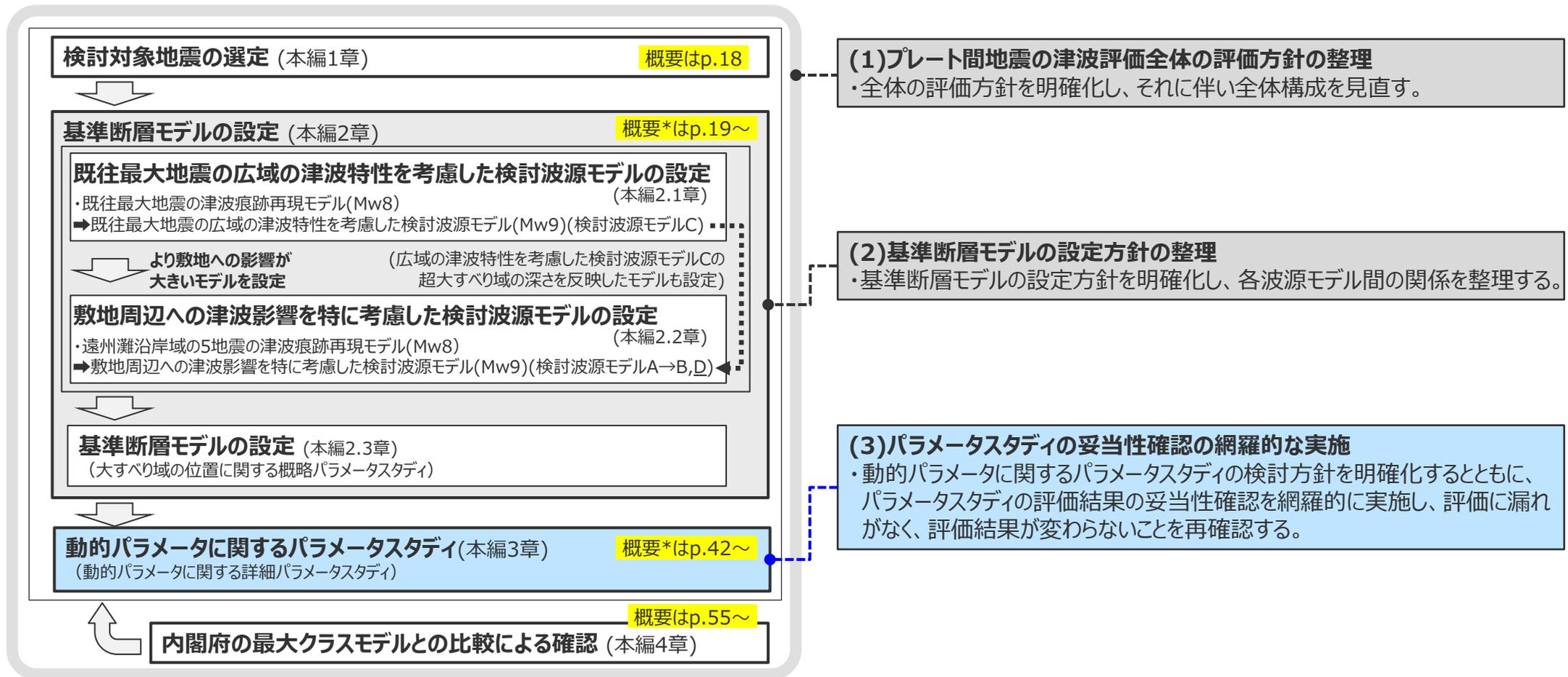
トラフ軸付近等で特に大きい

陸沖方向に深い領域まで大きい



- 以上のことから、内閣府(2012)の手法を用い、既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデルCの特徴も取り入れて設定した検討波源モデルA、Dは、日本海溝の津波評価手法モデルのすべり量分布、地殻変動量分布の特徴が考慮されていることを確認し、日本海溝の津波評価手法モデルとの比較を踏まえてもMw9クラスのモデル設定として妥当であることを確認した。

### 3 動的パラメータに関するパラメータスタディ



\*コメント回答としてモデル設定の比較結果や妥当性確認の結果も含む

# 3 動的パラメータに関するパラメータスタディ

## （動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ：検討方針）

- 設定した複数の基準断層モデルに対し、動的パラメータであるライズタイム、破壊伝播速度、破壊開始点に関するパラメータスタディを、国内外の巨大地震・津波に基づく知見や内閣府の最大クラスモデルのパラメータ設定を含めて、敷地への影響の観点から網羅的に実施し、基準断層モデルごとに影響が大きい評価地点に着目して敷地への影響が最も大きいケースを選定する。
- また、パラメータスタディ結果について、パラメータスタディ因子の影響分析を行って、パラメータスタディの順序などが網羅的な検討として妥当であることの確認を行う。

基準断層モデルの設定  
(本編2章)

○選定した基準断層モデル

評価地点		当該地点への影響が大きい基準断層モデル
水位上昇側	①敷地前面	基準断層モデル1-1~1-5(検討波源モデルA)
	②1~5号取水槽	基準断層モデル3-1~3-3(検討波源モデルD)
水位下降側	③3,4号取水塔	基準断層モデル2-1~2-3(検討波源モデルA)
		基準断層モデル4-1(検討波源モデルD)

動的パラメータに関する  
パラメータスタディ  
(本編3章)

パラメータスタディの  
実施

- 検討対象：基準断層モデル
- 検討項目：動的パラメータの不確かさ（ライズタイム、破壊伝播速度・破壊開始点）
- 検討手順：Mw9クラスの地震ではライズタイムが津波水位に与える影響が大きいと考えられることを考慮して、まずライズタイムのパラメータスタディを実施し、その結果最も影響の大きいケースに対し破壊伝播速度・破壊開始点のパラメータスタディを実施。

水位下降側については、下記のパラメータスタディの妥当性確認の結果、ライズタイムの影響と破壊伝播速度・破壊開始点の影響が同程度で違いが小さかったことなどから、パラメータスタディ順序により選定ケースが変わる可能性も考慮して、ライズタイムと破壊伝播速度・破壊開始点の組合せのパラメータスタディも実施。

○パラメータの設定条件：（詳細は次頁参照）

**ライズタイムのパラメータスタディ**：60～300s

**破壊伝播速度・破壊開始点のパラメータスタディ**

- ・破壊伝播速度：0.7～2.5km/s
- ・破壊開始点：大すべり域の周囲6箇所

妥当性確認の結果を踏まえ、水位下降側については、組合せのパラメータスタディを検討手順に反映

影響の大きい  
ケースの選定

・基準断層モデルごとに影響が大きい評価地点に着目し、敷地への影響が最も大きいケースを選定。

パラメータスタディの  
妥当性確認

・パラメータスタディ結果について、パラメータスタディ因子の影響分析等を行い、パラメータスタディの順序などの実施方法が網羅的な検討として妥当であることを確認する。

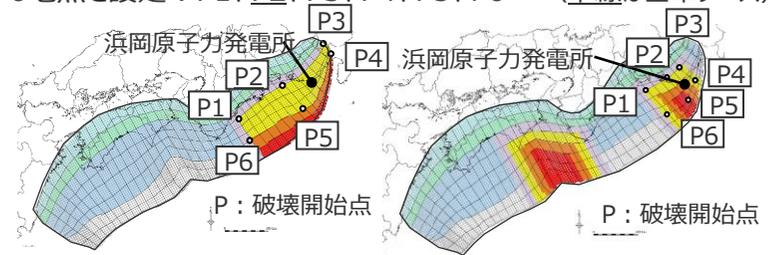
# コメント回答 (プレート間地震の津波評価の方針、論理構成、評価結果の再点検)

## 3 動的パラメータに関するパラメータスタディ

### (動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ：設定条件)

- ライズタイム、破壊伝播速度、破壊開始点のパラメータは、Mw9クラスの巨大地震の津波インバージョンに基づく知見、南海トラフにおける知見、および内閣府の最大クラスモデルのパラメータ設定を含めた範囲で設定する。
- また、動的パラメータのうち敷地の津波評価に影響の大きいと考えられるライズタイムについては、上記に加え、国内外のMw8～9クラスの地震のすべり量とライズタイムの組合せの分析も行い、これを考慮する。
- 動的パラメータに関する詳細パラメータスタディの設定条件は、以下のとおり。

#### 詳細パラメータスタディの設定条件

	設定方法	設定内容
ライズタイム	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 国内外のMw9クラスの巨大地震の津波インバージョンに基づくライズタイム(150～300s)を考慮する。</li> <li>■ また、南海トラフの地震を含む国内外のMw8～9クラスの地震のすべり量とライズタイムの組合せの分析結果に基づき、すべり量に応じたライズタイム(120s)を考慮する。</li> <li>■ さらに、国内外の巨大地震・津波の発生事例に対して裕度を持って設定されている、内閣府の最大クラスモデルのすべり量(37m)とライズタイム(60s)の組合せを考慮する。</li> </ul> <p>→ライズタイムは、<b>60～300s</b>の範囲で設定する。 (詳細は、本編資料p.136～139参照)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 左記に基づくライズタイム60～300sを考慮し、以下のとおり設定： 60,90,120,<u>150</u>,180,210,240,270,300s (下線は基準ケース)</li> </ul>
破壊伝播速度	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 国内外のMw9クラスの巨大地震の津波インバージョンに基づく破壊伝播速度(0.7～2.0km/s)を考慮する。</li> <li>■ また、南海トラフの速度構造から推定される破壊伝播速度(2.5km/s)、内閣府の最大クラスモデルの破壊伝播速度(2.5km/s)を考慮する。</li> </ul> <p>→破壊伝播速度は、<b>0.7～2.5km/s</b>の範囲で設定する。 (詳細は、本編資料p.140参照)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 左記に基づく破壊伝播速度0.7～2.5km/sを考慮し、以下、5ケースを設定： 0.7、1.0、1.5、<u>2.0</u>、2.5km/s (下線は基準ケース)</li> </ul>
破壊開始点	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 国内外のMw9クラスの巨大地震の津波インバージョンに基づく破壊開始点(大すべり域の周囲)を考慮する。</li> <li>■ また、南海トラフの既往地震の破壊開始点(大すべり域の上端に相当)、およびそれを踏まえた内閣府の最大クラスモデルの破壊開始点(大すべり域の上端もしくは下端の中央付近)を考慮する。</li> </ul> <p>→破壊開始点は、<b>大すべり域の周囲(6箇所)</b>に設定する。 なお、大すべり域が2箇所のケースについては、敷地と破壊開始点との位置関係を踏まえて、敷地に近い大すべり域の周囲に設定する。 (詳細は、本編資料p.141参照)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 以下、6地点を設定：P1、P2、P3、P4、P5、P6 (下線は基準ケース)</li> </ul>  <p>基準断層モデル1-1の例 (検討波源モデルA)      基準断層モデル4-1の例 (検討波源モデルD)</p>

# コメント回答（プレート間地震の津波評価の方針、論理構成、評価結果の再点検）

## 3 動的パラメータに関するパラメータスタディ

### （動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ：結果一覧）

■ 動的パラメータに関する詳細パラメータスタディの結果は以下のとおり。

- ① 敷地前面への影響が大きいケース：基準断層モデル1-1（検討波源モデルA、大すべり域1箇所の場合）
- ② 1～5号取水槽への影響が大きいケース：基準断層モデル3-2（検討波源モデルD、大すべり域1箇所の場合）
- ③ 3、4号取水塔への影響が大きいケース：基準断層モデル2-3（検討波源モデルA、大すべり域2箇所の場合）

#### 【水位上昇側】

・各基準断層モデルの詳細パラメータスタディ結果の詳細は本編3章を参照。

モデル名		最大上昇水位(T.P. m)					備考
検討波源モデル	基準断層モデル	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽	
検討波源モデルA (4倍すべり域を東海に設定したモデル)	基準断層モデル1-1	22.7 (22.65)	4.6	7.3	8.1	10.1	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ40km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P4
	基準断層モデル1-2	22.7 (22.64)	4.6	7.3	8.1	10.0	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ30km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P4
	基準断層モデル1-3	22.7 (22.61)	4.6	7.3	8.1	10.1	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ20km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P4
	基準断層モデル1-4	22.6	4.6	7.3	8.1	10.0	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ10km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P4
	基準断層モデル1-5	22.6	4.6	7.3	8.1	10.1	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：基準位置 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P4
検討波源モデルD (超大すべり域の深さを広域モデルと同じとしたモデル)	基準断層モデル3-1	19.4	6.4	8.9	9.5	11.6	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ70km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.0km/s、破壊開始点 P6
		19.5	6.4	8.9	9.5	11.6	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ70km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P6
	基準断層モデル3-2	19.8	6.4	9.0	9.6	11.8	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ60km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 1.0km/s、破壊開始点 P6
	基準断層モデル3-3	19.3	6.4	8.9	9.5	11.7	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ50km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 0.7km/s、破壊開始点 P6
19.0		6.4	8.9	9.5	11.7	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ50km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 1.0km/s、破壊開始点 P6	

#### 【水位下降側】

・朔望平均満潮位T.P. +0.80mを考慮

モデル名		最大下降水位(T.P. m) (水位低下時間)		備考
検討波源モデル	基準断層モデル	3号取水塔	4号取水塔	
検討波源モデルA (4倍すべり域を東海に設定したモデル)	基準断層モデル2-1	海底面(13.2min)	海底面(13.2min)	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：東へ40km・距離130km 【詳細パラスタ】 ライズタイム120s、破壊伝播速度 0.7km/s、破壊開始点 P6
	基準断層モデル2-2	海底面(13.3min)	海底面(13.3min)	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：東へ40km・距離140km 【詳細パラスタ】 ライズタイム120s、破壊伝播速度 0.7km/s、破壊開始点 P6
	基準断層モデル2-3	海底面(13.6min)	海底面(13.5min)	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：東へ30km・距離120km 【詳細パラスタ】 ライズタイム90s、破壊伝播速度 1.0km/s、破壊開始点 P1
検討波源モデルD (超大すべり域の深さを広域モデルと同じとしたモデル)	基準断層モデル4-1	海底面(12.5min)	海底面(12.4min)	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：基準位置・距離140km 【詳細パラスタ】 ライズタイム90s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P1

□：基準断層モデルごとに影響が大きく着目した評価地点  
太字：全評価結果の中で、敷地への影響が最も大きいケース

・朔望平均干潮位T.P. -0.93mを考慮  
・海底面：最大下降水位時に海底面が露出している（水深1m未満である）ことを示す。

# コメント回答（プレート間地震の津波評価の方針、論理構成、評価結果の再点検）

## 3 動的パラメータに関するパラメータスタディ

### （パラメータスタディの妥当性確認：検討方針）

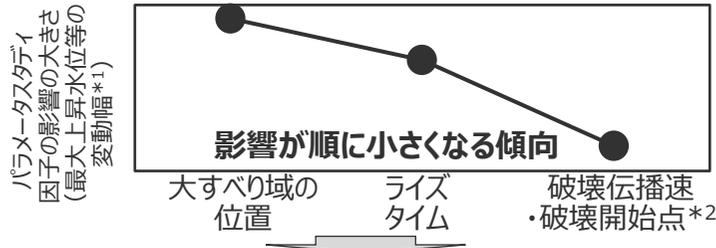
- 概略・詳細パラメータスタディ結果について、パラメータスタディ因子の影響分析を行い、各パラメータスタディ因子が津波評価に与える影響がパラメータスタディを実施した順（大すべり域の位置、ライズタイム、破壊伝播速度・破壊開始点の順）に小さくなる傾向を確認することにより、パラメータスタディの順序などの実施方法が網羅的な検討として妥当であることを確認する。
- また、上記分析の結果、パラメータスタディ因子の影響が同程度で違いが小さい場合には、それらのパラメータスタディの順序によって選定されるケースが変わる可能性もあることを考慮し、当該因子の組合せのパラメータスタディによる検討（組合せ検討）を実施したうえで、組合せ検討の結果に基づいて津波高等の最大ケースが押さえられていることを確認することにより、パラメータスタディの実施方法の妥当性を確認する。

#### ○パラメータスタディの妥当性確認のフロー

##### ➤ パラメータスタディ因子の影響分析

評価地点（水位上昇側：敷地前面、1～5号取水槽、水位下降側：3,4号取水塔）ごとに、当該地点への影響が大きい基準断層モデルのパラメータスタディ結果に基づいて、各パラメータスタディ因子が津波評価に与える影響の大きさ（評価結果の変動幅）を分析する。

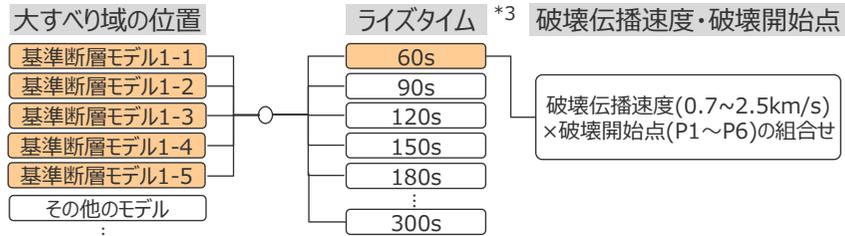
##### ➤ パラメータスタディ因子の影響が順に小さくなる傾向を確認した場合



・より影響が大きい因子から順にパラメータスタディが行われている。  
**➔パラメータスタディの実施方法が網羅的な検討として妥当であることを確認。**  
 （組合せ検討は実施しない。）

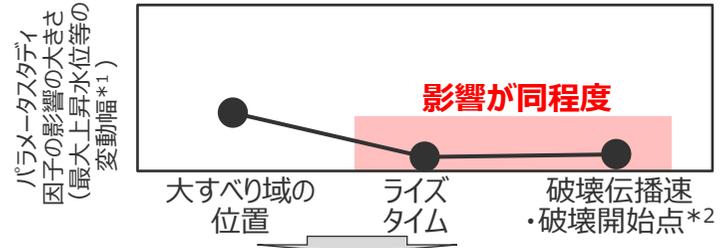
##### ＜パラメータスタディの実施方法＞

基本的な検討での選定ケース



影響が大きい複数ケースを選定    最も影響の大きいケースを選定    最も影響の大きいケースを選定

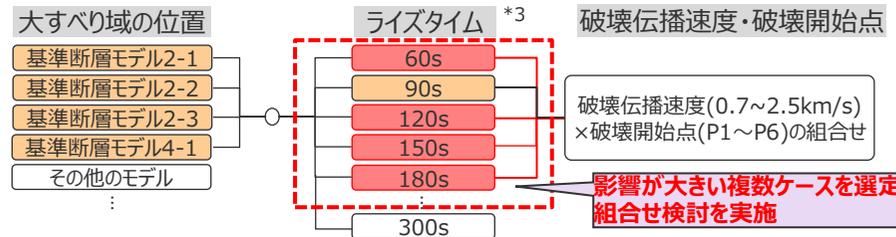
##### ➤ パラメータスタディ因子の影響が同程度であることを確認した場合



・パラメータスタディの順序によって選定されるケースが変わる可能性もあることを考慮し、当該因子の組合せのパラメータスタディによる検討（組合せ検討）を実施し、組合せ検討の結果に基づいて津波高等の最大ケースが押さえられていることを確認。  
**➔パラメータスタディの実施方法が網羅的な検討として妥当であることを確認。**

##### ＜パラメータスタディの実施方法＞

基本的な検討での選定ケース  
 組合せ検討での選定ケース



影響が大きい複数ケースを選定    影響が大きい複数ケースを選定    最も影響の大きいケースを選定

\*1 パラメータスタディ結果に基づく (最大値-最小値)/2    \*2 破壊伝播速度と破壊開始点の変動幅のうち、値が大きい破壊開始点の変動幅を記載。

\*3 組合せ検討での選定ケースは、基準断層モデルにより異なるため、この図では敷地への影響が最も大きい基準断層モデルの場合のものを記載。

# コメント回答 (プレート間地震の津波評価の方針、論理構成、評価結果の再点検)

## 3 動的パラメータに関するパラメータスタディ

### (パラメータスタディの妥当性確認 : 検討結果)

■パラメータスタディ因子の影響分析とパラメータスタディの妥当性確認の結果は以下のとおり。

評価地点		当該地点への影響が大きい基準断層モデル	パラメータスタディ因子の影響分析	パラメータスタディの妥当性確認	
水位 上昇側	敷地 前面	基準断層モデル 1-1~1-5 (検討波源モデルA)	<p>→p.48</p> <p>最大上昇水位の変動幅*1 (m)</p> <p>敷地前面</p>	<p>→p.48</p> <p>・より影響が大きい因子から順にパラメータスタディが行われている。  <b>→パラメータスタディの実施方法が網羅的な検討として妥当であることを確認。</b>          (組合せ検討は実施しない。)</p>	<p>&lt;パラメータスタディの実施方法&gt;</p>
	取水槽	基準断層モデル 3-1~3-3 (検討波源モデルD)	<p>→p.49</p> <p>最大上昇水位の変動幅*1 (m)</p> <p>4号取水槽の例</p>	<p>→p.52</p> <p>・当該因子の組合せ検討を実施。          ・その結果、組合せ検討をせずとも、津波高等の最大ケースが押さえられていることを確認。  <b>→パラメータスタディの実施方法が網羅的な検討として妥当であることを確認。</b></p>	<p>&lt;パラメータスタディの実施方法&gt;</p>
水位 下降側	取水塔	基準断層モデル 2-1~2-3 (検討波源モデルA)	<p>→p.50</p> <p>水位低下時間の変動幅*1 (min)</p> <p>3号取水塔の例</p>	<p>→p.53</p> <p>・当該因子の組合せ検討を実施。          ・その結果、組合せ検討を行うことによって、水位低下時間の最大ケースが押さえられていることを確認*。  <b>→パラメータスタディの実施方法が網羅的な検討として妥当であることを確認。</b></p> <p>*妥当性確認の結果を踏まえ、水位下降側については、組合せのパラメータスタディを検討手順に反映した。(詳細パラメータスタディの検討方針(p.43)参照)</p>	<p>&lt;パラメータスタディの実施方法&gt;</p>
		基準断層モデル4-1 (検討波源モデルD)			<p>→p.50</p> <p>水位低下時間の変動幅*1 (min)</p> <p>3号取水塔の例</p>

基本的な検討での選定ケース  
 組合せ検討での選定ケース

\*1 パラメータスタディ結果に基づく (最大値-最小値)/2

\*2 破壊伝播速度と破壊開始点の変動幅のうち、値が大きい破壊開始点の変動幅を記載。

\*3 組合せ検討での選定ケースは、基準断層モデルにより異なるため、この図では敷地への影響が最も大きい基準断層モデルの場合のものを記載。

# コメント回答 (プレート間地震の津波評価の方針、論理構成、評価結果の再点検)

## 3 動的パラメータに関するパラメータスタディ

(パラメータスタディ因子の影響分析：敷地前面 基準断層モデル1-1~1-5 (検討波源モデルA))

- 水位上昇側の敷地前面の津波水位に与える影響について、敷地前面への影響が大きい基準断層モデル1-1~1-5の評価結果を分析した。
- 基準断層モデル1-1~1-5の敷地前面に関するパラメータスタディでは、大すべり域の位置の影響が支配的となっている。
- また、ライズタイムの影響は破壊伝播速度・破壊開始点の影響より大きいとともに、ライズタイムが短いほど津波水位が大きくなる関係は、破壊伝播速度・破壊開始点に依らない<sup>1)</sup>ことから、水位上昇側のパラメータスタディの順序によって選定されるケースが変わることはなく、敷地に最も影響の大きいケースを選定できていると評価した。

・ここでは、敷地への影響が最も大きいケース（基準断層モデル1-1）を掲載。その他のケースについても同様の傾向となることを確認。

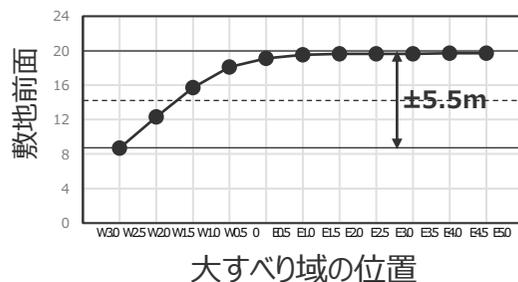
1)本編3章、第1109回 補足説明資料6-5章参照

概略パラメータスタディ	
項目	考察
大すべり域の位置	○ 大すべり域の位置を西側へ移動すると津波高は小さくなる。

詳細パラメータスタディ	
項目	考察
ライズタイム	○ ライズタイムが短いほど津波高は大きくなる。

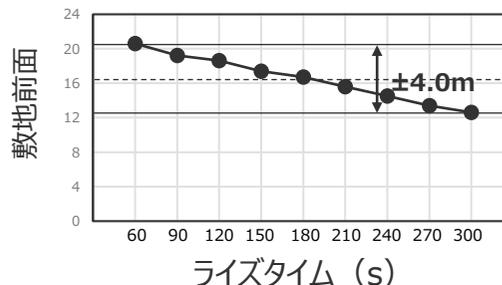
項目	考察
破壊伝播速度	○ 破壊伝播速度・破壊開始点の変化による変動幅は、ライズタイムの変化による変動幅より小さい。
破壊開始点	

最大上昇水位 (T.P.m)

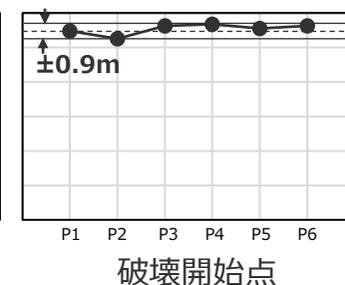
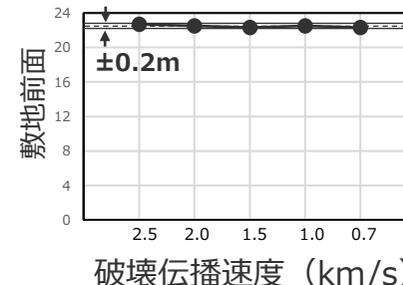


・変動幅は、(最大値 - 最小値) / 2より算出。

最大上昇水位 (T.P.m)



最大上昇水位 (T.P.m)



# コメント回答 (プレート間地震の津波評価の方針、論理構成、評価結果の再点検) 3 動的パラメータに関するパラメータスタディ

(パラメータスタディ因子の影響分析：取水槽 基準断層モデル3-1~3-3 (検討波源モデルD))

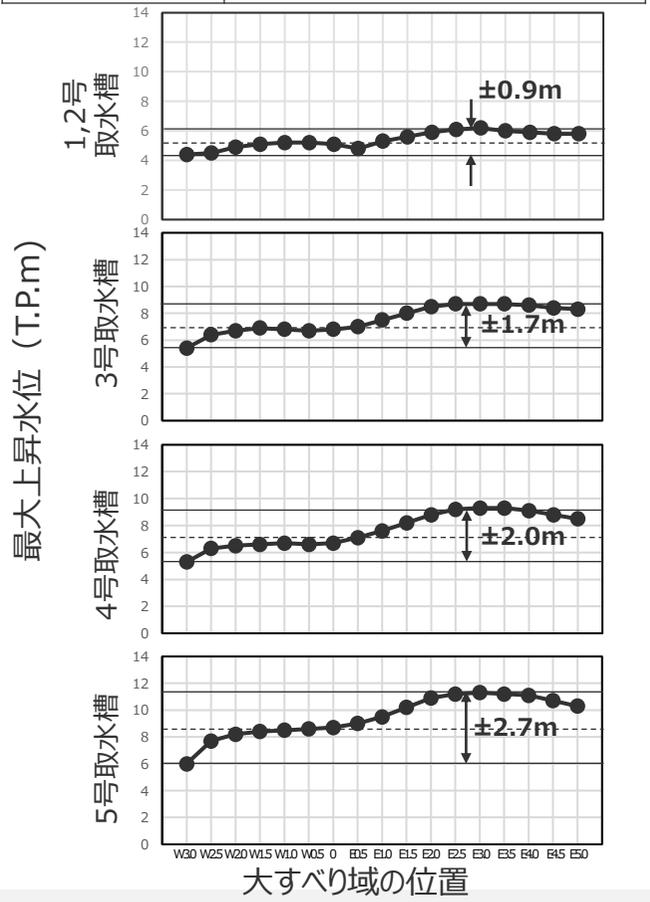
- 水位上昇側の取水槽の津波水位に与える影響について、取水槽への影響が大きい基準断層モデル3-1~3-3の評価結果を分析した。
- 基準断層モデル3-1~3-3の取水槽に関するパラメータスタディでは、大すべり域の位置の影響が支配的となっている。
- また、ライズタイムの影響と破壊伝播速度・破壊開始点の影響は同程度であるが、ライズタイムが短いほど津波水位が大きくなる関係は、破壊伝播速度・破壊開始点に依らない<sup>1)</sup>ことから、水位上昇側のパラメータスタディの順序によって選定されるケースが変わることはなく、敷地に最も影響の大きいケースを選定できていると考えられるが、念のためパラメータスタディの順序によって選定されるケースが変わる可能性もあることを考慮し、当該因子の組合せのパラメータスタディによる検討 (組合せ検討) を実施し、組合せ検討の結果に基づいて津波高の最大ケースが押さえられていることを確認する。

・ここでは、敷地への影響が最も大きいケース (基準断層モデル3-2) を掲載。その他のケースについても同様の傾向となることを確認。

1)本編3章、第1109回 補足説明資料6-5章参照

## 概略パラメータスタディ

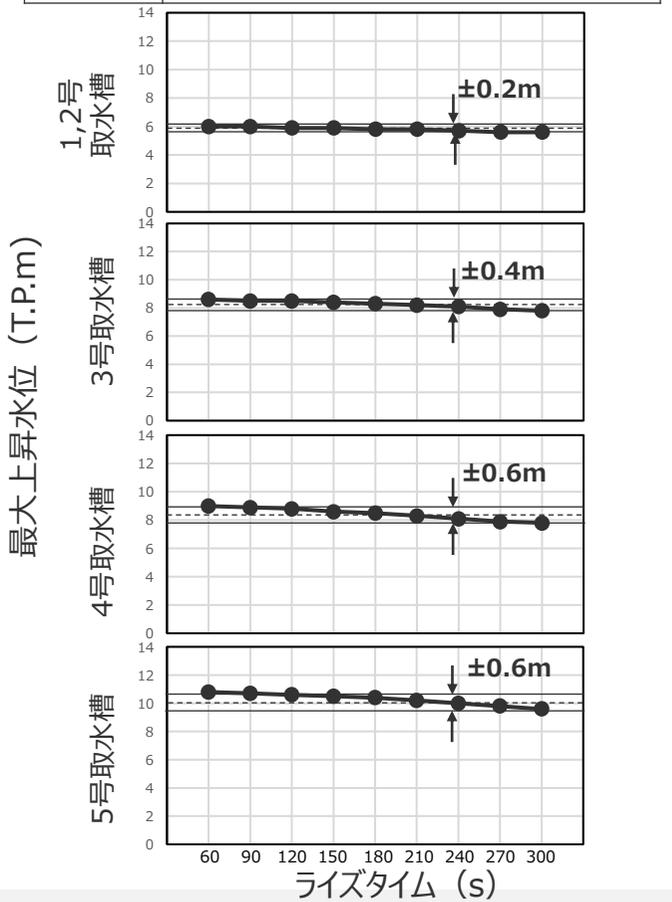
項目	考察
大すべり域の位置	○ 大すべり域の位置を西側へ移動すると津波高は小さくなる。



大すべり域の位置

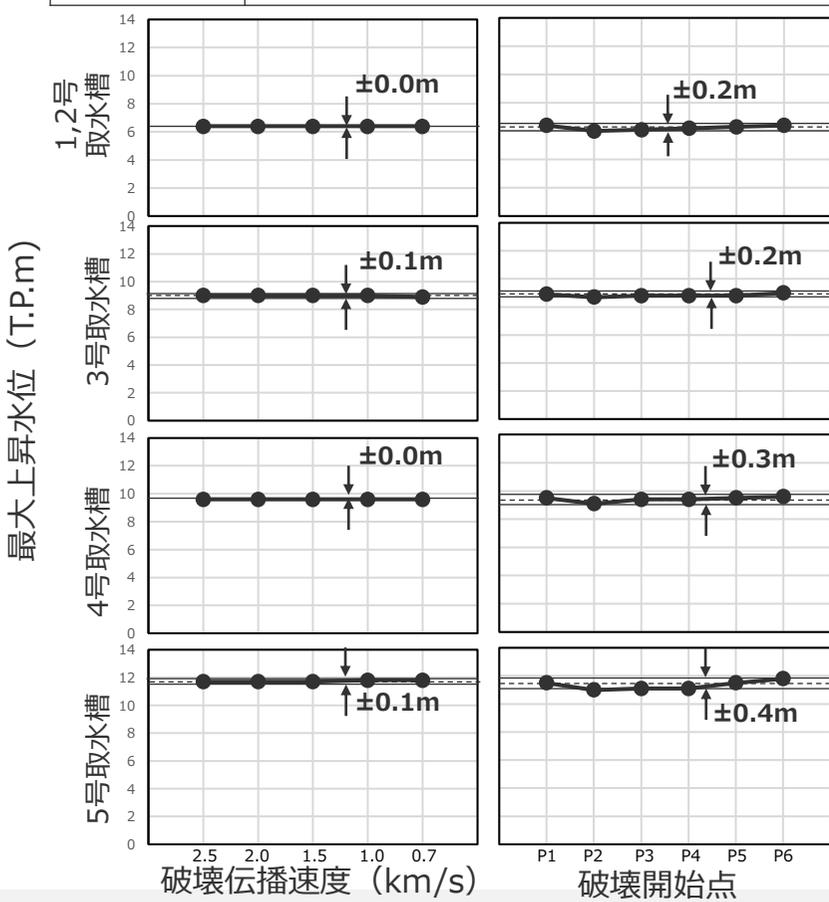
## 詳細パラメータスタディ

項目	考察
ライズタイム	○ 変動幅は小さいものの、敷地前面と同様にライズタイムが短いほど津波高は大きくなる。



ライズタイム (s)

項目	考察
破壊伝播速度 破壊開始点	○ 破壊伝播速度・破壊開始点の変化による変動幅は、ライズタイムの変化による変動幅と同程度。



破壊伝播速度 (km/s)

破壊開始点

・変動幅は、(最大値-最小値) / 2より算出。

# コメント回答 (プレート間地震の津波評価の方針、論理構成、評価結果の再点検)

## 3 動的パラメータに関するパラメータスタディ

(パラメータスタディ因子の影響分析：取水塔 基準断層モデル2-1~2-3,4-1 (検討波源モデルA,D))

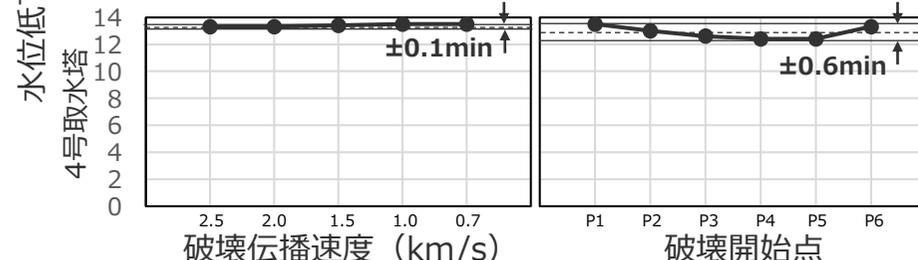
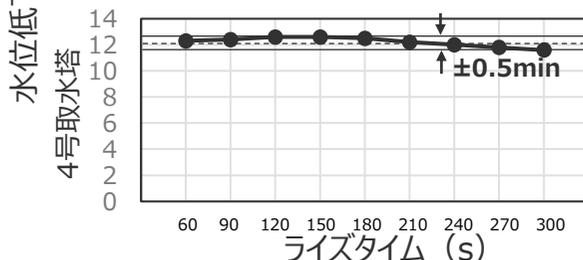
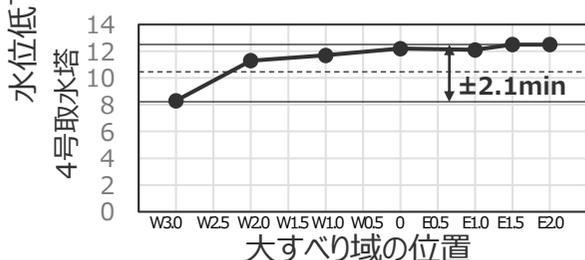
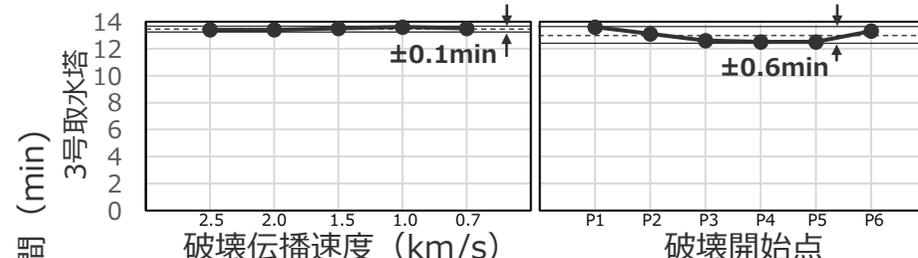
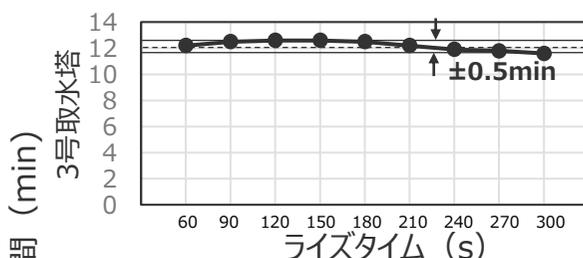
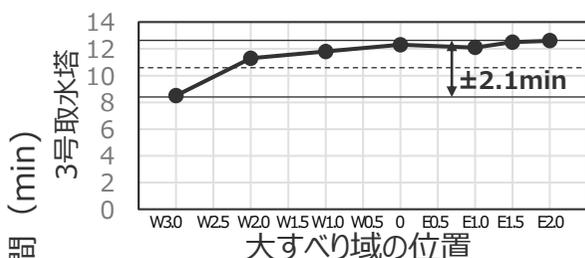
- 水位下降側の取水塔の水位低下時間に与える影響について、取水塔への影響が大きい基準断層モデル2-1~2-3,4-1の評価結果を分析した。
- 基準断層モデル2-1~2-3,4-1の取水塔に関するパラメータスタディでは、大すべり域の位置の影響が支配的となっている。
- 一方、ライズタイムの影響と破壊伝播速度・破壊開始点の影響は同程度で違いが小さいとともに、ライズタイムが水位低下時間に与える影響と、破壊伝播速度・破壊開始点が水位低下時間に与える影響との関係が明確でないことから、パラメータスタディの順序によって選定されるケースが変わる可能性もあることを考慮し、当該因子の組合せのパラメータスタディによる検討（組合せ検討）を実施し、組合せ検討の結果に基づいて水位低下時間の最大ケースが押さえられていることを確認する。

・ここでは、敷地への影響が最も大きいケース（基準断層モデル2-3）を掲載。その他のケースについても同様の傾向となることを確認。

根拠パラメータスタディ	
項目	考察
大すべり域の位置	○ 東側の大すべり域の位置が西に行くにつれ水位低下時間は短くなる。

詳細パラメータスタディ	
項目	考察
ライズタイム	○ ライズタイムが60sから150s程度までは水位低下時間が漸増し、その後150s程度から300sまでは漸減する。

詳細パラメータスタディ	
項目	考察
破壊伝播速度 破壊開始点	○ 破壊伝播速度・破壊開始点の変化による変動幅は、ライズタイムの変化による変動幅と同程度。



・変動幅は、(最大値 - 最小値) / 2 より算出。

### 3 動的パラメータに関するパラメータスタディ

#### （取水槽、取水塔に関する組合せ検討：検討するライズタイムのケース）

- 水位上昇側の取水槽、水位下降側の取水塔に関するライズタイムと破壊伝播速度・破壊開始点の組合せ検討では、基準断層モデルごとに、ライズタイムのパラメータスタディの結果、影響が大きい複数のライズタイムのケースに対し、さらに破壊伝播速度・破壊開始点のパラメータスタディによる検討を実施する。
- 組合せ検討において検討するライズタイムのケースは以下のとおり。  
（組合せ検討の結果、津波高等の最大値が確認できるまでライズタイムのケースを拡大して検討する。）

■：基本的な検討において検討しているライズタイムのケース  
■（ライズタイムのパラメータスタディの結果、敷地への影響が最も大きいケース）  
■：組合せ検討において検討するライズタイムのケース  
■（ライズタイムのパラメータスタディの結果、敷地への影響が大きいケース）

【水位上昇側】 取水槽に関するライズタイムのパラメータスタディ結果と、組合せ検討において検討するライズタイムのケース  
 基準断層モデル3-1 基準断層モデル3-2 基準断層モデル3-3

ライズタイム (s)	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
60	18.2	<b>5.9</b>	<b>8.5</b>	<b>8.9</b>	<b>10.8</b>
90	17.0	<b>5.9</b>	<b>8.5</b>	8.8	10.7
120	15.4	<b>5.9</b>	8.4	8.7	10.6
150	14.1	5.8	8.3	8.6	10.5
180	12.9	<b>5.8</b>	<b>8.2</b>	<b>8.4</b>	<b>10.3</b>
210	12.4	5.7	8.1	8.2	10.1
240	12.2	5.6	8.0	8.0	9.9
270	12.0	5.6	7.9	7.8	9.7
300	11.8	5.5	7.8	7.7	9.6

ライズタイム (s)	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
60	18.7	<b>6.0</b>	<b>8.6</b>	<b>9.0</b>	<b>10.8</b>
90	17.3	<b>6.0</b>	8.5	8.9	10.7
120	15.6	5.9	8.5	8.8	10.6
150	14.2	5.9	8.4	8.6	10.5
180	13.1	5.8	8.3	8.5	10.4
210	12.5	5.8	8.2	8.3	10.2
240	12.3	5.7	8.1	8.1	10.0
270	12.1	5.6	7.9	7.9	9.8
300	11.9	5.6	7.8	7.8	9.6

ライズタイム (s)	最大上昇水位(T.P.m)				
	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
60	17.8	<b>6.0</b>	<b>8.5</b>	<b>8.9</b>	<b>10.6</b>
90	16.5	5.9	<b>8.5</b>	8.8	10.5
120	15.1	5.9	8.4	8.6	10.4
150	14.0	5.8	8.3	8.5	10.3
180	13.0	5.8	8.2	8.3	10.3
210	12.4	5.7	8.1	8.2	10.1
240	12.1	5.7	8.0	8.0	9.9
270	11.8	5.6	7.9	7.8	9.7
300	11.6	5.5	7.8	7.7	9.5

【水位下降側】 取水塔に関するライズタイムのパラメータスタディ結果と、組合せ検討において検討するライズタイムのケース  
 基準断層モデル2-1 基準断層モデル2-2 基準断層モデル2-3 基準断層モデル4-1

ライズタイム (s)	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
60	12.2	12.2
90	12.4	12.3
120	<b>12.5</b>	<b>12.5</b>
150	12.4	<b>12.5</b>
180	12.4	12.4
210	12.3	12.3
240	12.1	12.1
270	11.8	11.8
300	11.6	11.6

ライズタイム (s)	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
60	<b>12.4</b>	12.3
90	<b>12.4</b>	12.3
120	<b>12.4</b>	12.3
150	<b>12.4(12.32)</b>	<b>12.4(12.34)</b>
180	<b>12.4(12.34)</b>	<b>12.4(12.34)</b>
210	12.3	12.3
240	12.2	12.2
270	12.0	12.0
300	11.7	11.7

ライズタイム (s)	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
60	12.2	12.3
90	12.5	12.4
120	<b>12.6(12.57)</b>	<b>12.6(12.54)</b>
150	<b>12.6(12.59)</b>	<b>12.6(12.57)</b>
180	12.5	12.5
210	12.2	12.2
240	11.9	12.0
270	11.8	11.8
300	11.6	11.6

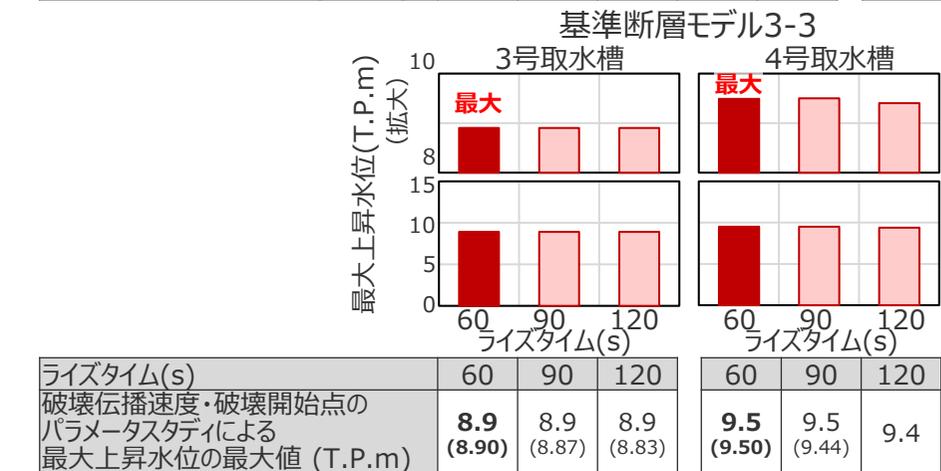
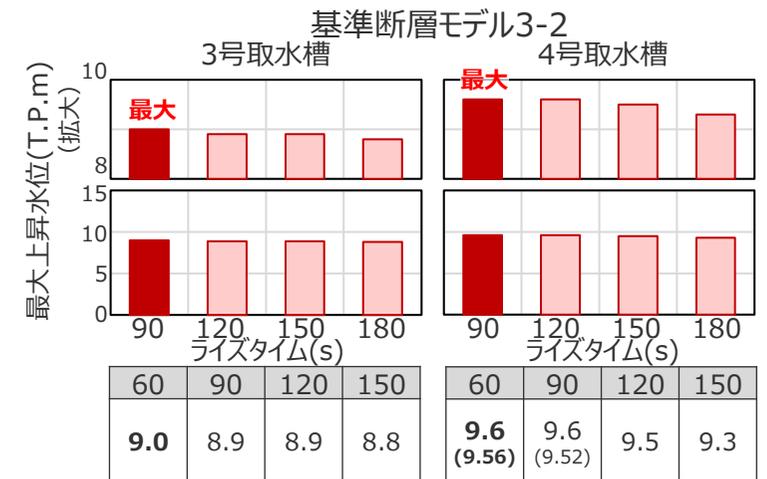
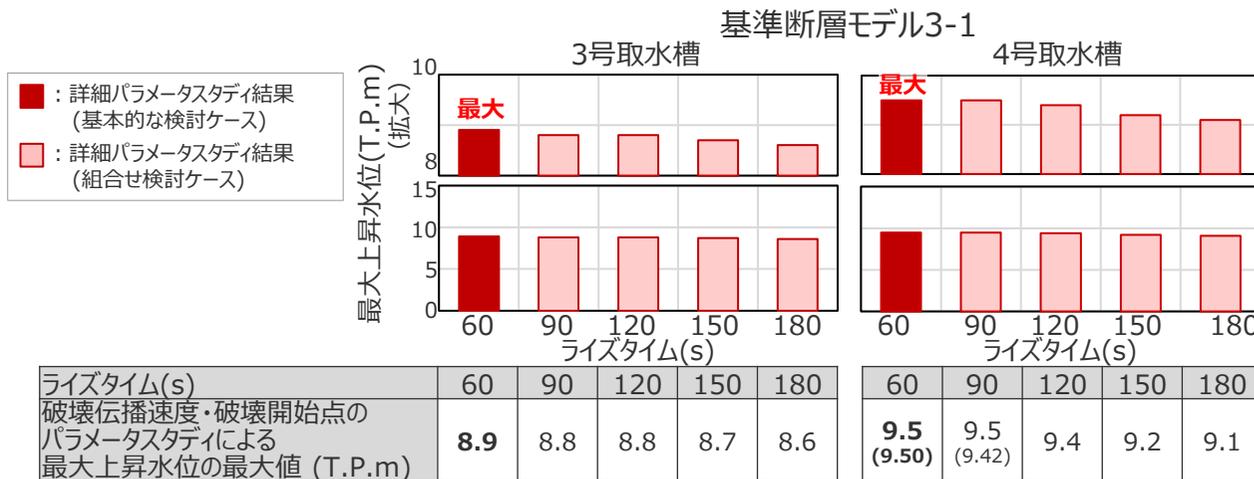
ライズタイム (s)	水位低下時間(min)	
	3号取水塔	4号取水塔
60	<b>12.3</b>	<b>12.2</b>
90	12.2	12.1
120	12.2	12.0
150	12.1	11.9
180	12.0	11.8
210	11.8	11.7
240	11.7	11.5
270	11.4	11.3
300	11.2	11.1

太字：ライズタイムのパラメータスタディの中で、着目する評価地点における最大値

# 3 動的パラメータに関するパラメータスタディ

## （水位上昇側：取水槽に関する組合せ検討結果）

- 水位上昇側の取水槽に関するライズタイムと破壊伝播速度・破壊開始点の組合せ検討では、基準断層モデルごとに、ライズタイムのパラメータスタディの結果、影響が大きい複数のライズタイムのケースに対し、さらに破壊伝播速度・破壊開始点のパラメータスタディによる検討を実施した。
- その結果、組合せ検討によって選定ケースが変わらず、また、津波高の最大ケースが押さえられていることを確認したことから、取水槽に関するパラメータスタディの実施方法が網羅的な検討として妥当と評価した。



組合せ検討によって選定ケースが変わらず、  
また、津波高の最大ケースが押さえられていることを確認

- ・基準断層モデルのライズタイムごとに、影響の大きいケースの数値を記載。（このうち、**太字**は、基準断層モデルごとに、影響の大きいケース）
- ・ここでは3,4号取水槽の結果を掲載。他号機の取水槽に関しても同様に選定されるケースが変わらないことを再確認した。
- ・全ケースの評価結果は、本編資料3章に掲載。

取水槽に関するライズタイムと破壊伝播速度・破壊開始点の組合せ検討結果

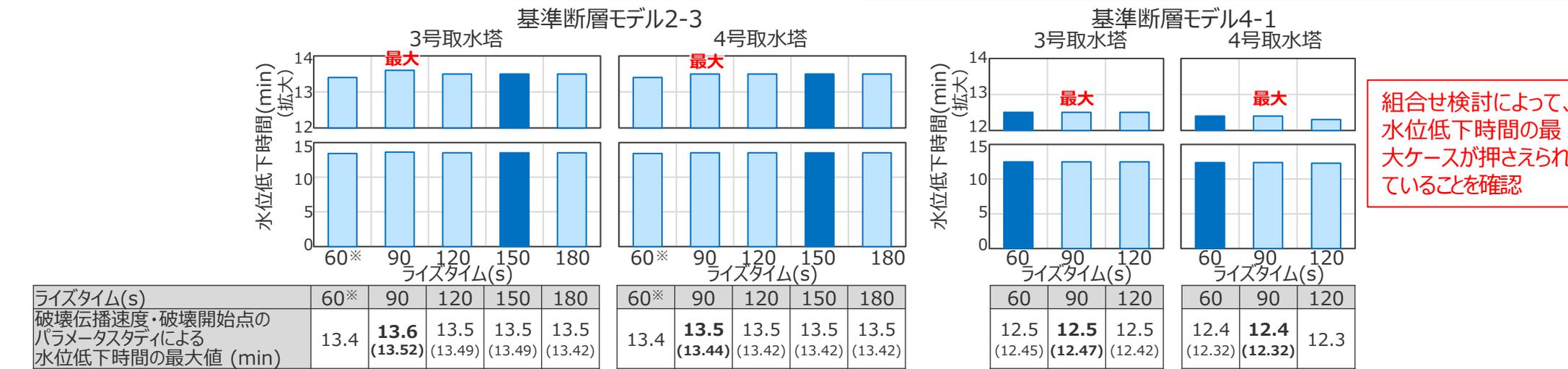
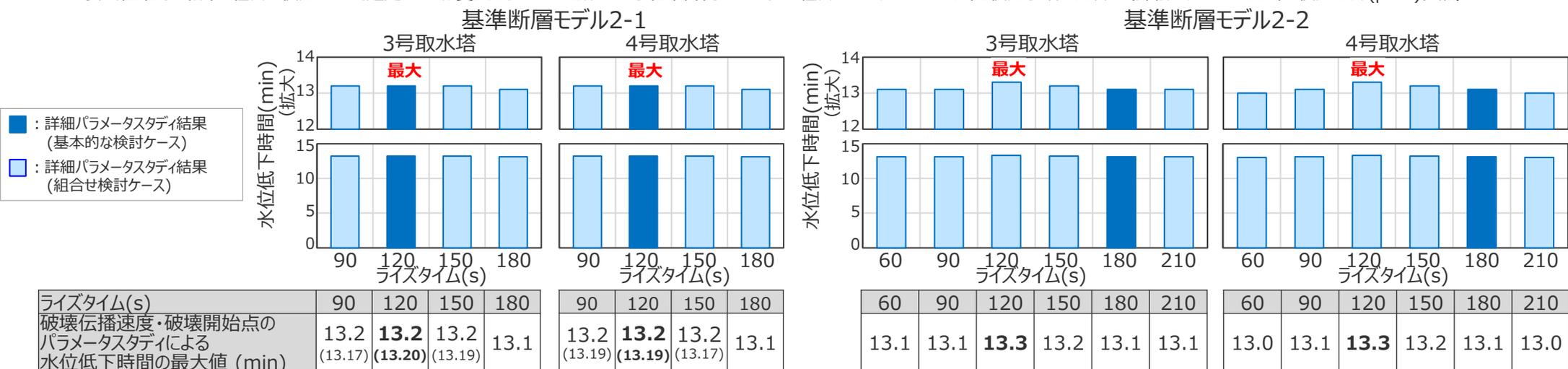
# コメント回答 (プレート間地震の津波評価の方針、論理構成、評価結果の再点検)

## 3 動的パラメータに関するパラメータスタディ

### (水位下降側：取水塔に関する組合せ検討結果)

- 水位下降側の取水塔に関するライズタイムと破壊伝播速度・破壊開始点の組合せ検討では、基準断層モデルごとに、ライズタイムのパラメータスタディの結果、影響が大きい複数のライズタイムのケースに対し、さらに破壊伝播速度・破壊開始点のパラメータスタディによる検討を実施した。
- その結果、組合せ検討によって選定ケースが変更となったが、水位低下時間の最大ケースが押えられていることを確認したことから、取水塔に関するパラメータスタディの実施方法が網羅的な検討として妥当と評価した。

・妥当性確認の結果、組合せ検討によって選定ケースが変更となったことを踏まえ、水位低下側については、組合せのパラメータスタディを検討手順に反映。(詳細パラメータスタディの検討方針(p.43)参照)



組合せ検討によって、水位低下時間の最大ケースが押えられていることを確認

※ ライズタイム90sのケースで水位低下時間が最大となったことを踏まえて、水位低下時間のピークが確認できるよう検討するライズタイムのケースを拡大し、ライズタイム60sのケースでも破壊伝播速度・破壊開始点のパラメータスタディを実施した。

・基準断層モデルのライズタイムごとに、影響の大きいケースの数値を記載。(このうち、**太字**は、基準断層モデルごとに、影響の大きいケース)

・全ケースの評価結果は、本編資料3章に掲載。

### 取水塔に関するライズタイムと破壊伝播速度・破壊開始点の組合せ検討結果

# コメント回答（プレート間地震の津波評価の方針、論理構成、評価結果の再点検）

## 3 動的パラメータに関するパラメータスタディ

### （動的パラメータに関する詳細パラメータスタディ：結果一覧（再掲））

- 動的パラメータに関する詳細パラメータスタディの結果は以下のとおり。
  - 敷地前面への影響が大きいケース：基準断層モデル1-1（検討波源モデルA、大すべり域1箇所のケース）
  - 1～5号取水槽への影響が大きいケース：基準断層モデル3-2（検討波源モデルD、大すべり域1箇所のケース）
  - 3、4号取水塔への影響が大きいケース：基準断層モデル2-3（検討波源モデルA、大すべり域2箇所のケース）

#### 【水位上昇側】

・なお、各基準断層モデルの詳細パラメータスタディ結果の詳細は本編3章を参照。

モデル名		最大上昇水位(T.P. m)					備考
検討波源モデル	基準断層モデル	敷地前面	1,2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽	
検討波源モデルA (4倍すべり域を東海域に設定したモデル)	基準断層モデル1-1	22.7 (22.65)	4.6	7.3	8.1	10.1	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ40km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P4
	基準断層モデル1-2	22.7 (22.64)	4.6	7.3	8.1	10.0	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ30km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P4
	基準断層モデル1-3	22.7 (22.61)	4.6	7.3	8.1	10.1	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ20km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P4
	基準断層モデル1-4	22.6	4.6	7.3	8.1	10.0	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ10km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P4
	基準断層モデル1-5	22.6	4.6	7.3	8.1	10.1	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：基準位置 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P4
検討波源モデルD (超大すべり域の深さを広域モデルと同じとしたモデル)	基準断層モデル3-1	19.4	6.4	8.9	9.5	11.6	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ70km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.0km/s、破壊開始点 P6
		19.5	6.4	8.9	9.5	11.6	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ70km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P6
	基準断層モデル3-2	19.8	6.4	9.0	9.6	11.8	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ60km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 1.0km/s、破壊開始点 P6
	基準断層モデル3-3	19.3	6.4	8.9	9.5	11.7	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ50km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 0.7km/s、破壊開始点 P6
19.0		6.4	8.9	9.5	11.7	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ50km 【詳細パラスタ】 ライズタイム60s、破壊伝播速度 1.0km/s、破壊開始点 P6	

#### 【水位下降側】

・朔望平均満潮位T.P. +0.80mを考慮

モデル名		最大下降水位(T.P. m) (水位低下時間)		備考
検討波源モデル	基準断層モデル	3号取水塔	4号取水塔	
検討波源モデルA (4倍すべり域を東海域に設定したモデル)	基準断層モデル2-1	海底面(13.2min)	海底面(13.2min)	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：東へ40km・距離130km 【詳細パラスタ】 ライズタイム120s、破壊伝播速度 0.7km/s、破壊開始点 P6
	基準断層モデル2-2	海底面(13.3min)	海底面(13.3min)	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：東へ40km・距離140km 【詳細パラスタ】 ライズタイム120s、破壊伝播速度 0.7km/s、破壊開始点 P6
	基準断層モデル2-3	海底面(13.6min)	海底面(13.5min)	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：東へ30km・距離120km 【詳細パラスタ】 ライズタイム90s、破壊伝播速度 1.0km/s、破壊開始点 P1
検討波源モデルD (超大すべり域の深さを広域モデルと同じとしたモデル)	基準断層モデル4-1	海底面(12.5min)	海底面(12.4min)	【根拠パラスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：基準位置・距離140km 【詳細パラスタ】 ライズタイム90s、破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P1

□：基準断層モデルごとに影響が大きく着目した評価地点  
太字：全評価結果の中で、敷地への影響が最も大きいケース

・朔望平均干潮位T.P. -0.93mを考慮  
・海底面：最大下降水位時に海底面が露出している（水深1m未満である）ことを示す。

# 4 内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認

## (検討方針)

- 内閣府「南海トラフの巨大地震モデル検討会」(内閣府(2012))では2011年東北沖地震発生後、中央防災会議「東北地方太平洋沖地震を教訓とした地震・津波対策に関する専門調査会報告」(中央防災会議(2011))の「あらゆる可能性を考慮した最大クラスの巨大な地震・津波を検討していくべき」との提言を受け、最大クラスの津波の推計を行った結果、11ケースの最大クラスの波源モデルを設定している。
- 11ケースの最大クラスの波源モデルによる敷地の津波評価の結果、敷地への影響が大きいケースは、水位上昇側はケース①、水位下降側はケース⑧である。
- ここでは、敷地への影響の大きい内閣府の最大クラスモデル(ケース①、ケース⑧)と、内閣府(2012)の手法を用いて設定した検討波源モデルAについてパラメータ設定と津波評価結果を比較し、敷地への影響の観点から、内閣府の最大クラスモデルのパラメータを含めた検討になっていることを確認することにより、プレート間地震の津波評価の妥当性を確認する。

図2.3(1) 大すべり域、超大すべり域が1箇所のパターン【6ケース】

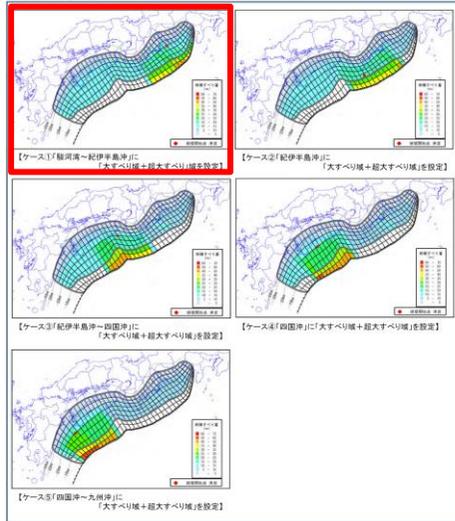


図2.3(2) 大すべり域、超大すべり域に分岐断層も考えるパターン【2ケース】

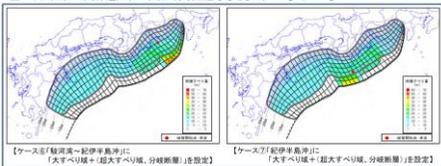
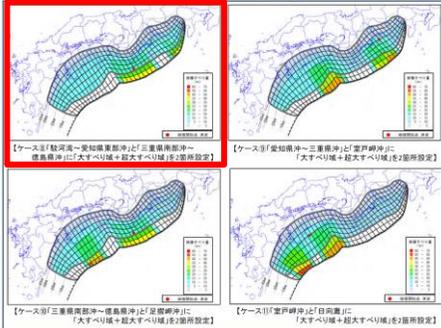


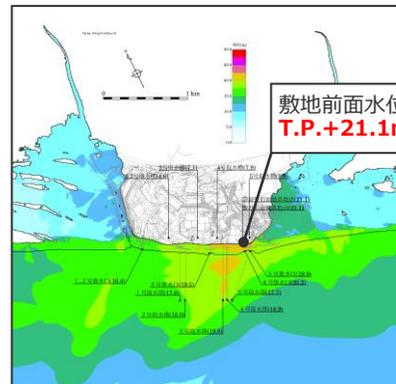
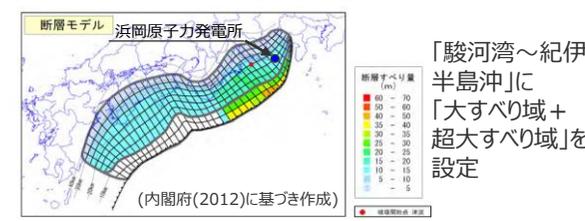
図2.3(3) 大すべり域、超大すべり域が2箇所のパターン【4ケース】



(内閣府(2012))

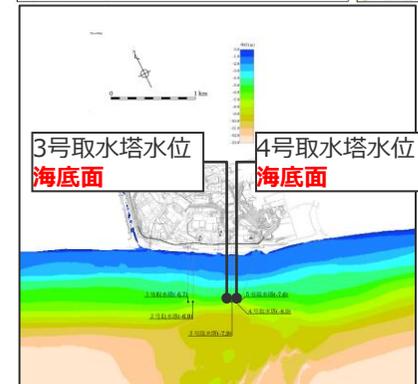
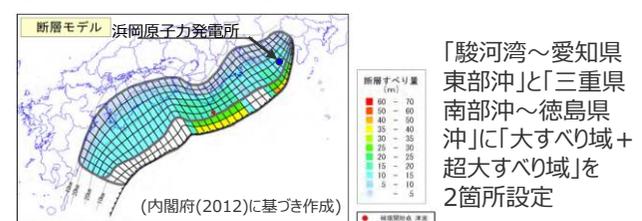
内閣府の最大クラスモデルの波源モデル (ケース①～⑪)

水位上昇側  
【基本的な検討ケース】ケース①

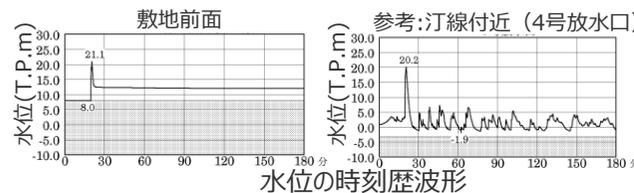


最大上昇水位分布

水位下降側  
【派生的な検討ケース】ケース⑧

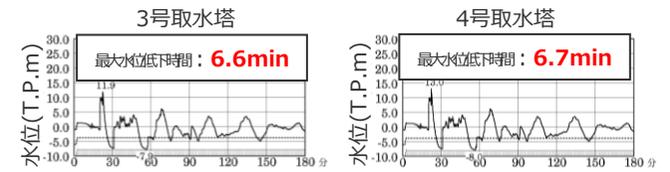


最大下降水位分布



水位の時刻歴波形

- ・ 朔望平均満潮位T.P.+0.80mを考慮
- ・ 網掛け部の上端は当該地点の標高



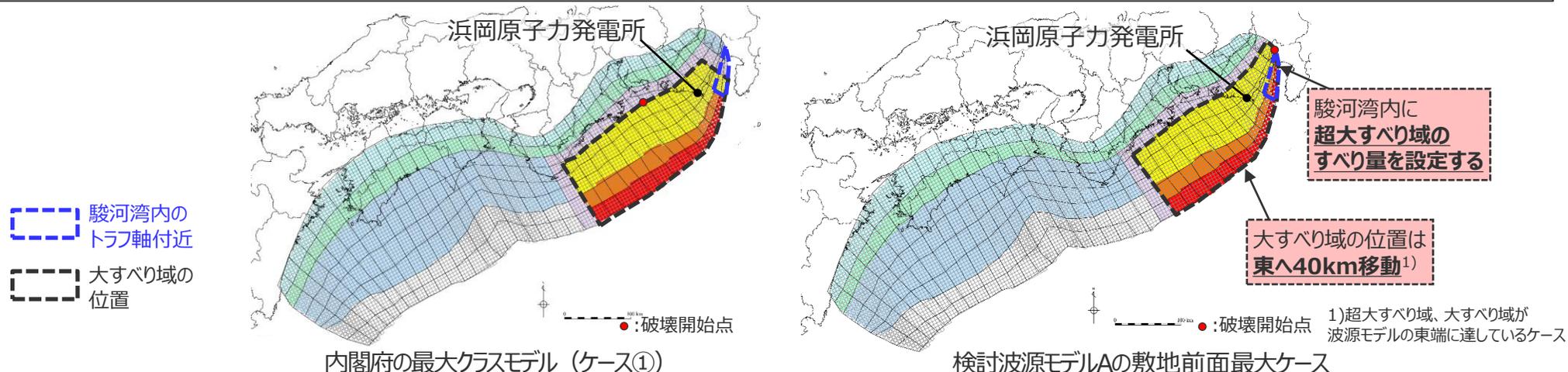
水位の時刻歴波形

- ・ 朔望平均干潮位T.P.-0.93mを考慮
- ・ 海底面：最大下降水位時に海底面がほぼ露出している(水深1m未満である)ことを示す。

# 4 内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認

（水位上昇側：検討波源モデルAの敷地前面最大ケースの分析）

- 内閣府の最大クラスモデルと、検討波源モデルAのうち敷地前面津波高が最大となったケース（基準断層モデル1-1）とのパラメータ設定の違いは以下のとおり。
- 水位上昇側において敷地への影響の大きい内閣府の最大クラスモデル（ケース①）に対して、検討波源モデルAの敷地前面最大ケースは、動的パラメータである破壊開始点の他、駿河湾内に超大すべり域のすべり量を設定していること、超大すべり域・大すべり域を移動させていることにより、敷地への影響の観点から、より幅広く不確かさを考慮したモデルとなっていることを確認した。



項目		内閣府の最大クラスモデル（ケース①）	検討波源モデルAの敷地前面最大ケース （敷地への影響の観点から検討）
駿河湾内のすべり量の設定		超大すべり域のすべり量を設定しない	<b>超大すべり域のすべり量を設定する</b>
超大すべり域・大すべり域の位置		基準位置 （駿河湾～紀伊半島沖）	<b>東へ40km移動<sup>1)</sup></b> （東西100km程度の範囲で10kmずつ移動させたうちの最大ケース）
動的パラメータ	ライズタイム	60s	60s （60～300sのうち最大ケース）
	破壊伝播速度	2.5km/s	2.5km/s （0.7～2.5km/sのうち最大ケース）
	破壊開始点	大すべり域の下端中央	<b>大すべり域の上端東側</b> （大すべり域の周囲6箇所のうち最大ケース）
敷地前面津波高(T.P.+m)		21.1	<b>22.7</b>

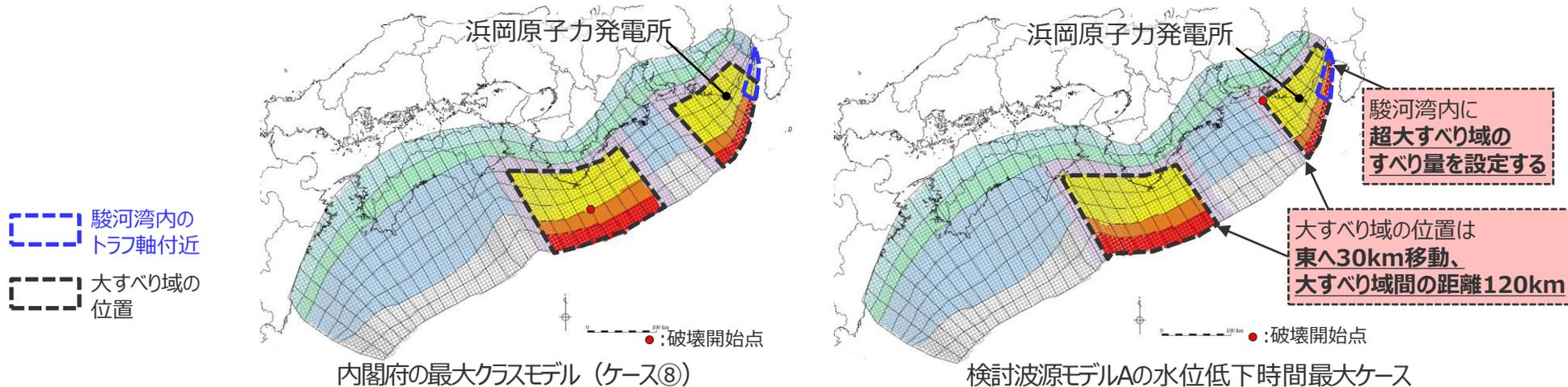
■ :4倍すべり域 ■ :3倍すべり域 ■ :2倍すべり域 ■ :遷移領域 ■ :背景領域 ■ :深い背景領域 ■ :最も深い背景領域 ■ :浅い背景領域(すべり量が0(ゼロ)の領域)

・赤太字は内閣府の最大クラスモデルと異なる設定  
・（）内はパラメータスタディにおける設定範囲

# 4 内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認

## （水位下降側：検討波源モデルAの水位低下時間最大ケースの分析）

- 内閣府の最大クラスモデルと、検討波源モデルAのうち取水塔の水位低下時間が最大となったケース（基準断層モデル2-3）とのパラメータ設定の違いは以下のとおり。
- 水位下降側において敷地への影響の大きい内閣府の最大クラスモデル（ケース⑧）に対して、検討波源モデルAの水位低下時間最大ケースは、動的パラメータ（ライズタイム、破壊伝播速度、破壊開始点）の他、駿河湾内に超大すべり域のすべり量を設定していること、超大すべり域・大すべり域を移動させていることにより、敷地への影響の観点から、より幅広く不確かさを考慮したモデルとなっていることを確認した。



項目		内閣府の最大クラスモデル（ケース⑧）	検討波源モデルAの水位低下時間最大ケース (敷地への影響の観点から検討)
駿河湾内のすべり量の設定		超大すべり域のすべり量を設定しない	<b>超大すべり域のすべり量を設定する</b>
超大すべり域・大すべり域の位置		基準位置、大すべり域間の距離60km (「駿河湾～愛知県東部沖」、「三重県南部沖～徳島県沖」)	<b>東へ30km移動、大すべり域間の距離120km</b> (東西100km程度の範囲で独立に10kmずつ移動させたうちの最大ケース)
動的パラメータ	ライズタイム	60s	<b>90s</b> (60～300sのうち最大ケース)
	破壊伝播速度	2.5km/s	<b>1.0km/s</b> (0.7～2.5km/sのうち最大ケース)
	破壊開始点	大すべり域の上端中央 (昭和東南海地震、昭和南海地震の破壊開始点の位置を参考に設定)	<b>大すべり域の下端西側</b> (大すべり域の周囲6箇所のうち最大ケース)
取水塔水位低下時間		6.7min	<b>13.6min</b>

■ :4倍すべり域 ■ :3倍すべり域 ■ :2倍すべり域 ■ :遷移領域 ■ :背景領域 ■ :深い背景領域 ■ :最も深い背景領域 ■ :浅い背景領域(すべり量が0(ゼロ)の領域)

・ **赤字**は内閣府の最大クラスモデルと異なる設定  
 ・ ( ) 内はパラメータスタディにおける設定範囲

# コメント回答（プレート間地震の津波評価の方針、論理構成、評価結果の再点検）

## 4 内閣府の最大クラスモデルとの比較による確認

### （まとめ）

- 敷地への影響の大きい内閣府の最大クラスモデルと検討波源モデルについて、パラメータ設定と津波評価結果を比較した。
- その結果、プレート間地震の津波評価は、内閣府の最大クラスモデルのパラメータを含めた検討になっていること、そのうえで敷地への影響の観点からより幅広く不確かさを考慮したものとなっていることから、内閣府の最大クラスモデルのパラメータ設定、津波評価結果を踏まえて妥当な評価となっていることを確認した。

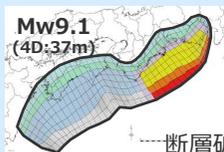
### プレート間地震の津波評価（南海トラフのMw9クラスのプレート間地震の津波評価）

#### ○すべり量分布

既往最大地震の広域の津波特性を考慮した検討波源モデル  
 広域の津波特性を考慮できる土木学会(2016)の手法を用いて設定  
 ↳ 3倍すべり域を広域に設定した場合

**より敷地への影響が大きいモデルを設定**

敷地周辺への津波影響を特に考慮した検討波源モデル  
 正対する沿岸域に大きな津波を発生させる内閣府(2012)の手法を参考に設定  
 ↳ **断層破壊がプレート境界面浅部に伝播する場合**※  
 ↳ 断層破壊がプレート境界面浅部・分岐断層に伝播する場合  
 ↳ 超大すべり域の深さを広域モデルと同じとした場合



※内閣府(2012)によるすべり量分布に対して、駿河湾内にも超大すべり域のすべり量を考慮

断層破壊がプレート境界面浅部に伝播する場合の例

D: 平均すべり量

**オレンジ太字：内閣府の最大クラスモデル（ケース①）のパラメータ**

#### ○パラメータスタディ

超大すべり域・大すべり域の位置	・東西約10kmごとに移動 <b>(駿河湾～紀伊半島沖を含む)</b> ・大すべり域： <b>1箇所</b> 、2箇所
ライズタイム	・ <b>60s</b> ～300s
破壊伝播速度	・ <b>0.7</b> ～ <b>2.5km/s</b>
破壊開始点	・大すべり域の周囲の6地点 <b>(大すべり域の下端中央を含む)</b>

・パラメータスタディは、国内外の巨大地震・津波に基づく知見を踏まえて段階的に実施。

#### ○津波評価結果

敷地 前面	最大上昇水位 (T.P.m)			
	取水槽			
	1,2号	3号	4号	5号
<b>22.7</b>	4.6	7.3	8.1	10.1
19.8	<b>6.4</b>	<b>9.0</b>	<b>9.6</b>	<b>11.8</b>

(上段：プレート境界面浅部に伝播する場合、大すべり域1箇所)  
 (下段：超大すべり域の深さを広域モデルと同じとした場合、大すべり域1箇所)

水位低下時間	
3号取水塔	4号取水塔
<b>13.6min</b>	<b>13.5min</b>

(プレート境界面浅部に伝播する場合、大すべり域2箇所)

(参考)

内閣府の最大クラスモデルの津波評価結果

敷地 前面	最大上昇水位 (T.P.m)			
	取水槽			
	1,2号	3号	4号	5号
21.1	4.6	7.1	7.9	9.9

水位低下時間	
3号取水塔	4号取水塔
<b>6.6min</b>	<b>6.7min</b>

# 目次

---

プレート間地震の津波の全体概要	6
コメント回答（プレート間地震の津波評価の方針、論理構成、評価結果の再点検）	13
<b>プレート間地震の津波評価結果まとめ</b>	<b>59</b>

# プレート間地震の津波評価結果まとめ

## プレート間地震の津波評価結果（再掲）

■ プレート間地震の津波評価結果は以下のとおり。

【検討波源モデルの津波評価結果】

（水位上昇側）

波源モデル	最大上昇水位(T.P. m)*1					備考
	敷地 前面	1,2号 取水槽	3号 取水槽	4号 取水槽	5号 取水槽	
基準断層モデル1-1(検討波源モデルA)	22.7(22.65)	4.6	7.3	8.1	10.1	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ40km ライスタイム60s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P4
基準断層モデル1-2(検討波源モデルA)	22.7(22.64)	4.6	7.3	8.1	10.0	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ30km ライスタイム60s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P4
基準断層モデル1-3(検討波源モデルA)	22.7(22.61)	4.6	7.3	8.1	10.1	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ20km ライスタイム60s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P4
基準断層モデル1-4(検討波源モデルA)	22.6	4.6	7.3	8.1	10.0	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ10km ライスタイム60s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P4
基準断層モデル1-5(検討波源モデルA)	22.6	4.6	7.3	8.1	10.1	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：基準位置 ライスタイム60s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P4
基準断層モデル3-1(検討波源モデルD)	19.4	6.4	8.9	9.5	11.6	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ70km ライスタイム60s、破壊伝播速度2.0km/s、破壊開始点P6
	19.5	6.4	8.9	9.5	11.6	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ70km ライスタイム60s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P6
基準断層モデル3-2(検討波源モデルD)	19.8	6.4	9.0	9.6	11.8	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ60km ライスタイム60s、破壊伝播速度1.0km/s、破壊開始点P6
基準断層モデル3-3(検討波源モデルD)	19.3	6.4	8.9	9.5	11.7	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ50km ライスタイム60s、破壊伝播速度0.7km/s、破壊開始点P6
	19.0	6.4	8.9	9.5	11.7	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域1箇所：東へ50km ライスタイム60s、破壊伝播速度1.0km/s、破壊開始点P6

\*水位上昇側：朔望平均満潮位T.P.+0.80mを考慮

（水位下降側）

波源モデル	最大下降水位(T.P. m) (水位低下時間)		備考
	3号取水塔	4号取水塔	
基準断層モデル2-1(検討波源モデルA)	海底面(13.2min)	海底面(13.2min)	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：東へ40km・距離130km ライスタイム120s、破壊伝播速度0.7km/s、破壊開始点P6
基準断層モデル2-2(検討波源モデルA)	海底面(13.3min)	海底面(13.3min)	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：東へ40km・距離140km ライスタイム120s、破壊伝播速度0.7km/s、破壊開始点P6
基準断層モデル2-3(検討波源モデルA)	海底面(13.6min)	海底面(13.5min)	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：東へ30km・距離120km ライスタイム90s、破壊伝播速度1.0km/s、破壊開始点P1
基準断層モデル4-1(検討波源モデルD)	海底面(12.5min)	海底面(12.4min)	【概略/バスタ 詳細/バスタ】 東海地域の大すべり域2箇所：基準位置・距離140km ライスタイム90s、破壊伝播速度2.5km/s、破壊開始点P1

\*水位下降側：朔望平均干潮位T.P.-0.93mを考慮

\*海底面：最大下降水位時に海底面がほぼ露出している（水深1m未満である）ことを示す。

\*1 防波壁および3~5号取水槽溢水防止壁の高さを無限大として解析を実施。また、1・2号取水槽周りに高さ無限大の壁を設定して解析を実施。

□：基準断層モデルごとに影響が大きく着目した評価地点

太字：全評価結果の中で、敷地への影響が最も大きいケース

# プレート間地震の津波評価結果まとめ プレート間地震の津波評価結果

## 水位上昇側

### 基準断層モデル1-1

検討波源モデル A 大すべり域の数：東海地域1箇所  
大すべり域の位置：東へ40km移動  
ライスタイム60s  
破壊伝播速度 2.5km/s、破壊開始点 P4

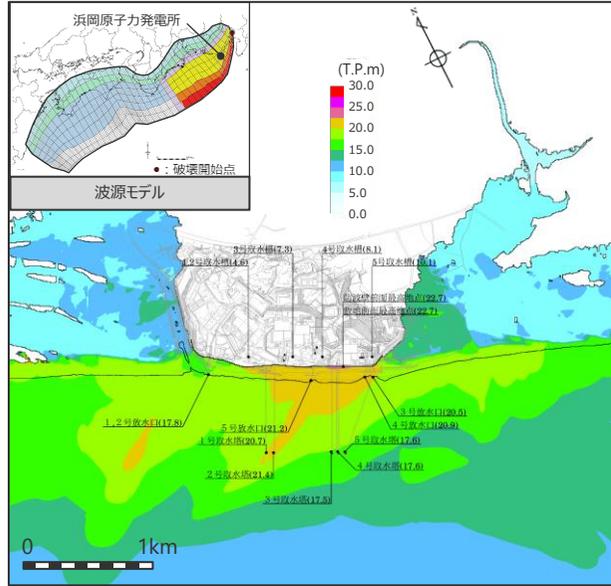
### 基準断層モデル3-2

検討波源モデル D 大すべり域の数：東海地域1箇所  
大すべり域の位置：東へ60km移動  
ライスタイム60s  
破壊伝播速度 1.0km/s、破壊開始点 P6

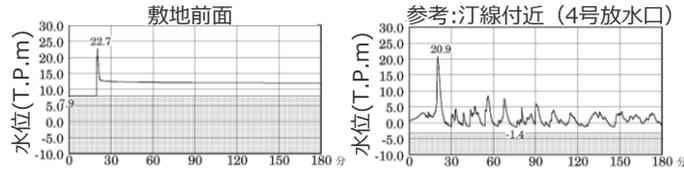
## 水位下降側

### 基準断層モデル2-3

検討波源モデル A 大すべり域の数：東海地域2箇所  
大すべり域の位置：敷地に近い大すべり域を東へ30km移動・  
大すべり域間の距離120km、  
ライスタイム 90s、破壊伝播速度 1.0km/s、破壊開始点 P1

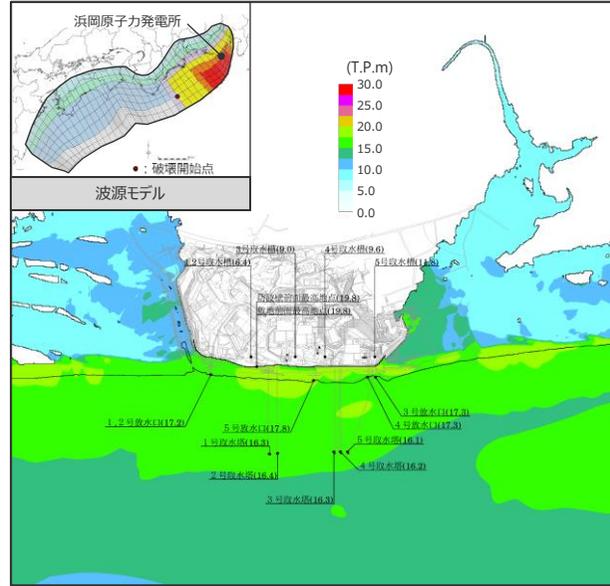


最大上昇水位分布

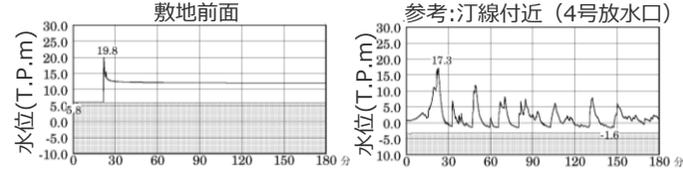


水位の時刻歴波形

- ・網掛け部の上端は当該地点の標高
- ・朔望平均満潮位 T.P. + 0.80m を考慮

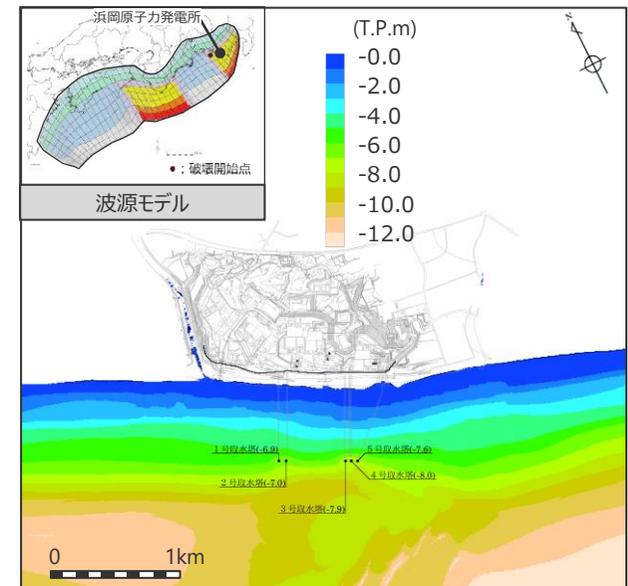


最大上昇水位分布

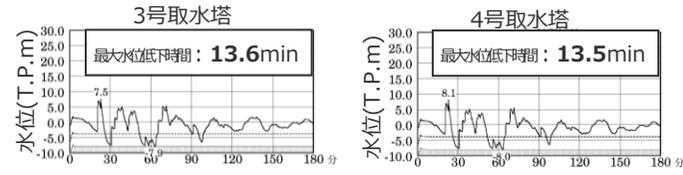


水位の時刻歴波形

- ・網掛け部の上端は当該地点の標高
- ・朔望平均満潮位 T.P. + 0.80m を考慮



最大下降水位分布



水位の時刻歴波形・網掛け部の上端は当該地点の標高

- ・朔望平均干潮位 T.P. - 0.93m を考慮
- ・点線は取水塔呑口 下端レベル
- ・海底面：最大下降水位時に海底面がほぼ露出している（水深1m未満である）ことを示す。

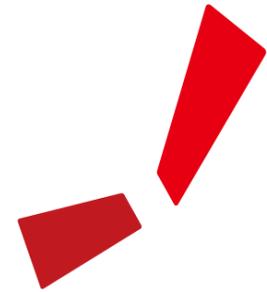
最大上昇水位(T.P.m)				
敷地前面	1・2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
22.7 <sup>*1</sup>	4.6	7.3	8.1	10.1

最大上昇水位(T.P.m)				
敷地前面	1・2号取水槽	3号取水槽	4号取水槽	5号取水槽
19.8	6.4 <sup>*2</sup> (3.1)	9.0	9.6	11.8

最大下降水位(T.P.m)(水位低下時間)	
3号取水塔	4号取水塔
海底面 (13.6min)	海底面 (13.5min)

\*1 防波壁の高さを無限大として解析を実施。今後、基準津波の確定後、必要な対策を実施していく。

\*2 1・2号取水槽周りに高さ無限大の壁を設定して解析を実施。なお、括弧内の数値は、取水路の設備対策（1号取水路出口流路の縮小(流路面積1.0m<sup>2</sup>)・2号取水路出口流路の閉塞）を実施した場合における解析結果。



中部電力